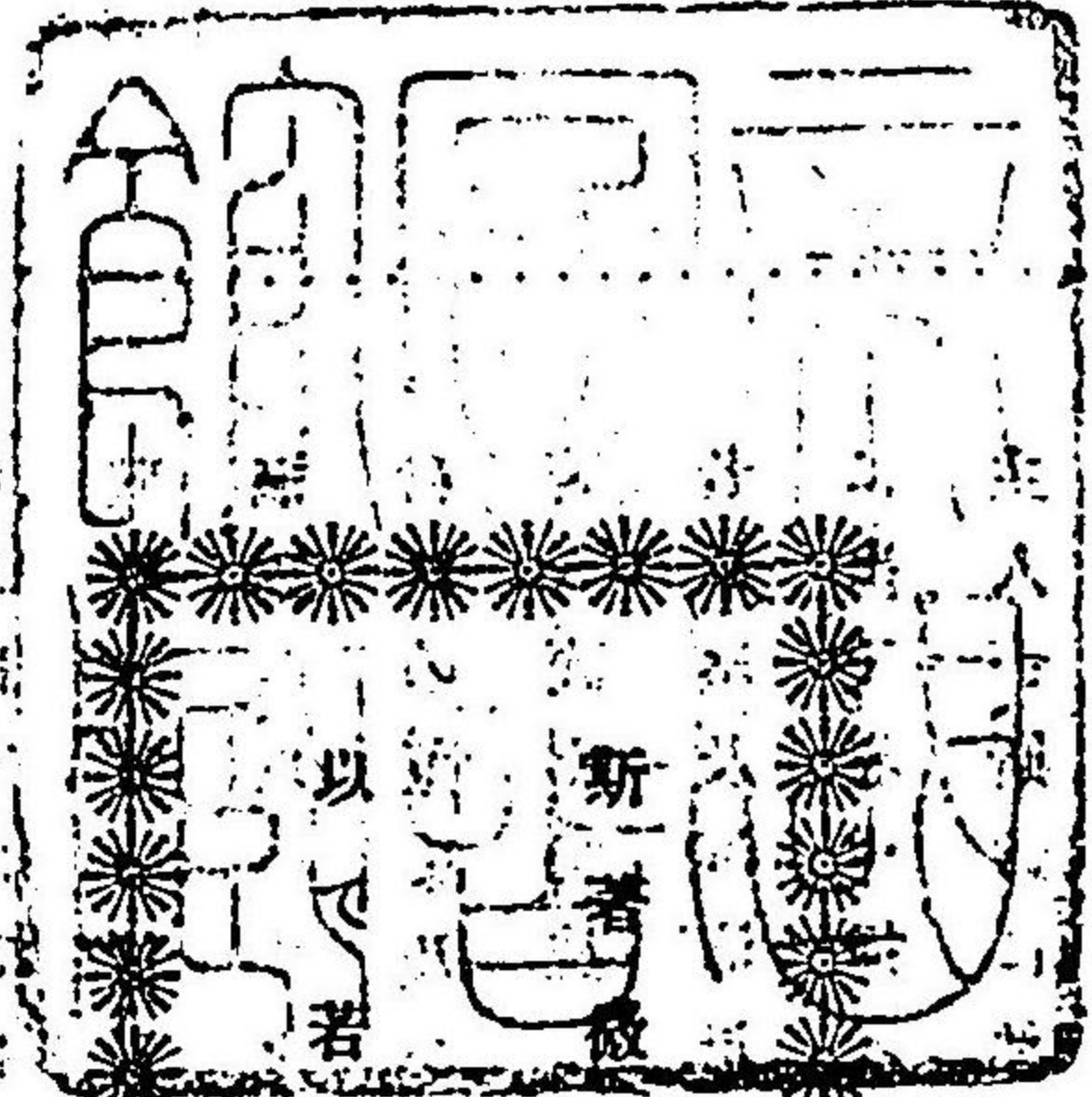


76
1977

新若松港





新 著 成 績 著 者 氏 名
な り と 雖 じ も 捧 げ て
以 下 若 松 港 の 前 途 に 送 付 す



『新若松港は若松港及筑豊炭田の現況を描き工業の
状態商業の消長を寫し、且つ若松港附近の光景をも
網羅し、以つて之を遍く世に紹介す。
材料の蒐集及び公刊の勞を取りし先賢少なからず、
著者謹んで茲に其の好意を拜謝す。
若松港及洞海岸の縮圖は、瀧本復三氏の苦心經營
に出で、卷中挿入の各種寫真版の原影は、山本鶴影堂
主人が斯道に熱心なるを表彰せり。

序

四十年前、百一戸の横濱村は、今や
一躍して人口十六萬、帝國港灣の
第一位に進めり。
十餘年前、三百許戸の若松村は、今
や人口廿萬五千、九州樞要の港灣
となり、一年一千萬圓の富を輸出
しつゝあり。

序

進むと知て退くと知らざるは眞
 に若松港也、一躍三躍、遂に帝國港
 灣第何位萬達すべき乎、請ふ之を
 斯著に問ふ。百戦百勝の善を待たず
 第一益を盡めり。安川敬一郎
 一躍して人口十六萬帝國新領の
 四十半前百一尺の遊園地を今
 有

序

序
 題して新若松港と云ふも眞に一
 小冊子のみ、然も斯著は表面若松
 の現今を示めして、裏面其將來を
 教ふるもの歟。
 大事業は、縦も天時地利に因ると
 雖も、亦た必ず人の手を待つ、若松
 の現今を語らざる者は、將來をして益

序

す大且偉ならしむる義務あり。思ふに、斯著は若松港の好ガイド
 であるべし。平岡浩太郎
 小根子
 平岡浩太郎

序

著者の序に代ふ
 黒金剛石の異彩、人類社會を光被する間、日本の西、
 亞細亞の東、玄洋に瀕する若松の命運は、東洋の文
 明と環聯して、毫も相離るゝを得ず。曰く、港灣改築、
 市街建設、世は驚々として動けり、然も、地方的感情は君子の心をも撼かさんとせ
 り、此時に際し屹然として大山巨嶽の如きは、蓋し
 我が若松歟。若松は天時地利共に之を得たり、其の駭々乎とし
 て隆運に嚮ふ所以、最も知り易き耳、若し夫れ第十
 九世紀末後の一大人工を加へん乎、九州の富茲に
 集散せられ、帝國の實業茲に刺撃せらる可し。然り、若松は黒金剛石の集散地として、九州工業の

序

中心點として、未來の大港灣として、既に社會の耳目を聳動し來り、其の實情を知らんと欲する者多し。是に於て斯著の必要生ず、必要生じて而して斯著ある、豈に世の營利的刊行物と同一視せらるべきを希ふ、斯著は實は著者が若松の前途に饒せん爲め、微衷を捧げたる義務的刊行物なり。

友人辰巳敬民子筆を操觚社會に投じ、予が海邊の浪、大俱樂部に寓する十旬、一夕燈を剪て、若松の現在及將來を談ず、予爾來林を摘み墨を磨じ、遂に此冊卷を爲じて、予は興ぶ、予が健筆は世の知る處、予は只だ斯著を社會に紹介するに共は、若松の名を天下に紹介せば、是は故歎。

光緒十七年閏日本の西曆一千九百零一年三月に於て

玄海 太郎

○ 蒸氣ヲ利用シ機械ヲ運轉スル各工業家及礦業者ニシテ直接間接ノ利益ヲ計ラントスル諸氏ハ左ノ廣告ヲ見ラルベシ

○ 機械用トシテ從來不利益ナル種油白絞油等ヲ使用セラル、諸君ハ最大有益ナル日本礦油株式會社ノ礦油ヲ用ヒラルベシ

機 械 用 礦 油 廣 告

○ 歐米各國ニ於テ海陸共強大機械ノ運轉ハ悉ク機械用礦油ヲ用ヒテ今日ノ盛大ニ至ラシメタリ

○ 種油及白絞油ヲ全廢シ礦油ヲ使用スレバ機械ノ汚損ト磨滅ヲ減シ經濟上ノ利益ハ殆ント倍額ノ差アリ

機械用礦油種別用法概畧

(前付の二)

● シリンダーチイル

此油ハ機械ノ内部(濾筒内)ニ注入シテ腐蝕ノ虞レナク粘着性ヲ有セサル故ニ滑走ヲ容易ナラシメ機械ノ命脈ヲ延長シ石炭ノ需用ヲ減スル等最モ有益ナリ

● エンジンチイル

此油ハ(白絞油代用)シリンダーニ亞クベキ其油ニシテ諸機械ノ關節ニ注入シテ大機械ノ外部用ニ適ス

● マシンチイル

此油ハ(種油白絞油ノ代用)小形(エンジン)(メタル)等ノケ所ニ注入シテ最モ効能多ク價格亦廉ニシテ經濟上殊ニ有益ノ品ナリ

● スピンドルチイル

此油ハ紡績機械ノ(スピンドルルーム)及(マシン)等ノ小部分ノ廻轉神速輕妙ナル機械ニ應用シテ著ナリ効用顯

● 電氣油

此油ハ諸機械中最モ迅速ニ回轉スル發電機械(ダイナモ)ニ應用ノ目的ヲ以テ製造シタルモノナレバ發電機械設置ノ工場ニハ必用ナリ

● 車軸洗器

油

此油ハ礦山、鐵道ノ貨車列車及其他土工用(トロッコ)等ノ車軸ニ注入シテ効用著シ

右之品遠回製造場米國ニ於テ最近ノ發明ニ係ル斬新ナル機械ヲ設置シ益々良品ヲ製出シ廉價ヲ主トシ汎シ販賣仕候間多少ニ不係陸續御注文ノ程奉希上候

● 殺虫油

油

此油ハ農家稻作上必要ノモノニシテ螟虫蠅虫ノ驅除撲殺ニ用ヰテ最大有益アリ

(前付の三)

筑前國若松港

日本礦油株式會社出張店

越後國中蒲原郡

日本礦油株式會社鹽谷坑業所

越後國中蒲原郡

日本礦油株式會社新津支店

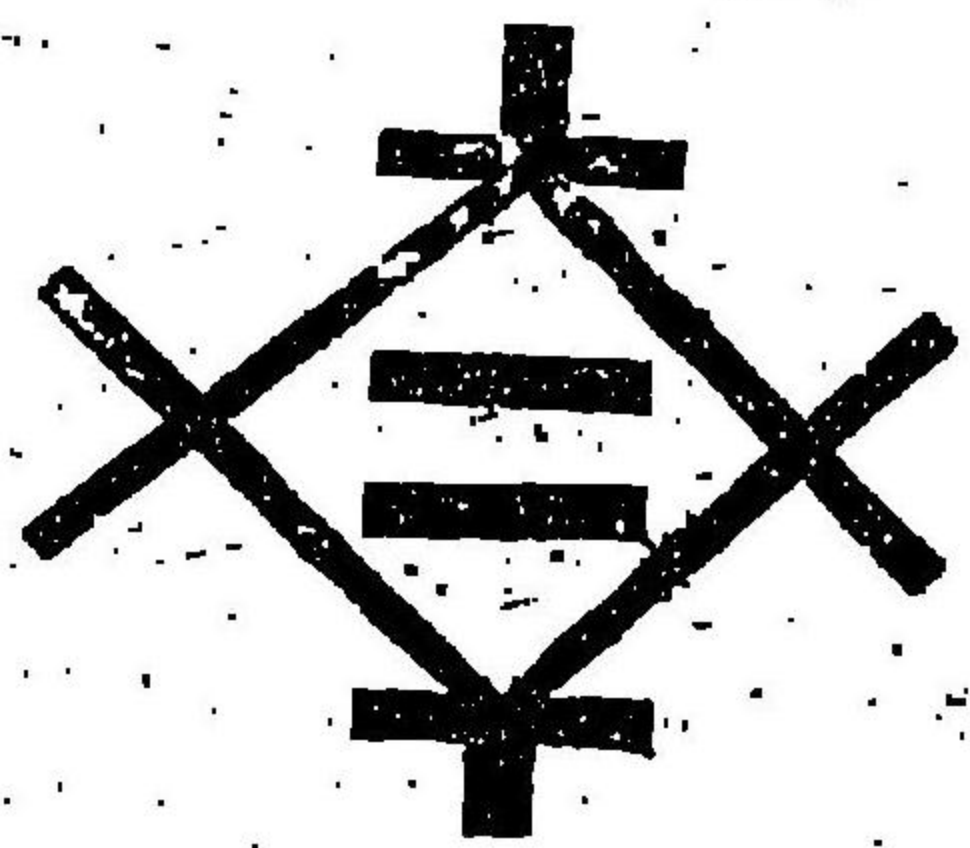
東京深川區四町

日本礦油株式會社東京支店

大阪府下西成郡難波村

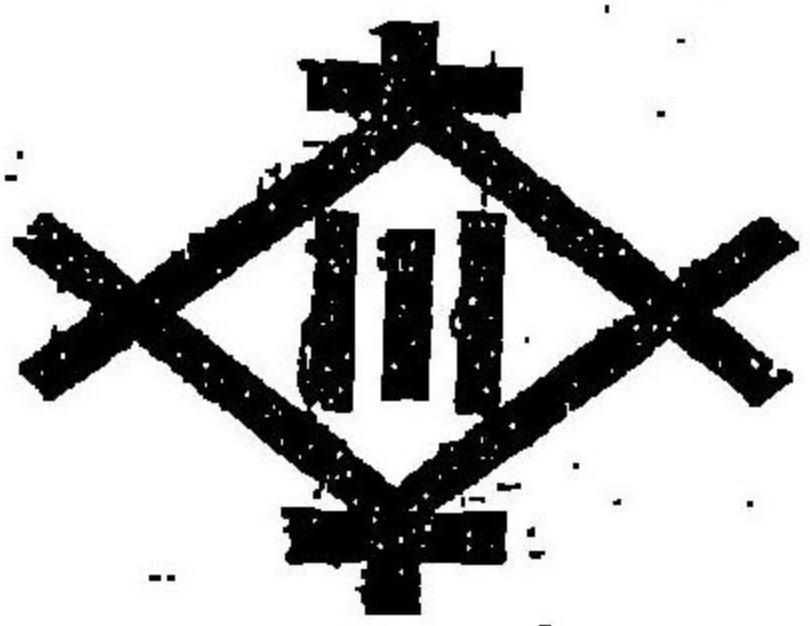
日本礦油株式會社本店

商標



(附の四)

◎當座預り金



大阪興業銀行

若松支店營業振合

此は商業家に最も要用なる預り金にして一口金五圓以上より日歩勘定を以て之を預り其都度通帳に記載し引出すときは豫て銀行より渡し置く所の小切手を以て隨意に振出す事を得らるゝが故に日々現金出し入れの手續を要せず又小切手を以て甲より乙へ流通するものなれば小切手所持人銀行へ取付を爲す迄は其間多少の利足を得らるゝ又他の銀行の手形も現金同様に其儘預ける事を得べし尙當座取引ある人にて他地方へ送金を要せらるゝ場合には預金引出小切手に金高を記載し銀行に持参せらるゝ時は仕拂の保證を爲し銀行の取引ある地方なれば無手数料にて送り金の取扱を爲す等頗る便益なる預り金なり

(附の五)

◎小口當座預り金

此は小口の取引を爲す人又は積金等を爲す人には最も便利にして一口金五圓以上より預り日歩を以て利足の勘定を爲すが故に預けたる日より拂戻しを受くる前日迄二日にても三日にても利息を得らる而して預り金を引出すときは通帳に印を押し銀行に持参せらるれば直に仕拂の手續を爲し又預け入れの時は通帳と金員とを持参せらるれば入金の手續を爲すべし

◎定期預り金

此預金は一口金參拾圓以上より三ヶ月以上期限を定め之を預り其利息は金融の繁閑と期限の長短により多少の等差あれ共可成高歩に預るべし

◎通知預り金

此は百圓以上なれば何程にても之を預り其引出を爲さんとする時は前日前々日又は五日前に銀行へ通知するものにて利足は金高及び通知の日數により取極めを爲すべし

◎別段預り金

此は金高五圓以上にして期限の長短に拘はらず利足等は約定の上預主の便宜なる方法にて預るべし

◎保護預り

此は金銀貨幣公債株券其他貴重之證書類等依頼に應じて預るものなり

◎預り金手形

此は金銀銅貨紙幣等の授受携帯に不便且つ盜難火災の患を避けん爲め手形に代へ置んとする人の便利を謀り無手数料にて取扱ふものにて其手形は他人へ轉讓讓渡す事を得銀行は何時にても手形持参人に金員を拂渡すものなり

◎貸出金

此は金高拾圓以上なれば六ヶ月以内の期限にて確實なる抵當品を預り置き可成低利にて貸出し場合により延期又は期限内中入等便宜の取扱をなすべし

◎當座預り金過振

此は別段の約定により豫て確實なる抵當品を預り置き預り金以外の金高を小切手を以て隨意に振出さるゝとも當銀行は約定高迄は何時にても之を拂渡すべし其返金は期限等を定める事なく何時にても返金内入を爲すを得るものなれば取引頻繁なる商業家には至極便利なる方法なり

◎約束手形爲換手形の割引

此は商工業家の資金運用を補くるに必要なるものにて商品の延へ賣をなし置き其約束手形を低歩の割引料にて銀行に賣渡し其金額を以て直ちに商品の仕入を爲すときは延賣代金の受取期日迄に資金の活動を妨ぐる不便なく又遠隔の地より受取るべき金額を座ながら爲替手形を以て銀行に賣渡せば直ちに現金を得らるゝの便あり爲替手形約束手形に擔保品の付屬したるものは同様割引貸を爲すべし

◎荷爲換手形

此は貨物又は荷積證書に依りて取扱ふものにして甲地の賣主より乙地の買主へ物品の代金を受取るべき爲に爲替手形を添へて銀行へ托せらるれば可成手数を省き買主に代りて其代金拂を渡し期日に至らば買主より其代金を取立てるものなれば貨物積入と同時に代金を受取る事を得る便法なり

◎代金取立

此は當地又は他地方に論なく他人より受取るべき金員を銀行が僅少の手数料にて支拂人より受取り其上依頼人に拂渡すものにて至急を要するものは電信にて取扱をなすべし

◎各地送金

此は電信送金は電信により通常送金は手形により渡すべきに付各指定の銀行に於て金員を受取らるるものにて電信送金は之に要する音信料を受くるも通常送金は無手数料にて取扱を爲すべし

◎兩替

金銀銅貨紙幣等通常貨幣は其種類の何たるに拘らず總て御望の通貨と交換を爲し又傷損汚穢したる紙幣も同様引換を爲すべし

◎爲換取引先

左記各地への荷爲換取引及び代金取立送金等は歩合を低廉にし手数料を省き取扱を爲すべし
大坂、名古屋、岸和田、神戸、兵庫、飾磨、岡山、尾ノ道、朝立、宇和島、阪出、中津、馬關、門司、小倉、飯塚

(前付の六)

住友銀行營業案内

當銀行ハ資本金壹百萬圓ヲ備ヘ特ニ行主ハ無限ノ責任ヲ以テ確實ト便益ヲ旨トシ銀行一般ノ業務相營ミ申候

一 定期預金

此預リ金ハ預ク主ノ御望ニ從ヒ三ヶ月又ハ一ヶ年ト期限ヲ定メ御預リ致シ預リ證書ヲ差出シ置キ期日ニ至リ該證書ノ裏面ニ記名押印ノ上御持參アレハ元利金共何時ニテモ仕拂申スベシ

一 當座預リ金

此預リ金ハ最初御預クノ節通帳ト小切手トヲ差出置キ預ク入引出共一日何回タリトモ自由ニシテ取引頻繁ナル商業家各位ニハ最モ御便利ノ預ク金法ナリ御引出ノ時ハ小切手ニ金高ヲ記シ兼テ御差出ノ印章ヲ捺シ御持參アルカ又ハ之ヲ

(前付の九)

支拂先へ御渡アレハ持參ノ方へ直ニ金員ヲ支拂ヒ申ベシ又タ御預ケ人ニハ貨幣ハ勿論他店小切手ニテ御振込ノ分ハ無手数料ニテ取立テ入金トナシ又大坂、川口、神戸、兵庫、尾道、新居濱、廣島、吳へ御送金ノ節ハ便宜無手数料ニテ小切手仕拂ノ保證ヲモ致スベシ

一 小口當座預金

此預リ金ハ一口金五圓以上ハ何程ニテモ通帳ヲ以テ御預リ致シ預ケ入レ引出共最モ簡便ニ取扱ヒ金員御入用ノ時ハ通帳ト御檢印又ハ請求書トヲ御持參アレハ營業時間中ハ何時ニテモ御拂戻シ致スヘク小口ノ御取引ニハ利足ノ割合モ宜シク最モ御便利ノ預金法ナリ

一 預金手形 (振出手形ノ事)

此預リ金ハ金高百圓以上ハ何程ニテモ期限ヲ定メス御預リ致スヘシ此手形ハ單ニ裏書ニヨリ授受モ出來大金ノ取引ニハ現金授受ノ煩ヲ省キ極メテ便

利ナルモノナリ

一 當座貸越金

過振ハ當座預金ノ御取引先ニ限り豫テ極度金額ヲ定メテ御約定致シ置キ御入用金ノ節ハ小切手ヲ以テ御預ケ金ノ外此約定金高迄ヲ引出シ又遊金ノ節ハ何時ニテモ隨意ニ御返金モ出來商業家ニハ至テ御便利ノ金融法ナリ

一 定期貸附金

此貸附金ハ石炭其他都テノ商品公債又ハ確實ナル株券類ヲ抵當トシテ貸出シ貸附ノ方法ハ證書又ハ通帳ノ二種類アリ通帳取引ハ極メテ便利ノ方法ニテ期限中ニテモ内入金又ハ抵當品内出等御隨意ニ出來利子ノ如キモ可成低利ニ御相談致スヘシ

一 割引

商業手形又ハ商品擔保付ノ約束手形爲替手形共特ニ低利ニ割引致シ商業家各位ノ御便利相謀リ申スベシ

一 荷爲替

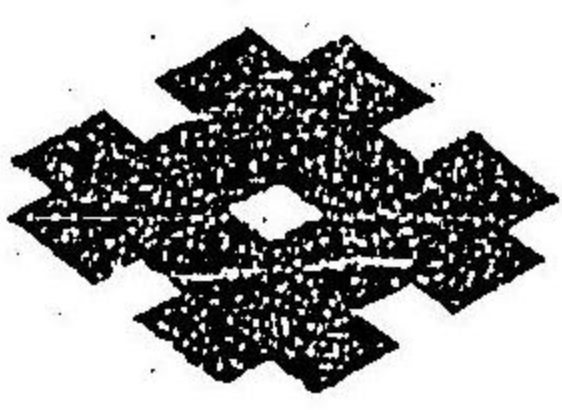
石炭其他ノ荷爲替取組ミ精々歩合ヲ低廉ニシ手数料ヲ省キ可成御便利ニ取扱申スヘシ

(前付の十二)

一 送金 一代金取立

左ノ各地へ御送金ノ節ハ無手数料ニテ取扱可申候

大阪、神戸、兵庫、尾道、廣島、吳、
右ノ外馬關、門司、博多等ニモ送金取扱可申代金取立ノ義モ迅速御便利ニ取扱可申候



無限責任

筑前國若松港

住友銀行若松支店

若松貯蓄銀行廣告

一 貯蓄預金

利息年六歩(百圓ニ付)ノ割

一 定期預金

三ヶ月 年五分六厘
六ヶ月 年六分
壹年 年六分五厘

一 當坐預金

百圓ニ付 日歩 壹錢

一 小口當坐預金

百圓ニ付 日歩 壹錢五厘
右御預ク方ノ手續キハ銀行へ御來談被下候へハ御懇切ニ御示シ申上候

一 貸付金

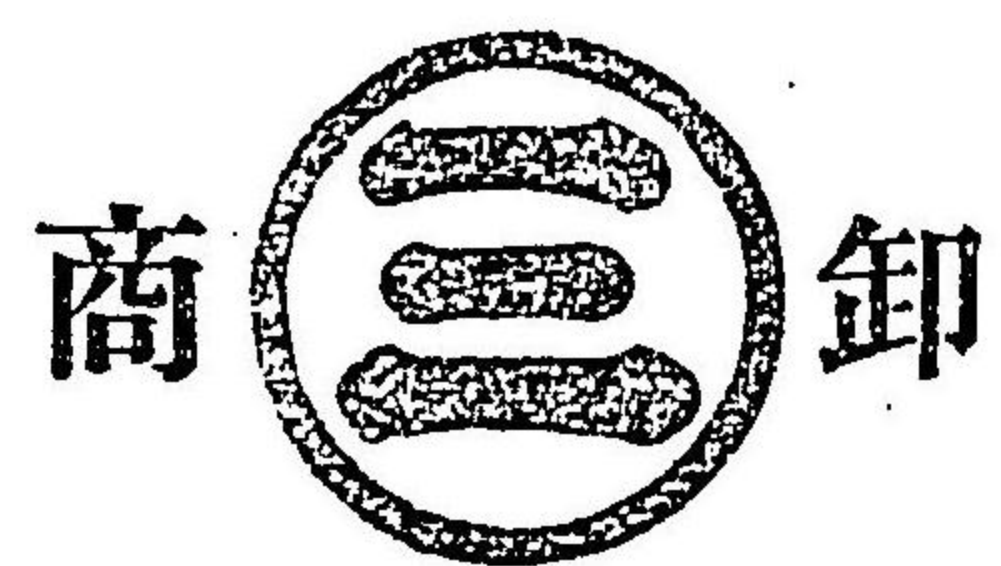
一 當坐預金貸越

一 商業手形割引

右ハ低歩ノ御便利ヲ專一トシテ御相談申上候

(前付の十三)

灘 堺 銘 酒
 洋 酒 洋 食 品
 舶 來 煙 草
 石 油 種 油
 和 洋 砂 糖



若松港本町二丁目
 内 海 商 店

(前付の十五)

荷 爲 取 立 換

右ハ迅速ト低歩ヲ主トシ御取扱申候
 一 現今爲換取組先左ノ如シ
 大坂、神戸、京都、門司、馬關、長崎、岸和田、堺、直方、

當銀行ハ他銀行ト異リ御
 預リ金ニ對シテハ拂戻保
 證トシテ公債證書ヲ政府
 ニ供託シアル上ニ資本金
 ハ申ニ不及取締役一同連
 帶無限ノ責任ニテ御引受
 致居候



株 式 會 社

若松貯蓄銀行

頭 取 務 取 締 役
 常 務 取 締 役
 取 締 役
 取 締 役
 監 査 役
 監 査 役
 相 談 役
 支 配 人

杉山松太郎
 小野孫一
 松本平
 内海市
 森谷芳之助
 長谷川太
 久保敬
 安川信三
 高柳三郎
 谷分喜郎

(前付の十四)

石 富 材 木 店

各位愈よ御清福奉賀候陳者弊店儀懇篤なる御引立に預り日々隆盛に赴き
候段深謝此事に御座候就ては尙一層勉強仕建築用の諸材より其他各種の
材木等總て精撰に精撰を加へ廉價を以て四方の御需要に可應候間多少に
拘らず續々御注文被仰付度此段奉願候謹言

若松港濱ノ町
八幡村字枝光

石 富 材 木 店
石 富 材 木 支 店

木 商 店

(前付の十六)

若松港笹淵石炭商店

下拙昨秋筑豊鐵道株式會社を辭し石炭業相營候以來意想外
の繁榮を來たしたるは全く知己親友諸君愛顧の然らしむる
處にして深く感謝の至りに不堪候今後益々確實に精勵し御
厚意に背かさらん事を契ひ候

若松港 安政町

店主 笹 淵 七 生

(前付の十七)

(前付の十八)

寫眞處

若松港
外町

山本鶴影堂

建築受負廣告

官衙、兵營、公館、學校、病院、ホテル、別
莊、倉庫、工場、紀念碑、橋梁、埋築、

其他諸般ノ工事受負任候間、御用被仰付度奉希候

若松建築受負事務所

若松港字三内町二丁目

主任技師

内田商會
長瀬兵馬

(前付の十九)

(前付の二十)

釋松園印房

篆刻專門美術士 玉山 大庭正筆刀

水晶 金銀
玉石 瑪瑙
牙角 木竹
珊瑚 其外

篆刻應需

實正堂

九州筑前國若松港
辨天町辨天社西ニ入北側

遠隔之地ハ以郵書御一報賜ワラハ直ニ貴需ニ應
ジ可申上候

廣 告

- 歐風滋養菓子ビスケット類
- 舶來菓子種々
- 和風菓子一切
- 罐詰類諸種
- 糖掛物類

右原料ヲ撰ミ品質精良ヲ旨トシ最モ廉價ヲ以テ販賣致候間續々御
購求アラソテ伏テ奉希候也

若松港辨天通四辻

村井東山堂

(前付の廿一)

洋和酒類

紙

るい

ろし

賣小

筑

前

若

松

海

岸

通

和

田

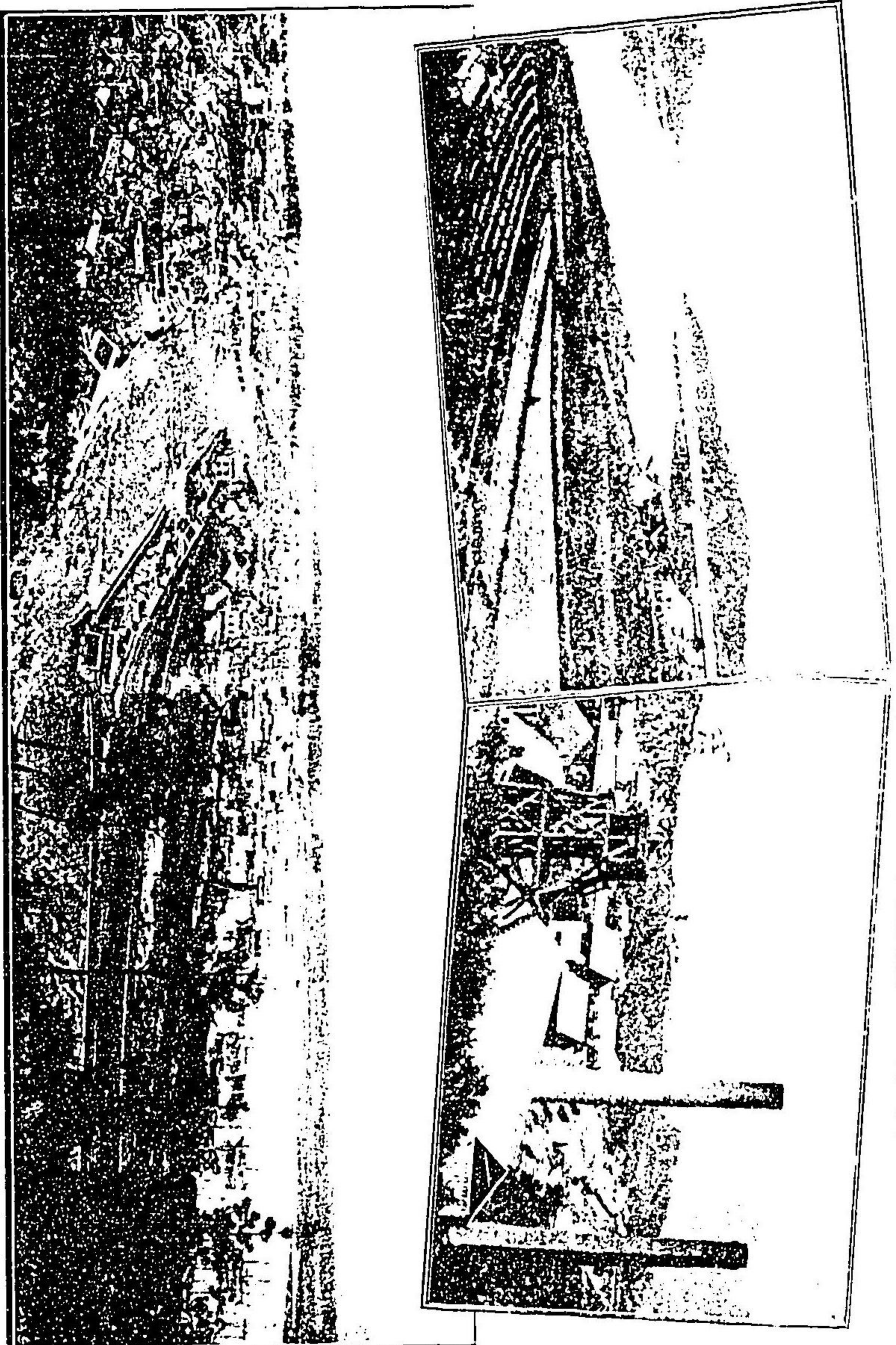
商

店

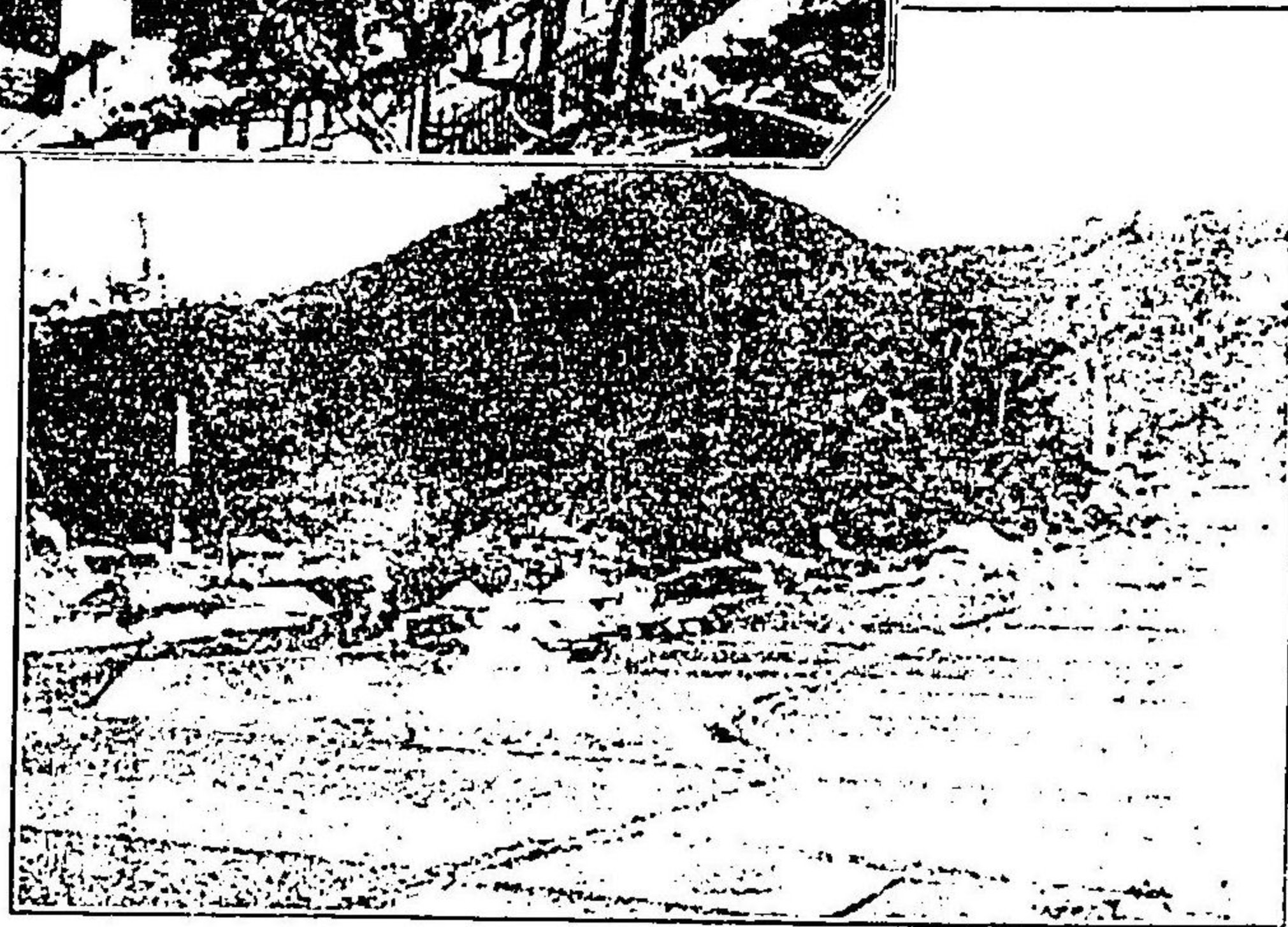
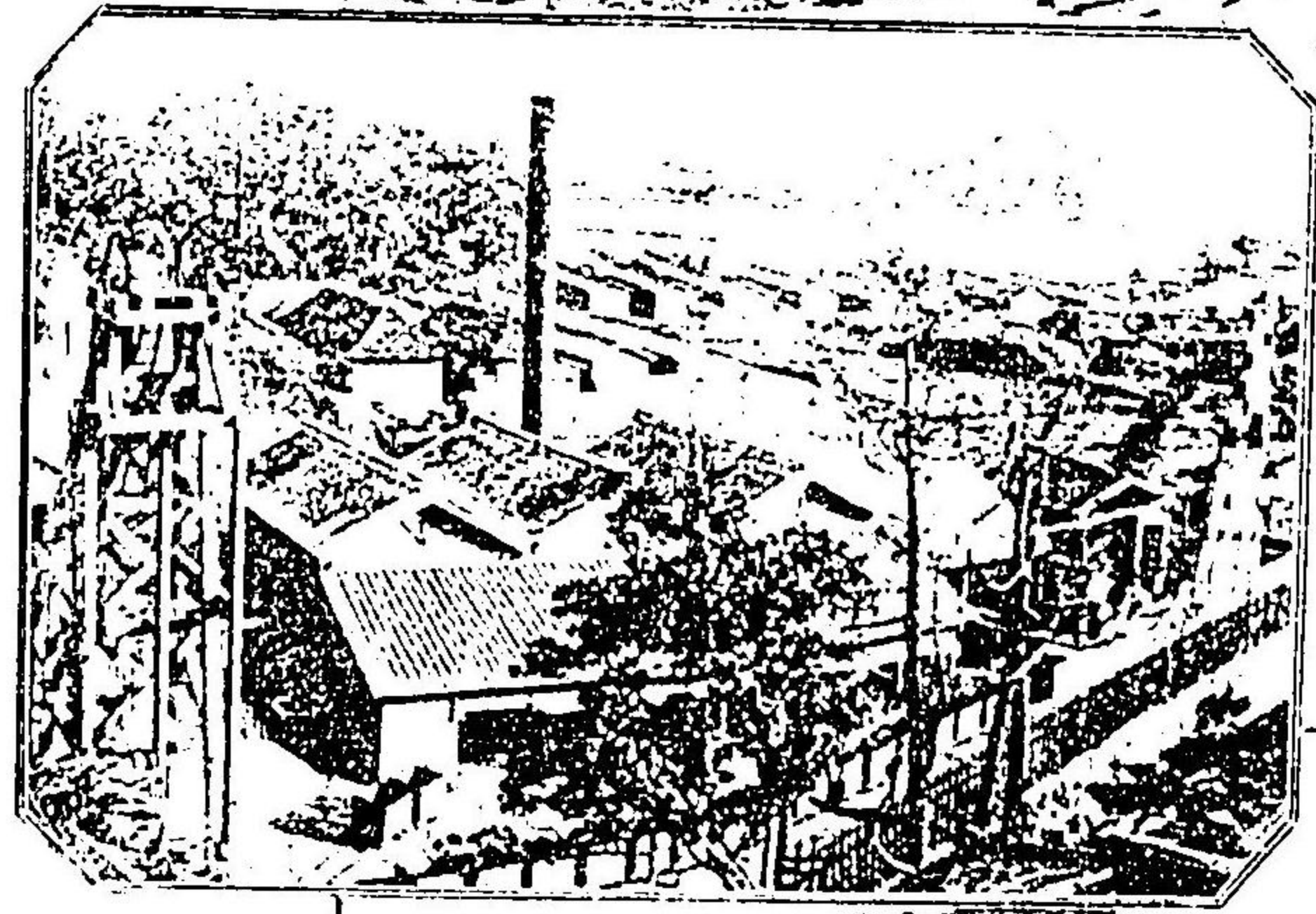
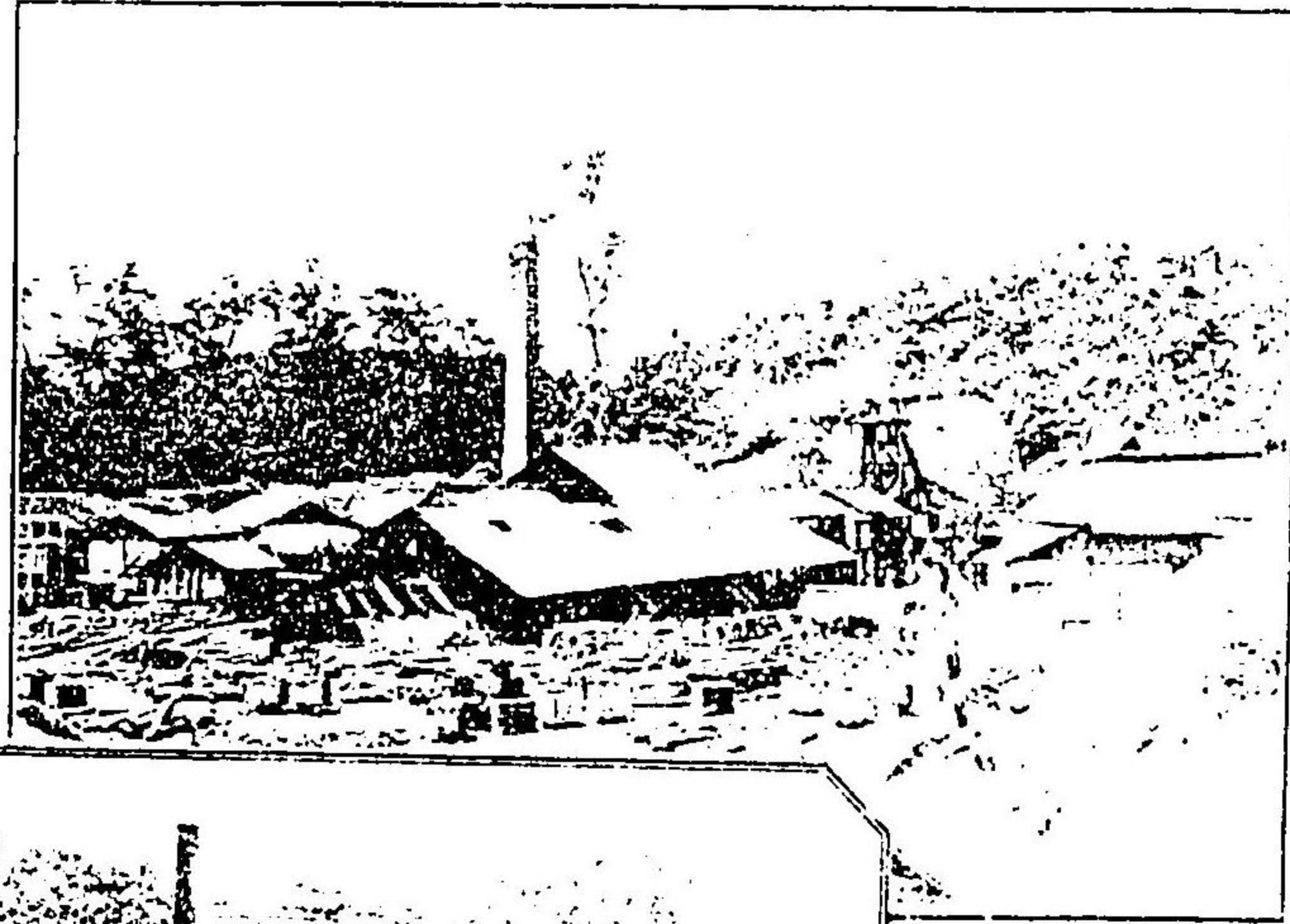
諸帳簿

大日本改良賣藥大取次所

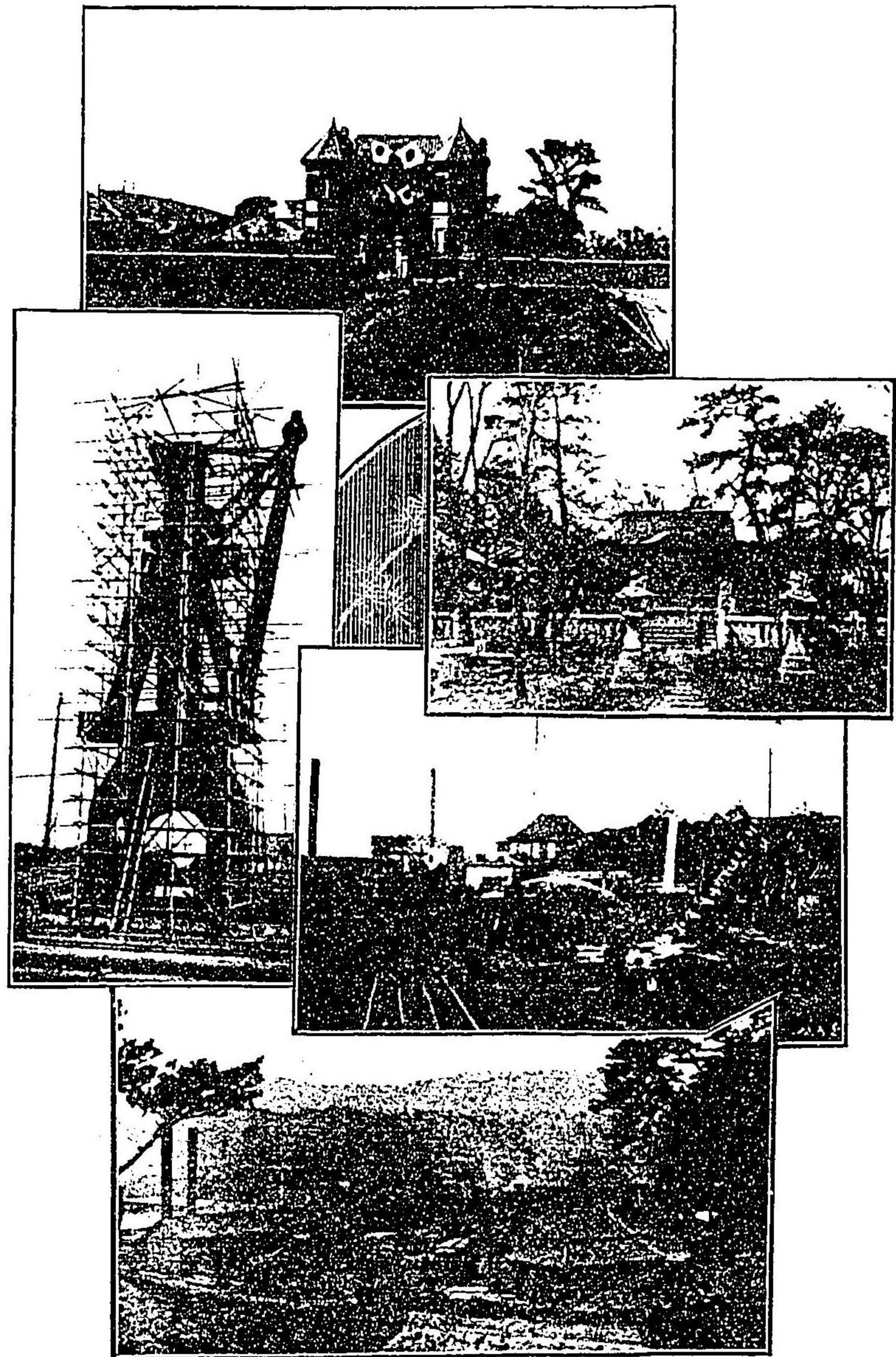
(前付六廿二)



▲望ヲ港松若リヨ田鹽舊地敷所鐵製
港 全 松 坑 一 第 坑 炭 池 赤



管 牟 田 炭 坑
高 雄 炭 坑
國 炭 坑



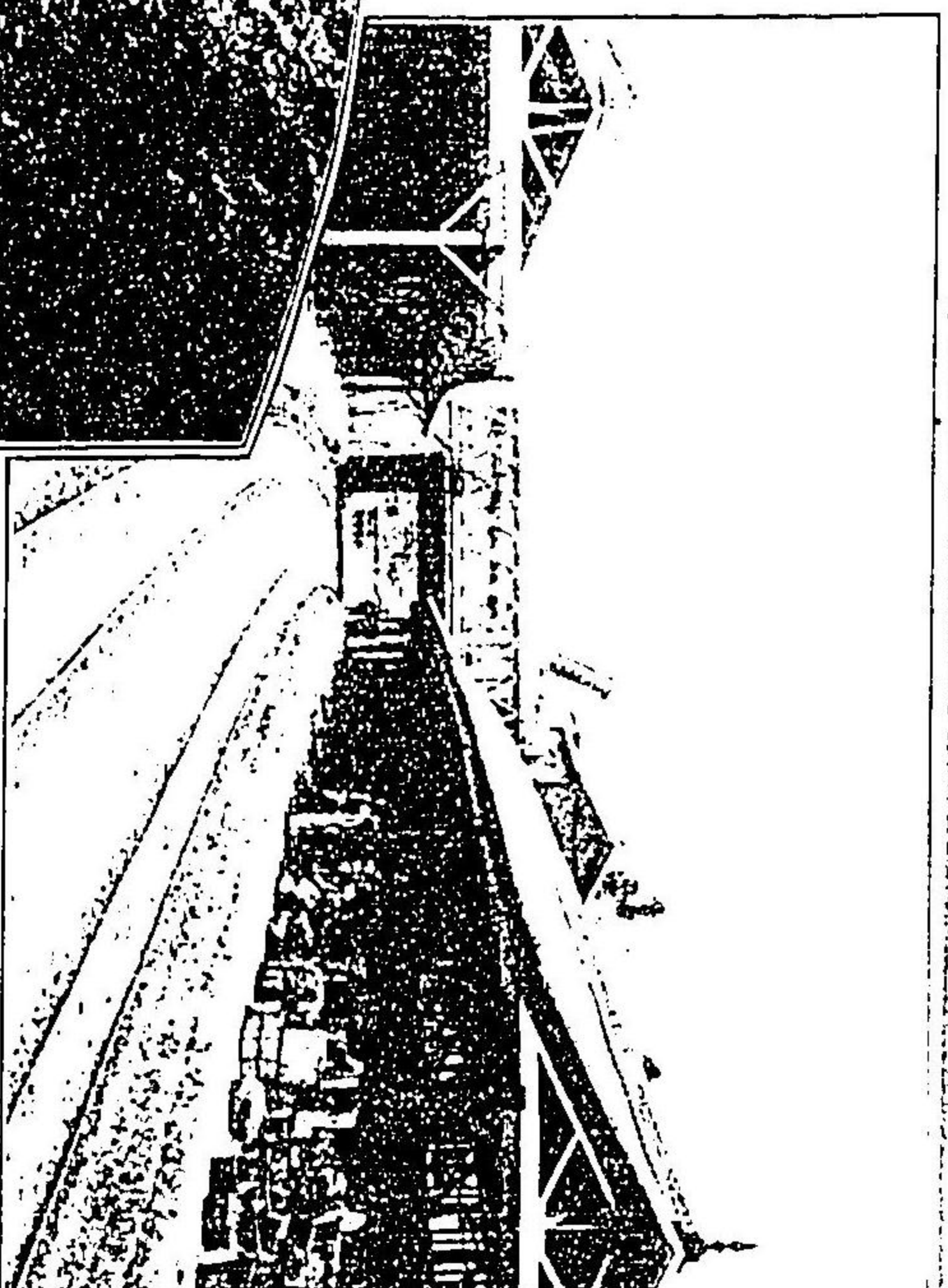
部樂俱及所務事合組業礦炭石豐筑

室重揚壓水道鉄豐筑

坑炭雄蘆

社神子蛭松若

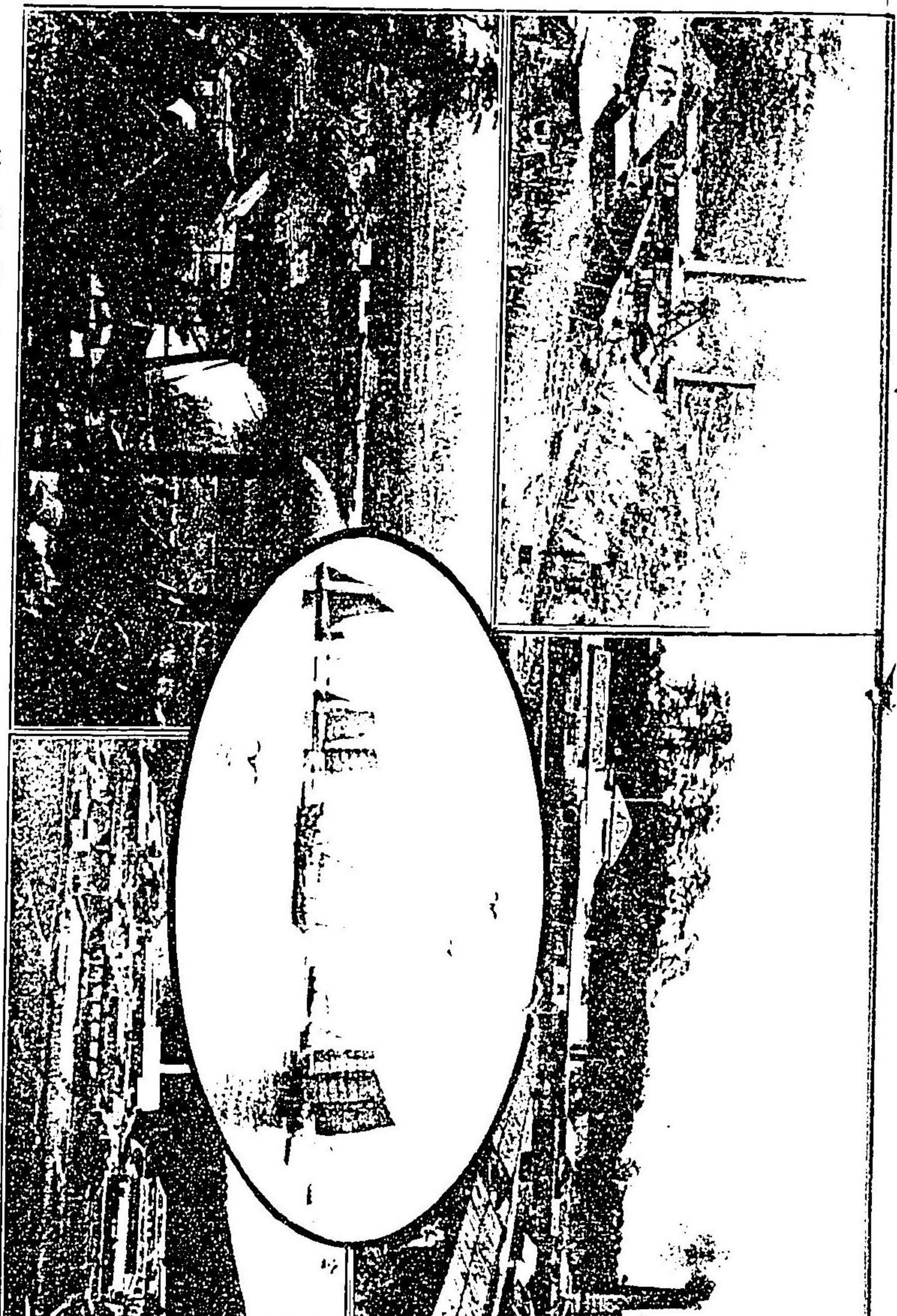
坑炭棚藤



数無圍全るせ又女の道江津瀬勢川九
U所洲の連陸ノ驛尾所



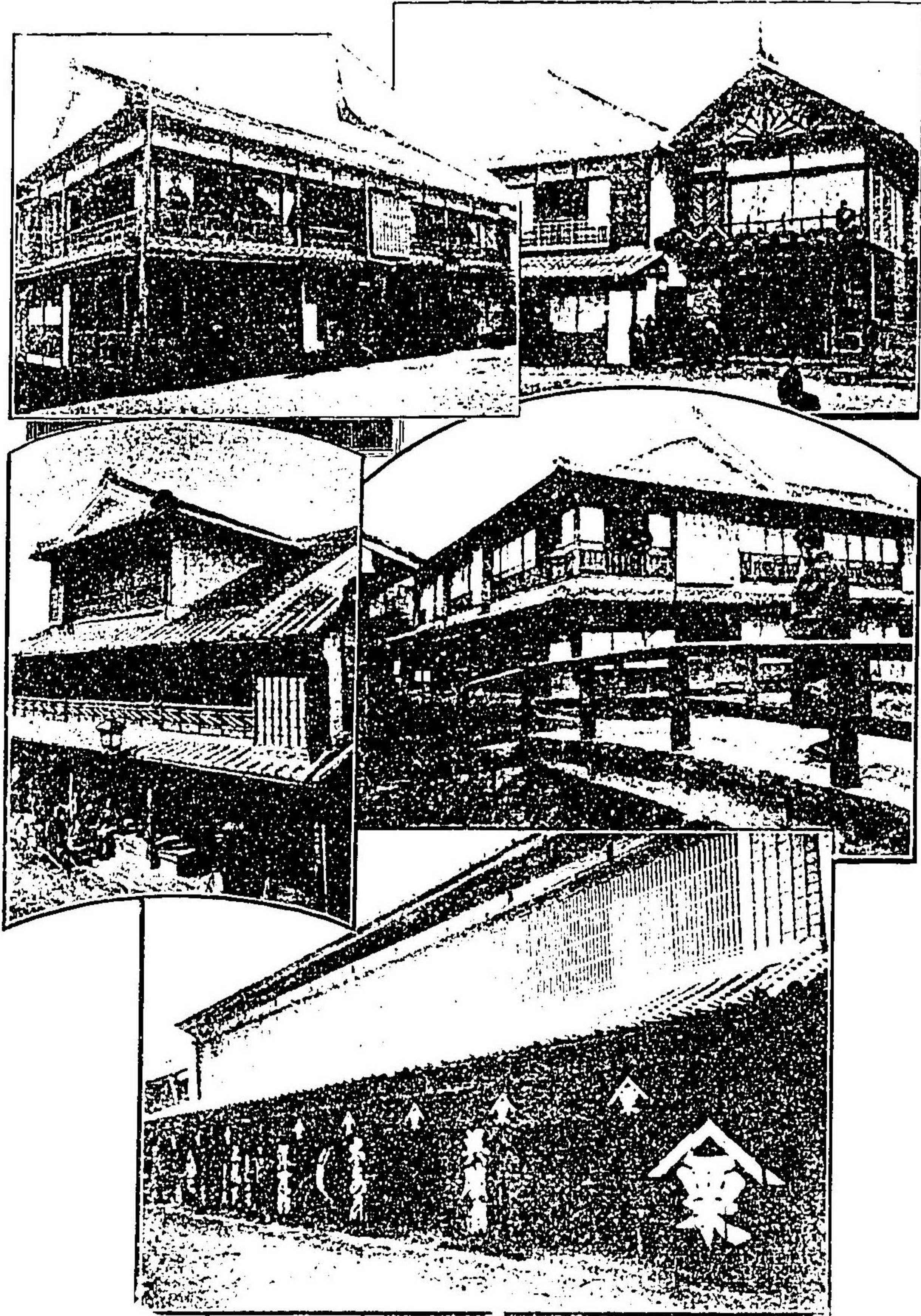
坂切の田吉内の川壩
(所關の連水)



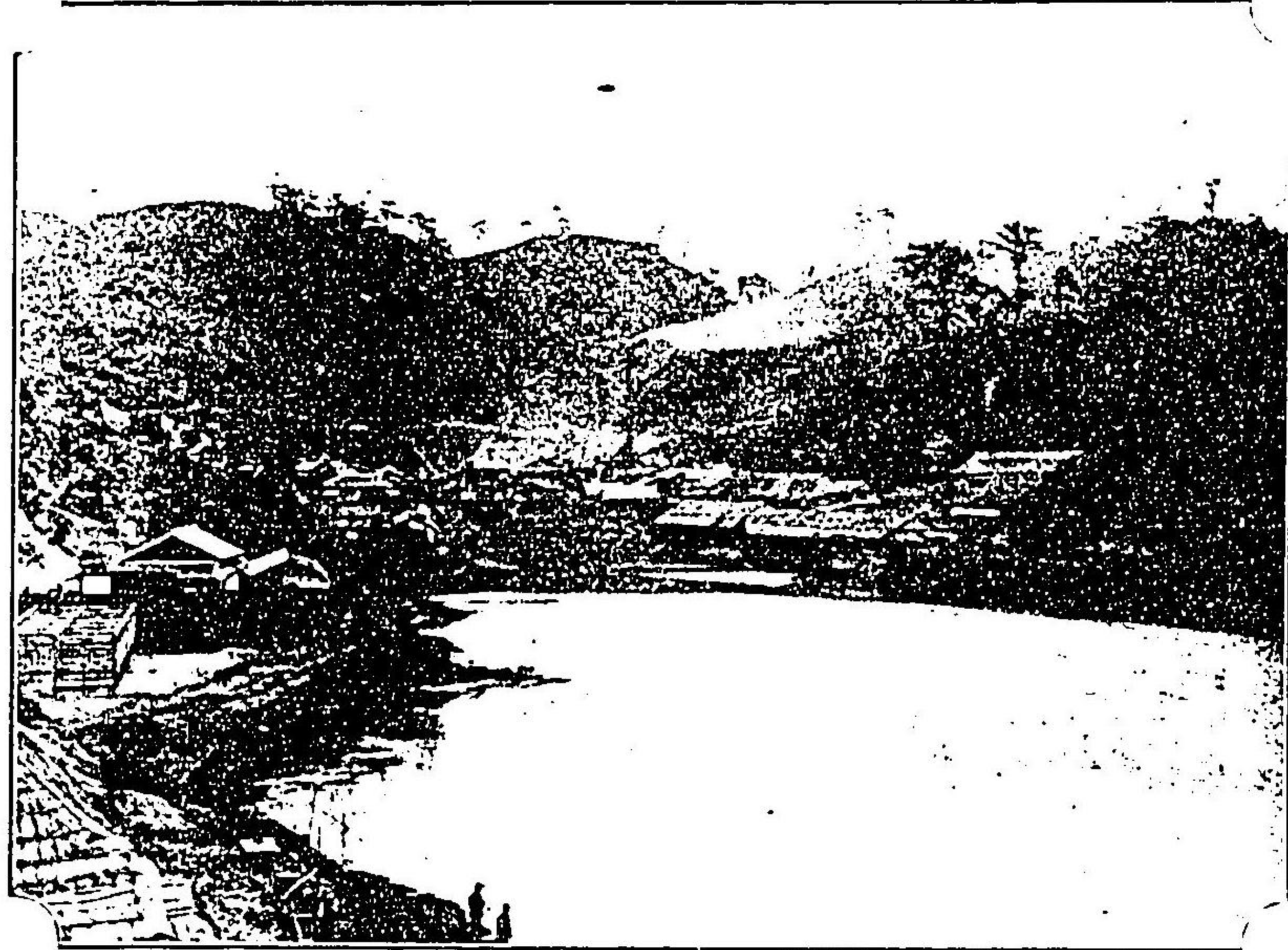
小川一真製

第一大浦炭坑
 日尾炭坑より往望む

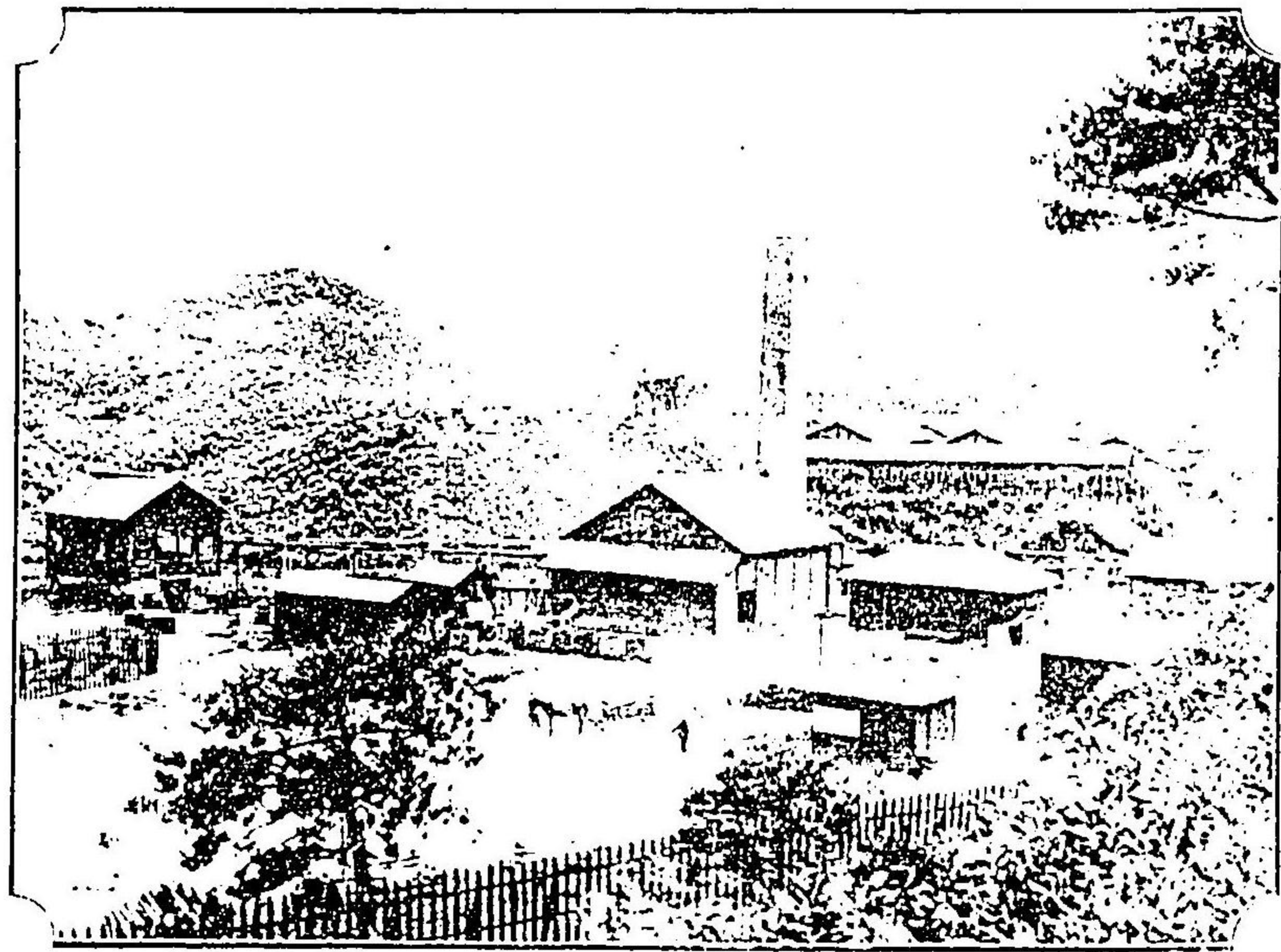
新野入石炭塔載船松港出帆ノ景



(館旅町本松若)館蔵萬
 (館旅町本松若)樓井松
 (町本松若)店商木栗
 (前場中停松若)所販活森
 (館旅町地新松若)屋賀志



明 治 炭 坑



赤 地 炭 坑 第 二 坑

新若松港目次

第一 新若松港

◎浦羅斯德の水は支那の水に連なる ◎黒金剛石生活を一變す ◎石炭は
 文明の刺撃者なり ◎工業立國主義 ◎製造所は採炭地と同一たれ ◎人口
 の大移住 ◎地方専業 ◎石炭と鐵は相共に盛衰す ◎石炭は世界的物産な
 りとせば坑業者は活版を四海に放つべし ◎西洋の英國既に然り東洋の
 英國は竟に如何 ◎我國一箇年の石炭産出は英國一周間の産出に相當す
 ◎石炭は優に第一流國たりしむ ◎筑豊二國の地質及び炭脈 ◎地質學的
 觀察 ◎日本中最大の石炭採掘地 ◎年々の増加採炭額 ◎猛烈たる筑豊四
 郡の採炭力 ◎新若松港 ◎若松名稱の起原 ◎五十九年前の若松 ◎夕顔堀
 の下涼み ◎遺利永く野に瀆まんや ◎今日の若松港 ◎驚くべき現象 ◎現
 在戸口 ◎地價騰貴 ◎富家投資 ◎交通機關の繁多は其の地の隆運を示め
 す ◎若松は希望に満てる青年也 ◎識者の善導を要す ◎實業は紳士の登
 龍門也 ◎來れ來れ豫言の反響

目次

目次

第二 黒金剛石

自十九頁至六十六頁

一 筑豊探炭業の過去

十九頁 卅二頁

- ◎本草綱目◎兼葭堂記◎寶曆年中石炭發見◎百年前の石炭使用◎石炭販賣の鼻祖◎偉人の失敗は成功の母なり◎皇天仁人を殺さず◎郭仕組◎焚石台所◎採掘方法◎瀛船購入◎御用炭◎自由販賣の新天地◎礪石の發見者◎家産を破て始て礪石の用法を發明す◎名垂不朽◎急流奔瀾◎濫掘濫賣◎丁丑騷亂の大影響◎好機一朝に失す◎洋式探炭法を取る◎石炭相場の沿革◎一吊一落

二 筑豊石炭坑業組合

卅二頁 卅四頁

- ◎全業組合準則布達◎聯合會◎聯合組合◎取締所及一括販賣店の設立◎役員更迭◎規約改正整理委員◎坑業組合の目的◎事業上に於る坑業組合の勢力◎諸般事業の監督者◎一日も休息せず◎三縣石炭同業會◎全業會の規約

三 筑豊探炭業の現在

四十一頁 五十頁

目次

第三 水運機關

自六十四頁至七十五頁

一 堀川

六十五頁 七十頁

- ◎大々飛躍◎出炭年表◎出炭郡別◎遠賀出炭◎鞍手出炭◎穂波出炭◎田川出炭◎既掘坑數
- ◎相場變遷◎海外輸出の消長◎輸出増加◎内地消費量數◎全國輸出炭と筑豊輸出炭◎海外輸出先地名及び年表◎輸出運賃◎輸出手順
- ◎若松石炭業組合◎役員及び組合店名◎規約摘要◎組合會議◎筑豊堀石部分會◎門司石炭商組合

- ◎黒田長政實地巡視◎栗山大膳工を起す◎長政逝く◎工事中絶◎繼高藩祖の遺志を繼ぐ◎七年の功◎惣社山堰◎東井手及び西井手◎壽命水門◎功成る◎崇勳碑

目次

二 川端

七十頁―七十五頁

◎ 籍の種類 ◎ 籍の減少 ◎ 籍の増加 ◎ 籍一箇月の上下数 ◎ 本川筋籍運賃率 ◎ 堀川内籍運賃率 ◎ 籍業組合 ◎ 六年間の水運消長 ◎ 籍業の状況と弊害 ◎ 矯正方法

第四 陸運機關

自七十五頁至八十三頁

◎ 筑豊鐵道 ◎ 本支線の哩數及資本金其他 ◎ 配當利益 ◎ 猛烈たる勢力 ◎ 運賃率 ◎ 水陸運賃の比較 ◎ 運賃經濟 ◎ 哩程賃金 ◎ 線定線路 ◎ 九州筑豊兩鐵道の合併 ◎ 合併要件 ◎ 魂飛魄銷 ◎ 兩鐵道の重役

第五 港灣擴張

自八十三頁至九十頁

◎ 若松築港會社 ◎ 設立目的 ◎ 價資方法 ◎ 資本金額 ◎ 通港錢率 ◎ 通港費及港錢高 ◎ 擴張計畫 ◎ 大々の希望あり ◎ 人工は天工に勝つ ◎ 送炭上の大經濟 ◎ 埋立坪數及び地價 ◎ 晴雨計 ◎ 重役

第六 工業勃興

自九十頁至九十七頁

◎ 製鐵所 ◎ 地勢 ◎ 設計 ◎ 製鐵種類 ◎ 原料は内國産なり ◎ 幽境變じて熱鬧の地と爲る ◎ 我國輸入鋼鐵量數 ◎ 英雄の眼光恐るべし ◎ 活眼の士は感はず ◎ 三先輩の答眼 ◎ 會社勃興 ◎ 社會は戰場なり

第七 人力

自九十八頁至百一頁

◎ 人の心 ◎ 自由思想 ◎ 發見發明 ◎ 人工は天工を奪ふ ◎ 同心協力は成功の母 ◎ 工業の中心點たれ ◎ 自治の泉源たれ

第八 市中案内

自百一頁至百四十頁

◎ 御退屈は御免候へ ◎ 若松停車場 ◎ 車輪轟々 ◎ 筑豊鐵道會社 ◎ 本町六丁目より一丁目迄の各商店旅館等の披露 ◎ 若松町役場 ◎ 郵便電信局 ◎ 窓より ◎ 人の山を築く ◎ 善念寺 ◎ 銀行 ◎ 會社 ◎ 吉祥寺の裏比須 ◎ 石炭問屋其他 ◎ 警察署 ◎ 船頭町 ◎ 門司馬關渡海 ◎ 出帆時間 ◎ 石炭取引の親分 ◎ 蛭子神社 ◎ 春季祭典 ◎ 御膳据式 ◎ 日吉神社 ◎ 濱ノ町 ◎ 石炭米穀取引所 ◎ 築港會社 ◎ 防波堤上の光景 ◎ 安政町 ◎ 西念寺 ◎ 紺屋町 ◎ 新町 ◎ 裏比須町 ◎ 五反町 ◎ 幼稚園 ◎ 三宅の墳墓 ◎ 連歌濱 ◎ 外町 ◎ 老松町 ◎

目次

郡立病院◎連歌町◎食席の名◎内輪の御都合◎客筋◎精米所◎旭座◎
 連河◎坑業俱樂部◎高等小學校◎尋常小學校◎安養寺◎白山神社◎高
 塔山◎金比羅山の光榮◎新地町◎極樂寺◎飛梅◎綿縫繁場◎綿業組合
 事務所◎辨財天通◎海岸通◎石炭問屋其他◎石炭業組合事務所◎渡場
 ◎中島◎コークス製造所……若松全町の各商店問屋會社銀行旅館料理
 屋等一切之を漏らさず欄上の町名を見て之を讀むべし

◎戸畑◎將來有望◎馬車軌道にて小倉に至る◎小倉鐵道◎名古屋崎◎
 八幡村◎氣早やなもの◎黑崎◎セメント會社◎變れば變るもの◎蘆
 屋◎小石◎脇ノ浦◎折尾驛◎直方町◎小倉町◎門司港◎繁榮◎赤間關
 ……各地の名所遺跡及び現狀を描く

第九 附錄

自百四十二頁至百六十六頁

若松石炭米穀取引所案内

◎米取引の歴史◎精取り商◎長思入れ商◎思ひ入れ揃ひ商◎推平

商ひ◎ならし商ひ◎品攻め金攻め商ひ◎賣買の仕掛け◎運氣は循環す
 ◎見切り◎相協師の覺悟◎一に魂二に運◎禁制六條◎年中高下の豫考
 ◎訓歌◎秋冬高下の歌◎春高下の歌◎夏高下の歌◎一般高下の歌◎天
 象と晴雨◎役員◎仲買人◎組長◎休日◎石炭取引證據金◎手数料◎仲
 買口錢◎受渡米品位格付表◎不定格◎定期米取引證據金◎手数料◎仲
 買口錢……◎登記法要領◎郵便税◎普通爲替料◎小爲替料
 ◎商人坐右の銘◎(い)より(す)迄百三十四章

浦・壱・斯・德・の・水・は・澎・洋・と・し・て・玄・洋・の・水・に・連・り・西・比・利・亞・の・鐵・路・は・蜿
蜒・と・し・て・九・州・の・鐵・路・に・接・せ・ん・と・す・試・み・に・看・よ・電・鐵・水・火・の・力・が・如
何・に・猛・然・た・る・勢・を・以・て・世・界・の・空・間・と・時・間・と・を・短・縮・し・此・に・人・類・社
會・の・生・活・を・一・變・し・て・遂・に・一・國・の・國・是・を・も・之・を・改・め・し・む・る・に・至・り
た・る・を・殊・に・黑・金・剛・石・と・ふ・異・名・を・附・せ・ら・れ・た・る・石・炭・の・發・見・せ・ら・れ
て・地・球・の・皮・層・到・る・處・に・刺・が・れ・し・よ・り・各・種・發・明・の・氣・運・を・促・が・し・來
り・工・業・に・將・た・交・通・機・關・に・偉・大・な・る・革・命・を・及・ぼ・し・赫・灼・た・る・新・曙・光

新若松港

辰己敬民著

第一 新若松港

浦壱斯德の水は澎洋として玄洋の水に連り西比利亞の鐵路は蜿蜒として九州の鐵路に接せんとす試みに看よ電鐵水火の力が如何に猛然たる勢を以て世界の空間と時間とを短縮し此に人類社會の生活を一變して遂に一國の國是をも之を改めしむるに至りたるを殊に黒金剛石とふ異名を附せられたる石炭の發見せられて地球の皮層到處に刺がれしより各種發明の氣運を促がし來り工業に將た交通機關に偉大なる革命を及ぼし赫灼たる新曙光

新若松港

新若松港

の照被する處社會必須の諸機關は悉く無上の恩恵を石炭に仰がざるなく兵事なり商業なり皆な其の影響を蒙り寝々乎として日に月に進歩發達するにあらずや。

『西北の風ふせきして暮打てよ、我が日の本の櫻見る人』と愛國の志士が謠ひし徳川の晩年浦賀の砲聲に庶民桃源洞裏の靜夢を破り、宮様々々に『トントンヤン』の節面白ろく陸に關所を設け海に船舶を制限し交通機關を全く閉塞して、幕運長久を禱れる葵政府の基礎を顛覆し了へ、其の名も明治の聖代と爲りしは、眞に三十年の昨日、我が日本帝國が瞬く間に大々的飛躍を爲し、彼の文明の魁と誇る泰西の碧眼兒をして吃驚一番せしむるに至りしは、蓋し偉人傑士の風雲に際會して施すところありしに因ると雖も、抑も亦た文明の原動力たる電鐵水火の力が與て大に功ありしに因るべし、換言

新若松港

すれば、地底に潜める石炭の力の能く山を抜き海を蹴へすことを、覺り之を煤田に採掘して實地に應用するに至りしに因るや、最も明瞭なり。

石炭發見應用後の世界の趨勢に鑑みれば、農業立國主義は漸次工業立國主義に移らんとしつゝあり、然り而して世界の孰の國が最も工業の隆盛を極むるやといふに、先づ指を英國と米國とに屈せざるを得ず、『蒸氣力を要する製造所は、多量の石炭を要するを以て、其の坳處は必ずや大石炭採掘地と同一地ならざる可らず』とは、復た英國産業史の著者キッピンス氏の言を俟たずして知るべし、英國の如きは其の領土こそ廣ろけれ、眞に積爾たる一小邦に過ぎずと雖も、製造業の發達著るしく、工場驍をつらねて煙突林立し、天に漲るの煤煙濛朧として倫敦マンチエスタ等晴空を仰ぐの日々

人口の大

地方専業

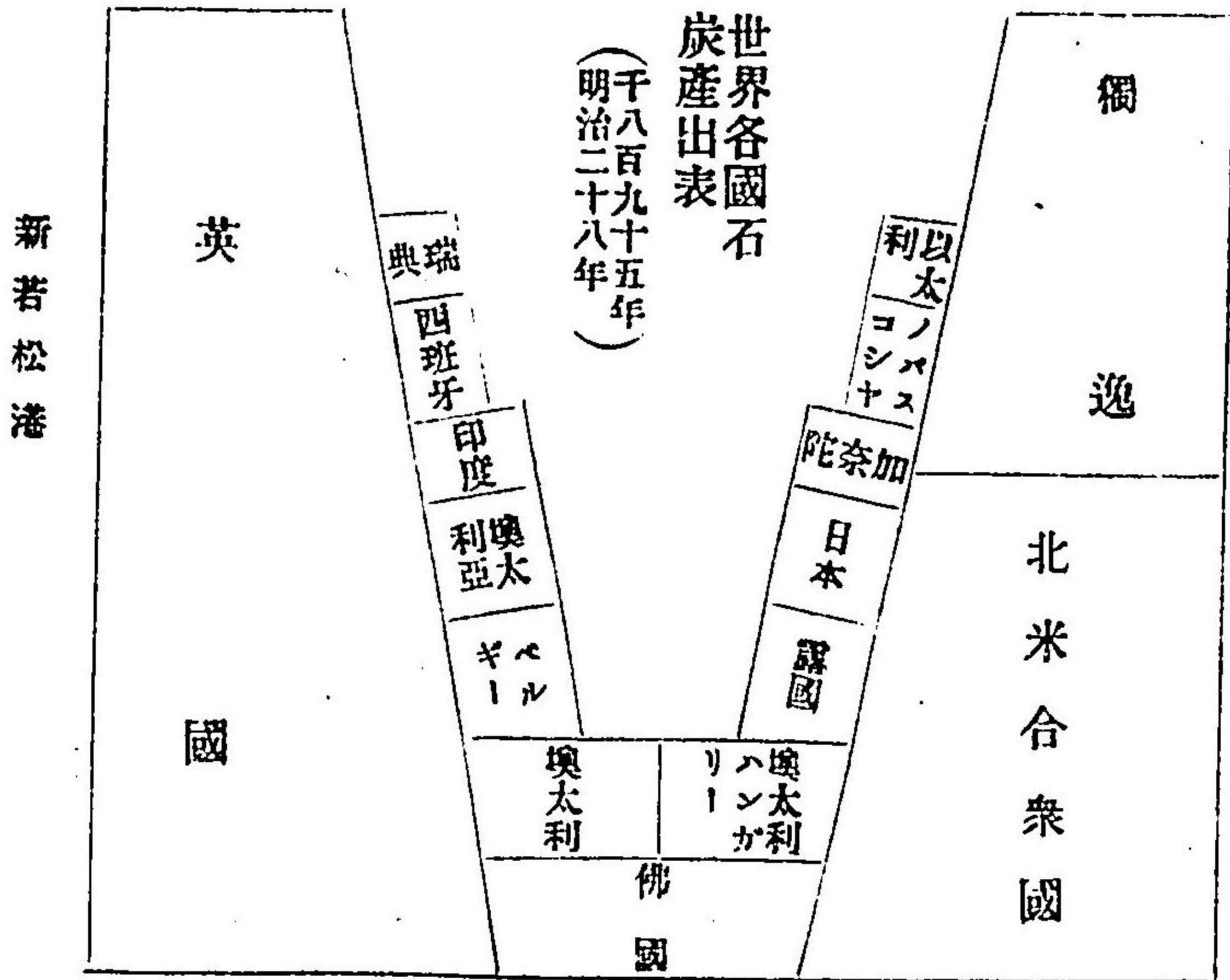
石炭と鐵

新若松港

歲々増殖せる人口は製造業地即ち石炭採掘地なる北部地方に向て年々非常の速度を以て大移住を爲し、中世紀間人煙稀疎なりし處、今世紀に及びては稠密の地と變じ、ランカシャーは木綿紡績、細紗を以て鳴り、ノルサンプトンは製靴を以て著はれ、ニューカッスルは探炭造船、エチンペローは印刷、グラスゴーは造船、セーフホルドは刃物を以て各々其の名を知られ、國內到る處地方専業の狀態を爲せるにあらずや。

加之石炭採掘と製鐵事業とは相共に併行して盛衰を來たすものなり、英國に於ては、千七百三十七年より千七百四十年前後は鐵の貿易大に衰退したり、蓋し、當時石炭採掘の氣運未だ伸びず、僅に薪木を供して燃料と爲せしがゆゑに、林山の濫伐甚だしく、サーセツクス、ウァルマンの如きは法律を公布して、森林の濫伐を嚴禁す。

石炭の世界的産物



新若松港

世界各國石炭産出表 (千八百九十五年) (明治二十八年)

國名	噸數
英國	一八九、六六一、〇〇〇
北美合衆國	一四〇、七三〇、二八八
獨逸	七九、一六九、〇〇〇
佛國	二七、五八三、〇〇〇
奧太利	二四、〇〇〇、〇〇〇
奧太利ハンガリー	二二、〇〇〇、〇〇〇
ベルギー	一九、八〇〇、〇〇〇
露國	五、〇〇〇、〇〇〇
日本	四、二九五、三〇八
奧太利	三、八二〇、〇〇〇
加奈陀	二、〇一〇、〇〇〇
ノバスコシヤ	一、九八四、〇〇一
印度	一、八〇〇、〇〇〇
四班牙	一、二〇〇、〇〇〇
以太利	三二七、六六五
瑞典	三〇〇、〇〇〇

西國既洋にの然英
如國東洋にの然英

るに及びたればなり然りと雖も、理化學的應用法の諸種の製造業に施さるゝと同時に、石炭採掘の途大に開くるや、製鐵事業は此に著るしき改良進歩を爲せり。千七百五十五年、鐵工長アントニー、ベ
ーコンは、マイシル、デッドツェルに、長八哩幅五哩を九十九年間借
地許可を受け、此地に始めて鐵及び石炭工場を創設し、又たスミ
トンは、フェアルカークに、近きカールンに於て、自己の發明に係る新
通氣風櫃を裝置し、其よりクラチーヂオニオンズ、コート等の發明
續出して、製鐵事業頗る完美の域に進み、千七百四十年前後に於て
は、年々僅に一萬七千噸を産出して、鐵の輸入少額のとんど雖も二
萬噸の多きに上りしが、千七百八十八年に及びては、六萬八千噸を
採掘し、其の數爾來非常に増加して、鐵及び鋼のみにても、毎歲無慮
四百萬噸に達するに至れり。噫、百年の短月日間、英國が世界に冠た

我國の石炭
年産出は英
國の産出に
相當す

石炭は優
國に第一流
む

る貴礦物の輸出を出すに偶然ならんや、蓋し第十九世紀及び第二十世紀文明の原動力は、電氣水火の力に因る。といふも、電氣は水火の力を假らざるべからず、而して火力の應用は既に工業過去の記録に存するのみ、鐵や亦た火力を假るものなれば、現今の文明は單に火力に因るといふも不可無し。火力既に専ら至大至厚の恩恵を現今の文明に施すとせば、石炭を稱して黒金剛石と爲す。決して溢美に非ず。試みに、眼を千八百九十五年(明治二十八年)世界各國石炭産出表に放てよ。此の表は、實に各國に於る石炭産出の多少を示めずのみならず、亦た各國に於る工業の消息をも併せ教るものならずや。我國一箇年の産出石炭を僅々一周間に消費し得べき英國を始めとして、米國なり、獨逸なり、又た佛國なり、歐米の第一流國として、富強の實を顯はし、以て乾輿上に高踏

新著松港

潤歩する所以更に多言を要せずして明々白白たるらん。
 以上は是れ一國の上よりする觀察の順序なりと雖も、今ま少しく
 眼界を小にして一縣一州の上より觀察を下ださん乎、尙ほ同一理
 にして工業の進歩發達するは、非石炭探掘地にあらずして石炭探
 掘地にあるなり而して又た石炭探掘地にあらずと雖も、石炭の集
 散力に富めるの地は安價に石炭を使用するの便利を有するを以
 て、其の工業の進歩發達大に期すべきなり、此に我國の地圖を展べ、
 素人目より之を研究するも、福岡縣遠賀鞍手嘉穂田川四郡の炭脈
 は、企救宗像粕屋、席田那珂五郡の炭脈に聯絡し、此の地方一帯は、地
 質上古期に發育せし數種の剝岩及び中古期の岩盤の之を貫きて
 噴出せし花崗岩、閃綠岩、玢岩、輝綠岩等の火成岩と共に、北東より南
 西に延び、以て筑豊二國に於る高峻の地を造成せり、此くて、北東

新著松港

西南に延長累積せし幾多の岩盤は、其の累積後激烈の地變力を受
 け、北西より南東の方向に數條の龜裂を生じ、此の裂條に沿ひ地盤
 或は陷落し或は水蝕じ地形の一變するところ、北々西より南々東
 に山脈を引ける峰巒の間に數多の入海地を造るに至たり、其よ
 り第三紀の時代に及ぶや、此の入海地に沈渣累積せし砂礫及ひ埋
 木を雜へし泥土の固結して地變力を受け隆起せしものは即ち石
 炭を包藏せる第三系の地層にして、中生層に次ぎ地質沿革上新規
 に發育せし地質なり、此の炭脈は先づ三池郡三池に隆起し、尙ほ肥
 の東西に及ぼし、かの唐津高島天草等の如き隆起の衝に當りたる
 最も顯著のものなり。
 其れ然り而して同一地方に於て、石炭探掘事業の發達せるもの北
 海道なり、西肥なり、是れありと雖も、最も隆盛に最も繁榮に進歩せ

新若松港

るは、我が筑豊四郡を措て他に其の比を見ず、明治三十七年度に於る統計表は、吾人に左の事實を教ふ、

福岡	四、五八三、四三一、四四〇	山口	三、一五、六四五、一一〇
長門	七、四七、五二四、三三〇	島根	七、五、四九四、一六〇
北海	六、五、一七九、一一〇	和歌山	七〇、五一九、六八〇
佐賀	五、四、五、七六、四四〇	熊本	六、七、七、七、八四〇

殆んど三箇年を経たる今日に於ては、何れの縣も石炭採掘額を増加したるべしと雖も、採炭機關の改善、交通機關の完成は、其の増加の比率到底福岡縣に及ぶなからん然も、明治二十七年中、我が遠賀、鞍手、嘉穂、田川四郡の採炭額は實に二十八億七千四百二十九萬五百三十六斤にして、三池、其の他の採炭額は十七億九百十四萬九百四斤に過ぎず、殊に此の四郡の採炭額は、明治二十八年に於て、七億千五百三十三萬四千六百五十斤、明治二十九年に於て、十億六千

新若松港

百三十一萬二千八百十六斤を増加したり。昨年度に於る筑豊四郡の採炭額は、無慮四十億萬斤許にして、日本全國の採炭額、明治二十七年總採炭額七十一億二千四百四十萬七千二百二十斤の二分の一強に居れり、其れ斯の如く、天賦の賜は偏へに我が筑豊四郡に厚し、然もこの巨額の石炭を集散し、以て自家の工業は無論各地の工業を振興發作し、此に百尺竿頭一步を進めて、文明の異彩を放たしめ、つゝある若松港の過去及び現在、如何にして若松港の現在、如何に偉且つ大なる將來を産むべきや、是れ宜しく識者の深思熟考すべき處なり。

曠世の女傑、神功皇后、磊々たる雄心を以て、三韓征伐の師を興し、給ひ其の途次、此の地に駐り、稱松を靈土に栽る給ひける時、松影青く海面に倒照しけるを見て、武内宿禰が「我が心若るぬ」と祝しけるよ

新若松港

り「若松」の名稱こそ起れり若松は元と修多羅村(今の遠賀郡石峯村)の枝村なりしが今を去る二百八十餘年元和の始め黒田長政入國の後分離して別村となり明和八年今を去る百二十五年(の春の調査に依れば島段別數五町四段二畝二十四歩石高五十石四斗二升六合又九天保九年今を去る五十九年(の冬の調査に依れば島段別數四町二段六畝廿四歩五厘石高五十石四斗二升六合別)に田一作九町七段一畝二十四歩五合にして、

東町 四町 新屋町 新町 安政町
 新地町 外町 船頭町

と町名は存せしもの、其の實見る影も無き一荒村より成立るに過ぎず當時の戸數は二百六十九戸人口は千三十二人商船七十三艘船八艘蟹が伏家は藻鹽焚く煙の間に點綴し款乃の聲は徹かに

新若松港

洞海の邊に響き磯打の波と松吹く風の外亦た耳目に觸るものなく住民悉く海の幸さては島の幸に五十の春秋を托するのみ五風十雨百俵と一斗九升一合の年貢に夕顔棚の下涼み諸侯江戸參勤交代の砌り御渡海船の黒崎より大阪へ向ふを見て戴雪の老翁が都門の光景を兒童に説くありしのみ。

此の頃は即ち赤間關は大阪以西第一の都會として百貨輻湊し博多は織物を以て長崎は貿易を以て世に其の名を知られしと雖も、獨り若松は玄洋の源に僻在して人の其の名を唱ふるなかりしなり然りと雖も天賜の遺利永く野に潜まず石炭の黒彩端なくも筑豊四郡の山野に閃くや若松の進歩發達は非常の速度を以てし織るが如き鐵道は蜿蜒として深く探炭地を犯し港灣水深ふして出入の船舶舳舻相啣み煙突處々に聳ちて煤煙天に漲り商店軒を連

ねて戸毎に榮へ會社の設立銀行の開店日に月に増加し、年々八百拾萬圓の石炭の餘澤は、戸口に於て富の程度に於て、賀すべき兆候を顯はしぬ請ふ左表を視よ、

年	戸数	人口	年	戸数	人口
二二	七六六	三、六四七	二二	九九六	五、六五〇
二三	八三三	四、三六六	二三	一、一六九	六、三三九
二四	八八一	四、九二九	二四	一、二八五	七、三四二
二五	九五六	五、一七七	二五	一、三八二	八、〇〇七

是れ戸口増加の割合を示めせるものなるが、今や戸数は實に二〇二戸の割合を以て増加し、人口も亦た同一比例を以て増加し、あり此の驚くべき現象は、若松港一般に於る現住寄留滞在人を合算して尙ほ無慮四萬人の多衆が若松港の水陸に在るを示めし、修

多羅も亦た明治三十三年頃は戸數僅に四百餘戸、人口二千餘人なりしに明治三十九年に至りて、戸數九百九十戸、人口三千二十三人と殖え、戸畑の如きも、戸數五百四十八戸、人口三千六百四十二人と爲りたり、然れば、他地方よりの入込人が賃借せんと欲するも、貸屋札張られたる空屋なく、一家に幾家族も同居する姿、昨日の漁場は今日の市店となり、去年の田圃は今年の宅地となり、五六年前一反數金の地、今は一坪幾圓に價ひし、市中の最要地は即金四十圓にて飛ぶが如く賣れ、曰く三菱、曰く三井、曰く住友、曰く古河各地の富豪陸續として巨資を投ずるに至れり、蓋し交通機關の繁多は其の地の隆運を示めするものなりとせば、日々幾千の乗客、幾百の貨物を往復運搬する筑豊鐵道なり、若松戸畑間の渡船なり、又た若松門司馬開間の渡海なり、誠に若松の隆運を示めするものなり、而して、若松郵

新若松港

便電信局が既往四箇年の成績を見ん乎郵便取扱数は

種	年	種	年	種	年	種	年
集	二	集	二	集	二	集	二
配	六	配	七	配	八	配	九
二四〇、七〇三	二二七、六七六	三三〇、〇六八	三八一、五八四	三九七、三三三	四四五、三三三	四七二、一五〇	

電信取扱数は

種	年	種	年	種	年	種	年
發	二	發	七	發	八	發	九
着	六	着	七	着	八	着	九
一六、七九〇	二一三、四二〇	三六、九七四	三四、一六二	一七、三四六	二四、二〇三	二六、八〇七	三六、三七九

なり、其他教育なり衛生なり漸次改善の相を現はし、一帯帶水の八幡村には、東洋製鐵の主權を握る製鐵所の建設せらるゝあり先人が嘗て夢想だにせざりし若松の名譽なる名が歐米の文明諸國に喧傳せらるゝに至る嗚呼石炭の恩惠亦た大ならざや。

要するに、若松の大飛躍は既往六七年間に於てせり、然れば若松は其の名の如く、社會諸般のもの總べて若かし、商業も若かければ工業も若かく、會社も若かければ人民も若かし、若し其れ若松を一個の人として見ん乎、彼は冬枯の老人にあらずして、陽春の青年なり、彼は絶望に沈む衰運に坐するにあらずして、希望に満てる盛運に居るものなり、舊都會が豊に苦蒸して歴史を作らんとする時、若松は新都會として、軒新らしく新生活を營むものなり、故に總べての工業總べての商業愈よ益す繁昌すべく、財貨の出入は云ふ迄もなく、各地の實業家及び労働者も陸續來集するや論を俟たず、内地雜居實施の曉に至らば、外人の往來著るしかるべし、隨て若松の氣運を善導すべきは、識者の夙夜努むべき處なれ。

試みに思へ、有地者に必隨せし權力は、今や千金の寶を挾める人に

新若松港

新著松港
 移り來れり」とは、アインスワフトの語にして「英國商業家は紳士
 と爲るの新登壇門なりし」とは博士マヨソンの言に非ずや又た
 「貿易は紳士たる者の從事すべき職業と稱するを得ざらんや英國
 に於て貿易は紳士を出す處なり憶ふに一世紀若くは二世紀後に
 及び今日の貿易者の子弟たらん者は優に英國の善良なる紳士と
 爲り政治家と爲り代議士と爲り司法官と爲り高僧と爲り貴族と
 爲ること夫の至高最古の右門名族の後裔と軒輊するに至るべき
 や必せり」とは百年前に於て「フナ」が豫言せしところにて非ずや
 而して此の豫言の反響は既に英國に來たれり吾人は今ま彼が言
 を信ひ來りて此に若松の實業家を豫言せんと欲す知らず其の反
 響は何時か來るべきぞ

第二 黒金剛石

黒金剛石即ち筑豊四郡の石炭は若松港に對し生殺の權を有する
 ものにして若松港の一進一退は筑豊四郡の石炭と共にし筑豊四
 郡石炭採掘業の一榮一枯も亦た若松港と共にせざるべからず然
 れば「新若松港」を描くの筆は此に黒金剛石に轉ずるの必要あり

一 筑豊探炭業の過去

日本に於る石炭の發見は天智天皇時代に在るが如し、全帝紀を案
 するに

七年戊辰五月越國進水土可代薪油
 とあり本草綱目には

筑豊探炭業の過去

筑豊採炭業の過去

南北諸山出處多、代薪炊爨、鍛鍊鉄石、大爲民利、土人皆鑿山爲穴、橫八十餘丈、取之有大塊如石光者、有疎散如炭末者、但作硫黄氣、と記るし、象霞堂記には、

石炭は中國九州より多く出せり、俗に五平太と云ふ、按ずるに、其の始め五平太といへる者掘出せしものならんか、搥瀆の薪に代へて之を用ひたり、而して五平太なるもの常に諸國を廻り、石炭ある山を鑑定して價を極め買ひ取りては之を採掘せり、此の石を焼く時は臭氣ありて家事の用を爲さず、石炭の異名は五平太、煤炭、石墨、鐵炭、黒石、烏金石云々

と見へたり、併て寶曆年間黒田長政の遺志を繼紹して、黒田繼高が、遠賀川より洞海に注入する運河開鑿の大工事を起すや、吉田村の山脈疏通の際、土工等が地表を穿ちて窟に代へ之に炊爨せしに土中忽ち烟を發するものあり、就て注目すれば即ち黒色の石なりしなりと云へるを見れば、石炭の發見は久しき以前に在りと雖も、且

原益軒翁の筑前土産考に

遠賀、鞍手、嘉麻、種波、宗像の中、所々の山野に燃石なるものありて、村民之を掘取り薪に代用せり、遠賀、鞍手には特に多し、頃年船屋の山にても掘れり、煙多く臭惡しと雖も、燃へて火久しく、水風呂の釜に焚きて、良し、民用に最も便なり

とあるを見れば、石炭の猛烈たる勢力と特質とが、將來社會に如何なる大影響を及ぼすべきやは、更らに知られず、漸く百年前の頃より、薪缺乏の場處に於て之に代用せらるゝこととなりし也。明和年間の事なりき、石炭販賣の鼻祖とも稱すべき人、我が若松に現はれたり、其の人は即ち和田佐平にして、家代々里正たりしなり、佐平は心を商業に注ぐこと淺からず、一日公用を帯び福岡へ赴きけるが、途次某の地を過ぎ、農夫が赤黄色を帯びたる黒石を燃しつゝ、凍冽たる寒氣を凌ぎつゝあるを見て、農夫に向ひ、そは何等の杖

偉人の失敗の母なり

筑豊採炭業の過去

料ぞやと質し、に農夫は五平太なりと答へけり、佐平心筋に思へらく、是れ必ず世益を補ふべきものならめと、少許の石炭を乞ひ家に携へ歸り、日夜之が用途を考察し、遂に製鹽に用ふべきを覺りければ、住吉丸、蛭子丸の二艘に石炭を積込み、周防三田尻の鹽濱に輸送して販賣を試みしかど、未だ之が燃法を究め居らざりしよりして、佐平一の顧客を得ず、莫大の損失を見て空しく、故郷に引返したり、しかも積荷は三田尻出帆の際悉く之を海底に遺棄したり、然れども失敗は是れ偉人に於て成功の母たり、佐平不撓の精神は一刻も挫折せず、爾來寢食を忘れて燃法を究め、終に鐵網に懸けて之を燃すべきを發明し、此に再び石炭を三田尻に輸送し、説くに燃法を以てせしかば、製鹽者も佐平の志に感じ、聊か之を購ふて鹽濱に使用せしに、火力の久しきに堪へて經濟なること、新類の比に非ず、果

皇天仁人を殺さず

郡仕組

ては、各地の製鹽者の傳聞するところとなり、争ふで注文するに及びし故、佐平大に成功を喜び、漸く多額の資本を投ぢ、數多の坑夫を集め、自ら石炭採掘を行ひ、各地に販路を擴めしが、窮屈なる小天地は容易に佐平の事業をして大ならしむる能はず、端なくも藩政の諱む處となり、漫に罪科に據せられて獄に投ぜられたり、罪なきの人、豈に長く獄窓の鬼とならんや、皇天は仁人を殺さず、其の後幾もならず、郡奉行支配の下に郡仕組と爲し、普く他國に石炭の公賣を謀るに至り、佐平釋されて手代に任用され、數年精勤を擧ぐんで、爲め、屢々賞詞をさへ受け、八十八の高齡を以て、文化八年穩かに永眠に就きぬ。

郡仕組に於る石炭採掘事業も未だ幼稚なれば一般の秩序立たず、越へて天保十一年の頃、今の松本潜氏の祖父松本平内なる人、

筑豊採炭業の過去

筑豊採炭業の過去

石雞卵生蠟三種の物産取扱所を、遠賀郡蘆屋港に設けたるが専ら之を焚石會所と呼び、所屬吏員手代數名を置き、遠賀鞍手兩郡に山本(今の坑主)取締一人、嘉麻穂波兩郡に全一人を置き、若松港にも其の出張所を設けて、事務の進捗を圖らしめたり、其の方法は藩中通用紙幣たる銀預を前借として山本に貸與し、之を掘子(今の坑夫)の賃銀、糧米其他坑業の資に充てしめ、而して山本に於て採掘したる石炭は、悉く之を焚石會所に送り、規定の手續を経て商船に販賣し、其の代金を金銀貨に換へ、年末の計算に於て貸與金を返納し、以て銀預償却の準備金に充つる事と爲せり、其れ斯の如くなれば、當時石炭の賣買は、豫て焚石會所より指定せし問屋を経て行はれ、隨意に他人の營業を許さず、若し他より石炭買入を望むものあれば、先づ問屋に依て焚石會所に届出で、入用の石炭を買入るれば、入港船

筑豊採炭業の過去

船の順序により逐次出港したり。福岡藩が此の如く稍や意を石炭採掘業に留るや、小倉藩も亦た豊前田川郡に炭坑を開き、採掘し得たる石炭は、専ら之を蘆屋港の焚石會所に托して販賣し、當時筑豊の坑野に獲たる石炭は、中國及び四國又は藩内の製鹽者の需要に充て、石炭は一般人民の日用に供し、且つ福岡、小倉兩藩士が拜借と稱して、之を需要したりといふ。然も時勢の推移は、徳川幕府の晩年、外國より蒸氣船を購はしめ、之が燃料として、大クレ炭即ち塊炭は御用炭となりしがゆゑに、若松港に輸送し來るものは、中島に貯藏し、此に之を俵荷と爲し、江戸表へ回漕したり、時恰も浦賀に米櫃の砲聲響き、六十餘州の民心亦た穩かならず、邊海警備の策決して忽にするべからざる危機に臨むや、各藩共に競ふて蒸氣船を購ひければ、石炭の需要頓みに増加し、

筑豊採炭業の過去

遂に塊炭は其の燃料に供すべきもの、外一切賣買を禁ぜられたり、去れば藩制として是迄一箇年の採掘高一億萬斤を超ゆべからざりしもの、果ては制限を超過することとなり、明治五年局面一變新政茲に布かれて廢藩置縣の盛舉あるや、炭石會所も自然廢滅して自由販賣の新天地となりぬ。

吾人此に自由販賣と爲りし以後の小史を描くに先だち、燧石の發見者を世に紹介するの必要あり蓋し其の發見は今より四十餘年前にして、發見者を村上久三郎と云ふ、久三郎は田島屋久兵衛と呼び若松の人なり、年四十四、肥後天草に石炭採掘を始め、日々獲るところの石炭中異質のものを見出せしに、人如何にして之を用ふべきかを知らず、瓦礫と同一視して毫も顧みず、然れども、獨り久三郎は其の用途を發見せんと欲し、試みに之を炎々たる火中に投ぜし

に豈に計らんや、此の異石忽ち火を發し、而も焰なし、其より人唱へて不燃石と爲せり、久三郎は尙ほ一縷の希望を懷き、苦心焦慮、試験に試験を加ふること四箇年、その間、東奔西走、崎嶇轉阿、私財を消盡しては終に家産を破るに至り、漸く石灰を焼くの用に供すべきを發明し、次で築窯の法をも究め、頗る好成績を得しかば、燧石と名づけて廣く四方の需用に應じけるが、好評噴々、到る處に傳はり、輸出額も年々加はり、もて庶民之に依り豊かに炊煙さへ擧げぬ、久三郎平素身を持する淡泊弊衣を着け、粗糲を食し、鑠金の夏墜指の冬、日夜業務に匪勉して更に倦むなく、時に或は寢食を廢するに及びぬ、安政三年、又燧石を筑前嘉麻郡上三緒村に發見し、之を採掘すること多年、遂に居を若松に移して、燧石賣捌所を設け、一億萬斤餘を諸方に輸出するに至りたるが、明治五年四月、官久三郎が積年の勞を

筑豊採炭業の過去

筑豊採炭業の過去

賞して百金を賜はり、十二年十月六十二の高齡を以て逝く、晩近若松の抗業者、久三郎が功績を永く世に傳へんとて、修多羅に一碑を建てたり。予(著者)が文壇の老友、山田天山、爲めに碑文を撰み、且つ銘して曰く、

名垂不朽

若松之里 有一男兒 穿坑採石 從事于斯

開物成務 百世其遺 名垂不朽 後人仰之

原動あれば反動あり、夫の焚石會所を廢して自由販賣の新天地と爲るや、久しく窮屈なる制限に困しみたるもの、急流又た奔濤、何人と雖も自在に抗業に従事するに及び、全業者の競争一時に激甚に馳せ、筑豊の煤田は蟻の甘につくが如く、且つ石炭問屋なるもの勃興せし結果、直に濫掘濫賣の弊害を醸し、甚しきは收支相償はざる相場を以て取引を爲し、經驗なき抗業者は未熟なる販賣者といふも

急流奔濤

濫掘濫賣

丁丑賑亂の大影響

筑豊採炭業の過去

に負債に首の廻らぬあり、失敗に産を傾るあり、紛然又た雜然、抗業の前途實に悲しむべき兆候を呈し、心ある者今は反て制限の必要を感じ、明治七年、舊時の制度を復活せん事は縣廳に出願するに至れり、然れども、明治の昭代亦た舊套を襲ふべからず、當局者詮議の未賣買取締を目的とし、釐稅取纏の名義を以て、蘆屋及び若松の兩港に出張所を設け、縣官をして採掘賣買上の監督を爲さしめしかば、抗業稍や緒に着き、明治八年頃は筑豊四郡の出炭高一億五千萬斤に達したるに、禍は再び來たれり、明治十年西南の戦争是なり、兵馬薩肥の野に奔躍するや、政府が數多の軍夫を募集せし影響、端なく抗夫及び胴子の不足を來たし、隨て勞銀の暴騰著るしく、一個年餘の長日月、抗業の萎靡、一日凄然たり、翌明治十一年、十二年も戦争の餘響、抗業の面目未だ一新せず、十三年の冬、救治策として若松商

筑豊採炭業の過去

會を組織し、各炭坑と契約して一切の販賣に専従せしむ、綿の蓄積依然として障礙を爲し、遂に其の實行を得ざりしなり、加之明治十三年冬の暴風は前後四十七日間船舶の航路を絶ち、石炭需要の中心點たる大阪神戸の缺乏は見る／＼一萬斤百二十圓の大暴騰となりたるも、筑豊の石炭は一片だも供給する能はず、坑業者は之を遺憾に思ひ、只管天候の險惡を怨み居りしが、間もなく百二十圓の相場は翌十四年の夏に至りて四十圓臺に暴落し、次で十二圓の大下落と爲りぬ。

彼の謠ふ調子を聽け、「朝もどふから、カンテラ提げて坑内さがるも、親の罰」他は太陽の光を浴びて勞作すべけれど、坑夫のみは常暗の地中に働くなり、此の頃は一斑の鶴嘴を振ひ一荷の籠を擔ひ、坑道を或は昇り或は降り、日に何尺月に幾丈、事業も心の如く捗らず、偶

ま水の侵すあるか、磐の横はるゝれば費の多きに堪へずして、停業するさへ稀ならず、隨て出炭高も甚かりしに明治八九年の交、長崎の人片山逸太氏、田川郡糸田炭坑に水揚機械を用ゐ、其より明治十二三年の頃、帆足義方氏は遠賀郡香月村に、杉山徳三郎氏は穂波郡目尾村に、堅坑を穿ちて機械を据付け、各々洋式に採炭せしが、當時未だ坑業の幼稚にして遅々たる、三氏共に充分の効果を自家に收め能はざりしと雖も、新機械の使用は筑豊四郡の坑業に一大刺激を與へしなり。

茲に石炭相場の變遷を示めさん乎、明治五年より七年迄は、相場大に下落し、八九十の三箇年は稍や騰貴したれども、十一、十二の兩年は再び下落し、十三年冬より十四年春迄は未曾有の好景況を現はし、十四年秋より十五年春迄は又たも下落したり、其より三箇年は

一落

左程の變化もなかりしが、十八十九の兩年は大下落し、二十年より二十一年迄は案外の好景氣に引直し、二十二、二十三の兩年は持合ひしも、二十三年の暮に及びて下向き翌二十四年は淫霖晴る間なく、僅に七坑を除きて其他の各炭坑悉く水災に罹り、市場の石炭拂底を告げ、俄然相場を引上げしが、二十五年は又たもや大下落となり、廿六年秋以後の好景況は二十七八年日清戦争に依て案外に主向き爾來帝國の膨脹と共に工業の勃起は非常の好望を以て今日に持續せり。

一一 筑豊石炭坑業組合

筑豊石炭坑業組合

筑豊坑業の首腦たる筑豊石炭坑業組合の組織せらるゝに至りしは、決して偶然の出来事にあらざ、按ずるに夫の炭石會所廢せられ

同業組合

聯合會

聯合組合

筑豊石炭坑業組合

て石炭の自由販賣を許さず、非常の大弊害之に伴ひしを以て、福岡縣廳も此に大に憂慮するところあり、明治十八年四月、縣令第三十四號を以て同業組合準則を布達せしが、蓋し筑豊石炭坑業組合は此に胚胎せり、即ち此の準則に従て、遠賀、鞍手、嘉麻、穂波、田川の五郡に、各々一個の同業組合を設け、次で同年十一月、各組合の聯絡なるべからざるを感じ、鞍手郡直方町に各郡の聯合會を開き、規約并に一括販賣の方法を協議せしが、此の會議たる案と筑豊五郡に跨がり、六百有餘坑の集合躰なれば、感情を異にするもあり、事情の盡さざるもあり、苦情百出、議論數岐、何時果のやくもあらざ、爲めに出張の縣官は無論有志者の憂慮大方な多し、利害を説きて、百方周旋せしが、遂に同町の民神多賀神社境内に盛衰を張りて、協和を謀るに及び、漸く親睦の効を奏せ、出席者一同胸襟を披らきて、懇談歡

筑豊石炭坑業組合

踏目出度各組合を併せて聯合組合を組織せり。同年十二月即ち各郡聯合組合組織の翌月其の取締所及び一括販賣所を若松港に設立し當時の縣令岸良俊介氏を招き一大祝宴を舉げたり其の時幹旋の勞を取りし重なる人々は安川徹一郎松本潜許斐鷹助杉山徳三郎麻生太吉森滋軌足義方和田武生等の諸氏にして其の後再び會議を芦屋町に開き規約の細目役員の撰舉を議行し總長には石野寛平氏を幹事には桑野里七有松伴六後藤健作伊藤陶索の四氏を又た組長には原田專三郎清水涼平和田武生副田與七郎の四氏を選舉せり斯くて間も無く若松築港會社の設立を見しかば石野寛平氏は同會社に轉任して大に爲すどころあり他に總長を任せしかど宿弊の存する建一期六夕にして矯正の効を見る能はず明治二十六年十一月稻垣徹之進氏を名譽總長に

推し其の整理を托せり然るに爾來鐵道の發達に因り水陸兩運の利害關係大に舊時に異なるを以て規約改正整理委員に安川徹一郎安達仁造麻生太吉松田武七郎筒井省五の五氏を舉げ更らに安達仁造氏を推して名譽總長たらしめ月次常議員會を以て規約の履行を謀り着々事業の整頓を見て今日に及び蓋し筑豊石炭坑業組合の目的は左の事項を處理し専ら坑業の改良擴張を圖るに在り。

- 一 採炭事業に関する諸般の改良進歩を研究する事
- 二 石炭販賣に關し共同の利益を保護する事
- 三 石炭運搬の便法を計り其取締方法を議定實施する事
- 四 坑業に關する諸種の統計表を調製する事
- 五 組合規約及會議の決議を實施し規約處分に關する事
- 六 官衙の諮問に應答し組合の意見を陳述し又は坑業に關し建議する事

筑豊石炭坑業組合

筑豊石炭坑業組合

- 七 坑業に關せる官衙の布達其他不時商況の變動に付組合員の注意を促す事
 - 八 組合經費收支に關する事、但石炭運搬の便法の一として施すべき河川土砂浚渫事業は利害を共にする坑主に於て部分會を置き部分會に於て其方法及經費徵收法等を議し單に部分會の事業として施行するものとす
 - 九 官衙井に組合員の報告に關する事
 - 十 組合員の出入井に名簿保存に關する事
 - 十一 組合記録調製に關する事
- 要するに、筑豊石炭坑業組合は、直接坑業の發達を謀り、間接運搬機關の進歩を促したり、即ち運河の疏通、鐵道の布設、港灣の改修、一括販賣店の組織、煽石の制限、輸の運賃、石炭輸出等の重要問題に向て全力を傾けたり、詳言すれば、同組合が運搬の便利を圖り、運賃の輕減を求むるは、全組合組織當初の問題なるに拘らず、出炭の増額に

伴ひ、運搬の不便は運賃の騰貴と共に著るし、からんとする傾向あり、爲めに、全組合は屢ば會議を開きて、船業、問屋業の兩組に交渉する數次に及びし、更に宿弊を一洗する能はざりしかば、是れ畢竟運河の不便之を疏通するにあらざんば、假令如何なる制限を設けたりとて、運賃の騰貴を防ぐべからず、是に於て全組合は巨額の費金を惜まざり、堀川筋の修繕、井に浚沙、工事を行ひ、明治二十一年の如きは、遠賀川大改修、測量費若松港内波止場、建築費の補助をも之を爲したれども、出炭の増加は猶ほ運搬の不便を補ふべくならず、因て坑業の前途を見て、鐵道敷設の必要を覺り、徐ろに計畫するところありしが、當時の氣運は逸早くも地方の有志をして之が計畫を爲さしむるに及びし、故に組合員舉て其の發起人と爲り、三千の發起株を得んと協議一決之を有志に諮りたり、然りと雖も、鐵道會社の

筑豊石炭坑業組合

筑豊石炭坑業組合

發起株は五千に限られあり一方に向てのみ夥多の權利を分賦する能はず終に五百株を得て發起者の資格を有するもの十餘名を全組合に出せり是れ即ち筑豊鐵道會社の濫觴と知られたり此くて全組合は一日の休息をも爲さず華々汲々運河港灣の平面深淺二測量は無論若松芦屋の兩港に石炭賣捌及び廻漕引受所を設け燧石の濫掘濫賣の弊を矯め運搬會社を置きて船業の改善を謀りたり明治十九二十年年度の如きは供給餘りありて需用足らず石炭の價格暴落して坑業經濟に大打撃を與へければ日本石炭會社は支那輸出の計畫を爲し門司港に税關派出所設置を請ひ屢ば上海に向て輸出を試みしも救済の目的を達せず反て自家の失敗を招き遂に其の志を變じたり而して漸くにして海外市場の景氣引直しければ明治二十二年總長石野寛平氏坑主惣代安川敬一郎行

一日も休息せず

三縣石炭全業會

實孫次郎氏等上京して當局者に就き外國輸出の隆盛を願はし努めて運賃を輕くするの必要ある旨を説き頗る贊意を得たり爾來品質の混同を防ぎ顧客の信用を博するに勉め今は全く局面一變亦た舊態を存せず其れ然り筑豊石炭坑業組合は坑業の監督者として諸般事業の刺撃者として炯々たる巨眼を注ぎつゝあれば坑業の前途に幾層幾倍の活氣を添ふべく誠に慶すべき也此に特に附記すべきものあり福岡佐賀長崎三縣石炭同業會の組織是なり蓋し前田正名氏例の實業に對する熱心を以て率先之が勸誘を爲し明治二十七年九月十三日を以て三縣の坑業者は福岡市東公園皆松館に會し左の規約を議定せり

第一條 本會は福岡佐賀長崎三縣下石炭全業者を以て組織す
筑豊石炭坑業組合

筑豊石炭坑業組合

第二條 本會は同業者互に糾弾を通行し親睦を旨とし石炭産輸出濫賣を禁止し粗悪炭の混入を制止し海外に於る石炭販賣市場の商權を擴張し新業の利便を増進するを目的とす

第三條 本會は一縣毎に委員五名を設け三縣交替を以て一年二回四月十月順次委員會を開き第三條に關する事の協議を爲すものとす但し必要ある場合は臨時會を開く事あるべし

第四條 本會は時宜に依り本會の評決を以て意見を其筋に建議し又は其筋の諮問に答申し若くは他府縣同業者に交渉することあるべし

第五條 本會の評決は三縣通して之を施行するものとす但し意見の一致せざるものは此限にあらす

第六條 第三條に定める會費は當番縣同業者に於て負擔するものとす但し會員の旅費日當等は各縣適宜の支辨とす

吾人は日本全國中著名石炭産出縣が此の如く相一致して坑業の進歩發達を促すを賀す

三 筑豊探炭業の現在

筑豊石炭坑業組合の未だ設立せられざる以前に於ては一箇年の出炭額僅に五億萬斤内外なりしも一方に河流の浚沙を計りて舟楫の便を得他方に筑豊鐵道の煤田を横斷するに至りて水陸運搬の勢力猛然として十五億萬斤の出炭となり且つ製造工業の各地に勃興して石炭の需用亦た昔日の比に非ず昨明治二十九年の如きは無慮三十九億餘萬斤の出炭を見たり今更筑豊四郡の探炭業が如何に長足の進歩を爲しつゝある乎を知らんと欲せば宜しく眼光を左の統計表に曝らせよ。

筑豊探炭業の現在

年度	送	炭	額	年度	送	炭	額
一九		五、二〇六、三〇二、五五四	二〇			六、八八九、三、五三〇、五	

出炭郡別

美豊探炭業の現在

二二	九、二六七三、三三〇四	二二	一一、二五五二、六七〇六
二三	一三、一一八二、五二五六	二四	一五、四六二九、〇三三七
二五	一七、四六八二、七四〇三	二六	二〇、七三三五、〇八六三
二七	二八、七四二九、〇五三六	二八	三五、八九五一、五一八六
二九	三九、三五五〇、三三五〇		

更に之を郡別すれば左の如し。

年	郡	遠賀	鞍手	高麻	種波	田川
一九	一	七三三三、三〇五九	二、三九七、七六三	五、六四七、三三〇〇	八、四〇三、八一〇〇	六、六九二、九三三〇
二〇	二	七、五〇六、二一五〇	二、八一〇、九九九七	八、一五〇、三三三三	一一、三三〇、四四八	一、〇、一、六四四、三三六五
二一	三	一、四六八六、八三三三	三、五六〇、七、四二四四	一、七、七、二、八、五、五、八	一、三、六、二、二、五、〇、〇、八	一、〇、〇、〇、三、七、二、六、一
二二	四	二、二、二、七、〇、〇、〇、〇	三、七、七、七、七、八、八、八	一、九、三、三、三、三、三、三	一、七、七、七、七、七、七、七	一、七、七、七、七、七、七、七
二三	五	二、三、三、三、三、三、三、三	四、二、二、二、二、二、二、二	二、二、二、二、二、二、二、二	二、二、二、二、二、二、二、二	一、八、七、一、〇、二、六、五
二四	六	二、四、四、四、四、四、四、四	四、三、三、三、三、三、三、三	二、九、二、三、三、三、七、九	二、三、三、三、三、三、三、三	三、三、三、三、三、三、三、三
二五	七	二、五、五、五、五、五、五、五	四、四、四、四、四、四、四、四	三、〇、三、三、三、三、三、三	三、〇、八、七、一、三、三、八	三、八、六、〇、二、九、二、二
二六	八	二、六、六、六、六、六、六、六	四、五、五、五、五、五、五、五	三、一、一、一、一、一、一、一	三、一、一、一、一、一、一、一	三、一、一、一、一、一、一、一
二七	九	二、七、七、七、七、七、七、七	四、六、六、六、六、六、六、六	三、二、二、二、二、二、二、二	三、二、二、二、二、二、二、二	三、二、二、二、二、二、二、二
二八	一〇	二、八、八、八、八、八、八、八	四、七、七、七、七、七、七、七	三、三、三、三、三、三、三、三	三、三、三、三、三、三、三、三	三、三、三、三、三、三、三、三
二九	一一	二、九、九、九、九、九、九、九	四、八、八、八、八、八、八、八	三、四、四、四、四、四、四、四	三、四、四、四、四、四、四、四	三、四、四、四、四、四、四、四

遠賀出炭

町村名	坑山名稱	量	坑業人名
長津	大津	六四〇五、五五〇〇斤	左納 権一
長津	第二新	二二一〇、三二五〇	九州炭坑會社
長津	深坂	一六四九、五九四〇	岩崎 久米吉
上野	多賀野	一六四七、三四八〇	岩津 房次郎
山鹿	大君	一六〇四、〇三〇〇	城野 琢磨
底井	第一大隈	一五〇九、三二〇〇	中西 七太郎

又た此等の出炭に與て大に力あるもの、即ち昨明治二十九年後半期に於て一千萬斤以上出炭せし炭坑は左の如し。

◎遠賀郡之部

二八	五、五七九、四六三三	一三、三、三、三、三、三、三	五、八二四、九、八一四四	七、四九〇、六、七二二四
二九	三、八三三、九、四三三六	一三、八三三、八、〇三九〇	(郡制改正兩郡合併)	一〇、四八七、三、三三七四

◎鞍手郡之部
美豊探炭業の現在

鞍手出炭

筑豊採炭業の現在

町村名	坑山名稱	量	坑業人名
宮井香井田	大ノ浦	一、三五七八、五六八〇斤	貝島太助
新入	新入	一、二七七七、七四四〇	三菱合資會社
勝野	勝野	五九八六、三八四〇	近藤古河兩名
下境	本洞	五、一三七、二五五〇	許斐鷹介
下境	藤洞	四四六三、六〇〇〇	長谷川芳之助
直方	直方本洞	三四九〇、七〇四〇	許斐鷹介
勝野	新御	三、二二八、二三〇〇	森清高吉外五名
下境	日燒	二、五五五、五二九〇	鷹取行藏
宮田	赤地	二、五五〇、四三〇〇	城野琢磨
宮田	白田	二、一九九、七六〇〇	長網好勝
木屋ノ野	金剛	一、四〇七、九〇九〇	瓜生卯太郎
勝野	御徳	一、三一五、八五〇〇	中西七太郎
		一、一八七、七一〇〇	彌三太郎

種波出炭

筑豊採炭業の現在

町村名	坑山名稱	量	坑業人名
二瀬	高雄	一、二九三三、八二一六斤	松本澄
笠松	鉢田	一、一七三九、〇七八〇	三菱合資會社
額田	大城	八九六九、八六二〇	明治炭坑會社
唯井	唯井	四五三一、九六八〇	三菱合資會社
種波	忠隈	三七〇一、三七六〇	住友左衛門
笠松	芳雄	三四八三、〇六一〇	麻生太吉
大谷	庄司	二、二七八、九二七五	住友左衛門
大谷	目尾	一、〇一三、八二〇〇	杉山古河兩名

◎嘉穂郡之部

◎田川郡之部

町村名	坑山名稱	量	坑業人名
上野	赤池	一、三〇八三、八四〇〇	安岡浩太郎
弓削	田川採炭	一、二二〇六、三四〇〇	福島真助

筑豊探炭業の現在

弓削田	弓削田	神田	弓削田	弓削田	神田	弓削田
宮	小松	金	澤	起	金	登
尾	浦	谷	地	行	田	田
一五三二、一九八〇	三三七八、三四五〇	二五六七、六六六〇	三七四三、三二八〇	四五〇九、二八一八	四九二四、九二九〇	七七九四、五四一〇
高倉	武腰	谷	藏内	久良	毛利	山平
倉	寅	茂	治	地	元	岡
真	寅	平	耶	寅	三	太
米	太	耶	作	次	徳	耶

尙ほ明治二十九年前半季に溯りて、一千萬斤以上の石炭を輸送せし炭坑を擧ぐれば左の如し。

◎遠賀郡之部

町村名	坑山名稱	量	坑業人名
長津野第一大炭	津野第一大炭	五九五七、八一〇〇斤	左納橋一
底井野第一大炭	津野第一大炭	二三七〇、六三九〇	中四七太郎

長津野	長津野	長津野	九州炭坑會社
外	深	第二	岩崎久米吉
弱	坂	手	林彦三
一二一九、〇六〇〇	一三七五、一〇〇〇	一七六四、八七〇〇	

◎鞍手郡之部

町村名	坑山名稱	量	坑業人名
宮田香井田	大ノ浦	一、六〇〇、二五五〇斤	貝島太助
新入新	野新	一、三五二九、二〇八〇	三菱合資會社
野勝	野勝	六九九二、六二〇〇	近藤廉平
下境	境本	五五二六、一四一〇	許斐鷹介
下境	境本	四四二二、七八〇〇	長谷川芳之助
直方	直方	三九四八、六六五〇	許斐鷹介
勝野	勝野	三六〇六、二五三〇	森清高吉外五名
勝野	勝野	二二二五、八四〇〇	城野琢磨
勝野	勝野	二〇七二、〇三三〇	堀三太郎

筑豊探炭業の現在

筑豊探炭業の現在

町村名	坑山名稱	量	坑業人名
上野	赤川採炭	一、一七〇九、〇九〇	安川 浩一 助
野田	豊田	一、一一八、二四〇	福島 真太郎
神田	金田	六四七〇、七三五〇	山平 資三 太郎
神田	起地	五〇七三、一〇二五	山平 資三 太郎
神田	起地	四二五〇、五九七〇	山平 資三 太郎
神田	起地	二五六〇、〇四五六	山平 資三 太郎
川崎	大谷	一八六八、八三二〇	山平 資三 太郎
川崎	大谷	一六二五、六六四〇	山平 資三 太郎
川崎	大谷	一五二六、九二〇五	山平 資三 太郎
川崎	大谷	二二二五、六五四八	山平 資三 太郎
川崎	大谷	一〇〇〇、〇一四五	山平 資三 太郎
大谷	大庄	二四一五、五〇九五	住友 吉左衛門
大谷	大庄	二二五五、〇四〇〇	明治炭坑會社

◎田川郡之部

筑豊探炭業の現在

町村名	坑山名稱	量	坑業人名
勝野	山口傳ヶ浦	二〇〇九、二五〇〇	安永 吉兵衛
宮野	赤地	一八二五、二二〇〇	長綱 好勝
宮野	赤地	一四二八、三八五〇	長綱 好勝
宮野	赤地	一三八〇、六七三〇	瓜生 卯太郎
宮野	赤地	二二一九、〇六〇〇	瓜生 卯太郎
二松	高松	一、三三六三、一九九四	松本 浩一
二松	高松	一、三〇四一、〇八四〇	三菱 合資會社
二松	高松	六九三三、一〇二〇	安川 敬一 郎
二松	高松	六一三六、七〇四〇	三菱 合資會社
二松	高松	六〇九三、六九九一	三菱 合資會社
二松	高松	三三四九、七四八〇	杉山 松太郎
二松	高松	二五二九、七五六〇	住友 吉左衛門
二松	高松		麻生 太郎

◎嘉穂郡之部

筑豊採炭業の現在

以上記載の分は僅に四十許坑に過ぎず、此外既掘炭坑六十餘坑并に特許及び借區を合して三百餘坑あり、此等は運搬の便利を缺き、若くは資本の融通を得ず、空しく細張を爲せる姿あり、雖も各地石炭の需用年一年増加すべければ、逐次機械の音坑夫の唄に黒金剛石の採掘せらるゝあらん乎。

四 相場の變遷と輸出

明治五六年より現在に至る、筑豊四郡石炭相場の變遷は、既に「筑豊採炭業の過去」に於て之を記るせしも、今更に統計表に依れば、實に左の如き事實を示めず。

年	品		年	品	
	上	下		上	下
二一	一八〇〇	九〇〇	二二	二一三〇	一三七五
二三	二〇、九八	一〇、七五	二四	一九、五〇	二〇、〇〇

二五	一五、五〇	七、〇〇	二六	一七、一〇	八、一〇
二七	二一、六〇	一一、〇〇	二八	二〇、〇〇	一〇、〇〇
二九	三〇

漸次騰貴しつゝありし價格が、明治二十五年度に至て頗る下落せしは、内外需用の供給と相伴はざりしに因ると雖も、亦た筑豊四郡の炭坑が一時濫掘濫賣の弊に陥りしに因らざんば、あらず、然りと雖も、坑業者も遂に覺醒し、爾來改善の法に勵みしかば、稍や好評を博して價格の騰貴を見るに至れり、而して本年に入りては内地の製造工業大に勃興せし爲め、未曾有の好景況にて、上半期の平均價格無慮二十六七圓に達したり。

筑豊四郡石炭の輸出は、門司馬關兩稅關に於て、之を宰りつゝありと雖も、現品は悉く先づ門司港に吸集せられつゝあり、然りと雖も、

相場の變遷と輸出

海外輸出の消長

年	門司		馬關		計
	輸出数量	船用数量	輸出数量	船用数量	
二二	一、四三〇、七二五八〇	二、六七四、九五四八	一〇八、八六〇〇	一、八七〇、一七六〇	一、九四四、〇二八八
二四	二、三九二、八四七〇	六、三三三、三七三〇	一四〇、二八〇〇	二、五四〇、三、八〇四〇	五、四七〇、三、九二八〇
二五	三、四九三、〇四八〇	一、五四二、六〇、〇〇八	四〇四、一、二四〇〇	二、五四三、〇〇〇〇	六、七七一、三〇八八
二六	六、〇一六、七〇〇〇	一、二四七、三、九六〇	二、五四八、九六三三	八〇六〇、三、三六〇	八、三九七、一九五三
二七	五、六八三、八八八〇	六、八〇〇、五五六〇	四、六九五、九八五六	七、八〇三、二九七六	一、八四三、七二七三

相場の変遷と輸出
石炭の門司港に於るは只だ仲次に過ぎず九州鐵道が折尾驛を経て直接門司港に輸送しつゝあるは眞に小部分にして鋭敏なる水陸兩運に依て若松港に集められ又た散ぜらるゝものは筑豊四郡の全出炭額といふも不可なく門司港は實に若松港の餘響を蒙りつゝあるものなれば門司港の輸出は若松港の輸出と同一視すべきなり今門司馬關兩税關の手を経たる輸出炭量を示めさん。

輸出増加

二二	五、七六四、七〇、一六〇	四、七四一、六三三〇	五、五二七、七八〇〇	一、〇〇九、六六三〇	二、二七六、三、一六〇〇
二九	一、八〇五、七、九二二〇

是に因て之を觀れば二十四年は前年より多きこと二倍、二十五年は一億萬斤、二十六年は二億萬斤、二十七年は四億萬斤、廿八年は一億萬斤にして、二十九年は無慮五億萬斤なり
茲に輸出量數を筑豊四郡全出炭額より除去すれば、其の殘餘は悉く内地の消費たるを知るべし、即ち左の如し。

内地消費量數

年	内地消費額	年	内地消費額
二三	一、二二四、四九六八斤	二四	九、九九二五、一〇五七斤
二五	一、一九七〇、四三二五	二六	一、二、四二七、八九一一
二七	一、六、八九九五、三二六四	二八	二、三、一二五、三五八六
二九	二、二、二九七七、三四三〇	三〇

相場の変遷と輸出

全國輸出炭量表

年	全國輸出炭	筑豊輸出炭	差
二五	二一、八二九、一三六〇	六、二七二、三〇八八	一五、五五七、八二七二
二四	二〇、八二八、九二八〇	五、四七三、〇九二八〇	一五、三五八、〇〇〇〇
二三	二〇、四〇四、〇九六〇	一九九四、〇二八八	一八、四一〇、七〇七二

相場の變遷と輸出
 而して、尙ほ輸出額を筑豊四郡全出炭額に對照すれば、二十三年は出炭額の六分の一、廿四年は三分の一強、二十五年は三分の一弱、二十六年は二分の一強、二十八年は三分の一弱、二十九年は二分の一弱を輸出したり、蓋し、二十七年後は出炭額の著るしく増加せしに拘らず、輸出額の割合減少せしは、日清戦争以來内地の事業膨脹の結果、需用の度を高めしに因る也。
 更に、門司、馬關、兩税關の手を經たる輸出品數を、全國の輸出品數に比較せんか、其の半數は實に筑豊四郡の石炭之を占め居るなり。

海外輸出地名表

地名	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九上半年
香港	三、八〇〇	四、二〇〇	三、八〇〇	五、一六五	六、四九二	二、八四五	三、三九四
新嘉坡	一、八〇〇	一、〇四〇	一、八〇〇	一、八二二	六、五五	二、二二二	二、六四〇
マニラ	一、八〇〇	三、〇〇〇	一、八〇〇	一、八二二	〇、八六	〇、〇四	〇、六九
ジャバ	五、〇〇〇

換言すれば、筑豊輸出炭は全國輸出炭に比し、二十三年は十分の一弱、二十四年は四分の一弱、二十五、六兩年は三分の一弱、二十七年以後は二分の一強に相當する盛運に達せり、其れ然り而して、此等石炭の輸出先は何處を試みに左表を點檢せよ。

相場の變遷と輸出

相場の変遷と輸出

輸出先迄の運賃は時々變動ありと雖も、三井物産會社が既往十年間平均計算せしところに依れば、

自門	至上海	至香港	至新嘉坡	至桑港
最高	三、五〇〇	四、〇〇〇	五、〇〇〇	四、〇〇〇
最低	〇、八〇〇	一、二二五	一、七五〇	三、〇〇〇
普通	一、三三〇	一、六六〇	二、二二五	三、五〇〇

有力の石炭商は、本邦居留外人に媒介を頼み、輸出先の外人に向ひ、半年乃至一年間月々石炭若干噸を輸送すべきことを豫約し、其れその手續を以て輸出するなり而して此の媒介人は外人の代理者又は仲買人となり、二歩乃至二歩五厘の手續料を得責任を負ふて取引するなり。

海外の石炭需用者が、石炭の供給を仰ぐや、何月何日頃幾何送附せ

よと通報し注文を受けたる商店は、買受先に向て當時の相場を問合せ、且つ多くは、見本炭を送りて相場を定め運賃を尋ね、涼船問屋に船を借り、何月何日幾何を何船にて積送る旨を買受先に通報し、大藏省に外國船雇入免狀を願出で、尙ほ税關に届出で、直に石炭積込に着手し、船長の認定にて其の噸數を定め送狀を認めしめ、目的の港に到着せし後、精確なる量數及び代金を定る手順也。

五 炭業に関する團體

若松石炭業組合、若松港内居住遠賀郡若松町及石峯村戸畑村の石炭坑業者、石炭取扱會社石炭商堀石、該炭取扱人、石炭搭載取扱者を以て組織し、組合聯合規約を設け、之を履行するものにして、從來の慣行と目下の實況とを酌量し、營業上の便益を計畫し、一々改良

炭業に関する團練

擴張するを目的とし、航路の擴張不正炭の取締を始め、諸般の業務を進捗しつゝ、あり役員は

○組長 安川敬一郎 ○副組長 事務 和田源吉 ○港内取締相談役 大島傳七、帆足市右衛門 ○港内取締兼救護組監督 品川信健 ○書記 庶務會計 吉田成章 ○港内見廻兼救護組監督 沖口辰次郎
○常議員 久保太郎、小野孫一、日下部義抽、瓜生徳平、久保喜久三、福田信次、山本周太郎、(貯金管理) 杉山松太郎、長谷川芳之助

にして、組合店は

- 岩井益次 葉山辰造 馬場國臣 服部忠平 帆足市右衛門
- 戸川芳三 豊島才吉 大庭岡之助 大辻炭坑出張所 大島音吉
- 尾中馬吉 藤谷久五郎 和田象太郎 若松三太 和田常八
- 河村由太郎 梶原熊太郎 川端眞三郎 谷川 濟 高階眞佐七
- 反保市次郎 寶邊森太郎 玉地竹一 添島組作 長野英太郎
- 中村喜代治 沼野義也 村上市之進 村田安太郎 瓜生徳平
- 瓜生八郎 野中勝助 久保太郎 熊本甚右衛門 日下部義抽

倉田勝平 久保喜久三 熊本又兵衛 藏内次郎作 山崎源次郎
山本周太郎 安野耕作 安田嘉三郎 安川敬一郎 安田森吉
柳瀬八十吉 丸山藤太郎 正木辨治郎 今西支店 松本 潜
藤井俊平 福岡秀之助 福永倉太郎 手島守吉 安四好松
有村繁吉 秋田織三郎 安西徳太郎 向坂由久馬 交益商店
澤岡周八 笹瀬七生 菊地四郎吉 三菱支店 三井支店
重富勇吉 平野勝之助 森 滋 松 幹 一 關 福松
杉山松太郎 角 信 敏 鈴木利吉 藤井孫平 中村泰十
竹尾登吉 中四長三郎 山下松之助 安部勲次郎 古賀寛次
古賀徳太郎 有田信次郎 白井逸太郎 下川逸兵三 江藤清五郎
平野藤兵衛 堀内左良 西濱半平

の八十八店なり、其の規約中最も緊要なるものを左に摘録す。

第六條 本組合員は各自勉勵を旨とし、苟も他人の業務を妨害侵凌する等又は恣意利己を以て組合一般の損害名譽に関する等の所爲なからんと誓ふ

炭業に関する團練

炭業に関する団体

第七條 本組合員たるものは同盟の團結を鞏固ならしむる爲め各金五十圓宛貯蓄するものとす

第八條 本組合員炭業の節は貯金返戻方事務所へ申出つべし事務所は之を組合一般に廣告し炭代滞滯の有無を取調べ若し未済あるときは取引双方間協議決定の上返附の手續取計ふ可し

第十一條 當港石炭買入は總て現量數掛回し受渡すべきものとす但し賣買双方立合協議相整はざる時は此限にあらす

第十二條 石炭賣主買主へ賣渡し結約後船割又は荷車割せし後は買主に於て即日限り積替の手續を爲すべし

第十三條 石炭價格取纏の後若し表裏の荷物(底に下等を積み上上等を飾り上等品と欺くこと)ある時は總て下等を以て論ずるものとす

第十四條 石炭買入に於て代金は即日限り取引皆済するものとす(但し事故あり双方の協議纏らば此限にあらす)

第十六條 石炭荷主に於て奸策の所爲を以て甲乙の取扱人に二重定約を爲し送附し來りたる時は事實取調の上必先定約の者之が取扱

をなすものとす

第十七條 本組合中雇人雇入若くは解雇の節は必事務所へ届出るものとす但し雇人に關する規定は別に之を定む

全組合は一月四月七月十月に通常會を開き一月七月の兩度收支決算報告及び事務成績の報告を爲し七月の通常會には時期の收支豫算を議し且つ役員任期改撰を舉行す又た會議に於て營業の利害に關する事項と認むるものは決議に依り組長の名義を以て縣廳若くは郡役所へ建議するものとす

筑豊石炭部分會は明治二十七年の組織に係り、石炭販賣價格の標準を定め、濫賣の弊を防ぐ爲め、一定の問屋に取扱はしむる事等を目的とし、其の規約は筑豊石炭坑業組合規約を基礎として編製せられたり。

炭業に関する団体

門司石炭商組合は明治十八年本縣第四十一號布達同業組合準則に基き門司港に於て石炭賣買に従事するものを以て組織され其の目的は誠實信義を旨とし同心協力石炭業の發達を企圖するにあり其の規約は三十五箇條より成り組合員の權利義務役員及び職務權限會議加盟及び退去違約處分等を定めあれど之を略す。

第三 水運機關

水運機關は即ち堀川及び船にして此の兩者は古來洞海沿岸と遠賀川沿岸との交通消息を爲し殊に若松港の如きは大なる利益を蒙れり今ま左に之を記す可し。

一 堀川

遠賀郡の土地低濕にして源を較手郡大鳴山嘉穂郡馬見岳豊前國美彦山に發せる遠賀川は筑前第一の大川にして滾々洋々芦屋港に注ぎつやあり一朝大雨沛然として來るが若くは時淫霖に際せば河水直に氾濫して田園を荒らし人畜を傷ふとぞ稀ならず舊藩主黒田長政入國以來銳意治を圖り常に郡地を巡視して民の疾苦を問ひしが遠賀川の氾濫年々慘狀に至るを聽き元和六年親ら實地を踏査すると雨回熟ら山川地形を自擊し遠賀川筋より東方に新川を掘りて畜水を導き之を陳原瀨に通じなば以て水災を救ひ國家の鴻益を進むるを得んと考慮此に一決老職栗山大膳に旨を傳へたり大膳は元締として補助當職林玄蕃上司野口左兵衛原備左衛門野口勘右衛門并に下司伊藤次郎兵衛浦上徳太夫等を督し旨を奉じ案を立て元和七年正月十四日一方に舞鶴城營築の

日に使役せし石工を用ゐる他方に精練の農民を督して工を起とし、
 一帯の鐵、銅の鑿刻苦經營中間岩瀬を経て今の水巻村の内吉田
 の山開岩石を穿ちて折尾近く開鑿せんとするや未開の當時一種
 の迷信は村民の腦裡より脱せず將に吉田の山間に掛りし時村民
 無稽の言を放て曰く此處を開鑿せば山神の赫怒を買はんと此の
 一帯は役夫等をして非常の恐怖心を起さしめたり然りと雖も大
 膽の豪邁不屈なる熱心愚昧を離れ工事殆んど盧日なく水利漸く
 當初の目的を達せんとする時長政諱焉として遊幸忠之封を襲ひ
 國政を見るに大膽意協同す決然國を去りたり爾來大膽堀の名稱
 を殘すのみにて百二十年の久しき亦た堀川開鑿の志を繼ぐもの
 なく春花空しく散り秋月徒然餘はたり
 寛延年間及び馬田繼高治に屬る家臣柳橋又之進祐克が請を容

れ藩神長政の遺志を全ふして領民の疾苦を慰めんことに決した
 り當時士民尙は迷信を脱する能はず大膽堀を通じて開鑿せば神
 怒赫怒をべしと喧傳しぬ又之進勢に想はらく民心は遊ふは得算
 にあらず宜しく他方方向を轉せんにかかずと因て車返の難處岩
 石重疊の間を割て素志を貫かんと欲し之よりして又之進は江戸
 表御留守居役に設計を呈して意見を待ちけるも全時に郷夫頭城
 戸彌七古野文兵衛に旨を傳へ事業の成否を試験せしめたり然る
 に江戸表の公許あるのみならず試験の成績も亦た見るべかりし
 を以て寶曆元年正月より工事に着手し又之進は總司となり神崎
 仁右衛門は奉行となり郷夫城野彌七古野宅右衛門勝野文兵衛并
 外九十名を指揮し人夫には農民を使役し苦心慘怛土を掘り石を
 穿ち塊を運び礎を築び七年の星霜を経て堀川の滄業其の業を終

惣社山堰

東井手及
西井手

へたり而して夫の車返の難處は全九年全く竣功したるが際さ六
間幅三間にして長さ實に三百二十三間なり。然るに堰開の据地地質脆弱にして洪水の災禍は猶ほ水門を破壊
し川東郷の諸村水難を免れざるのみならず平日水量少なきため
舟楫の往來意の如くならず是に於て全工事の役夫頭を勤めし一
田久作中間村惣社山の岩石を穿ち此に堰開を建設し本流の水を
導かば萬代亦た這般の憂なかるべしと建議し遂に備前國吉井川
の唐戸に倣ひ再び工事に着手し費曆十二年功を奏したり是れ即
ち著名の惣社山堰開にして又た更に横三十八間高さ三尺三寸の
石碯を築き之を東井手と名づけたり明和年間又も横四十八間高
き三尺六寸の石碯を築き西井手と名づけしが十五箇村灌漑の利
益なり加ふるに舟楫の通行を容易ならしめたり。

壽命水門

功成る

崇勳碑

然るに此の三箇所の石碯は鞍手嘉麻穂波三郡の水利に關係を來
たせしを以て文化元年郡總司野村隼大祐僉工を督し補橋村の内
壽命に派水口を移しけむが是れ又た下流惣社山同一の水門を構
造せり此より眞名子川に移り下大隈に至り堀川に通ずるの設計
を爲したり其の距離約千六百間の上流となりたれば運漕灌漑共
に大に改良せり嗚呼先人が土玉技術共に幼稚なる時代に於て延
長四千九百九十八間幅員平均六間の堀川浚疏の偉業を完ふし此に
遠征鞍手穂波各郡の水災を防ぎ且つ田園灌漑運輸交通の便利を
來たしたる偉勳大功何物か之に如かんや今や此の餘惠は實に深
く抗業者に及び七千許艘の船は一箇年三十億萬斤の黒金剛石を
若松港に運漕しつゝあり然れば抗業者は近々堀川筋なる折尾驛
に斬然天を削る崇勳碑を建て千秋に其の名を傳へんとす。

川 船

二 川 船

筑豊四郡石炭の永運機關は船之を主りつゝあり其の航路は遠賀川の本流及び支流にして堀川は實に之が要路たり船は京都高瀬川に浮べる平屋の小舟に酷似し長さ三間ものも四間ものより成立ち三間船は多く上流水深き處に用ゐ四間船は下流水深き處に操られ容積は三噸半乃至六噸を限りとし筑豊鐵道の未だ敷設せられざりし以前は筑豊四郡の石炭悉く船の力に依りて若松港若くは芦屋港に運漕せられ遠賀川の本流支流共船相啣み白帆相重なるの奇觀を呈し明治二十三年の夏は其の數無慮八千を越へたりしも爾後稍平減少の傾向あり加ふるに遠賀川は夏季漲流の候に際し流緩に敷箇所の堰を設け河水を田圃に導くを以て舟

船の種類

船の増加

船の減少

船の増加

川 船

郡 名	三 間 船	四 間 船	計
遠 賀 郡	一、二六九	二、七六〇	三、九二九
北 條 郡	九四	七三七	八三〇
嘉 穂 郡	二八六	一、〇四七	一、三三三
田 川 郡	四八三	四一七	八九九
前 計	二、〇三二	四、九六〇	六、九九二

路を杜絶するも少ながらず殊に最も採炭力に富める嘉穂田川兩郡の如きは若松港を距る二十哩乃至三十哩の遠きにあれば筑豊鐵道敷設せられし以來船の運漕力は到底鐵道の運搬力に敵すべくもあらず間には其の業を廢するものありたり。然りと雖も明治二十七年後は採炭力の膨脹と共に船數の恢復を促がし同年末の現在數は左の如くなりたり。

同年後の正確なる統計なしと雖も船數の増加は四間船に於て著

川 船

るしく現今五千七百艘許に達し三間船は千三百艘許なりと云り而して其の運漕力は航路の遠近に依り差異ありと雖も近きものは一箇月六七回遠きものは一箇月一二回上下するに過ぎず客年二月下旬直方支部に開きし水運部分會に於て決定せし本川筋船運賃率は左の如し。

出炭地	船運賃	出炭地	船運賃	出炭地	船運賃	出炭地	船運賃
植木	二二〇	上御徳	三二五	第二浦	三二五	黒川	三三〇
庄八瀬	三七〇	高十雄	三七〇	片島	三九五	鶴三緒	五二五
明神	三三〇	古田	三三〇	下御徳	二八五	木城	三二五
小竹	三四〇	伊岐須	三八〇	石井手	四一五	飯塚	四一五
上三緒	五一五	赤池上	三八〇	赤池下	三七〇		

又々堀川内船運賃率は左の如し。

出炭地	船運賃	出炭地	船運賃	出炭地	船運賃	出炭地	船運賃
金剛	二九五	長津	二六〇	大津	二六五	香月	二九五
香月	二九五	大津	二六〇	長津	二六五	金剛	二九五
香月	二九五	大津	二六〇	長津	二六五	金剛	二九五
香月	二九五	大津	二六〇	長津	二六五	金剛	二九五
香月	二九五	大津	二六〇	長津	二六五	金剛	二九五
香月	二九五	大津	二六〇	長津	二六五	金剛	二九五
香月	二九五	大津	二六〇	長津	二六五	金剛	二九五
香月	二九五	大津	二六〇	長津	二六五	金剛	二九五
香月	二九五	大津	二六〇	長津	二六五	金剛	二九五

船業の進歩發達を圖り且つ運漕の便益を謀るは船業組合にして同組合は明治十九年の組織に係り運賃額の百分の一半を手數料として徴收しあり今も既往六年間の水運統計を擧げんに實に左の光景を呈せり。

年	水運若松	水運芦屋	計
二二	一、七〇七、三三九	三、三五六、八二三	一、四九三、六四七
二四	一、七〇七、三三九	三、三五六、八二三	一、四九三、六四七
二五	一、七〇七、三三九	三、三五六、八二三	一、四九三、六四七

川 船

川 船

二六	二二、九七五、九八五、六	八九二六、〇六一	二二、八七〇、二〇四、七
二七	二二、六九八、八〇八、三六	九四四二、三四七〇	二四、六四二、九四三、〇六
二八	一三、七四六、四七四、三	一、四五四四、七四〇、九	一五、二〇〇六、二二五、一
二九	一四、〇〇九、八七二、七七	三八六、〇四九〇	一四、〇四八五、七七六、七

蓋し若松港の陸運に向ふに隨ひ、芦屋港の衰退は免るべからず、其の未運送炭の如きも、年々減少しつゝあるを見る可し。舟手は多々、船年の者なれども、間には年齒僅に十三四才の小兒もあり、又た五六才の老翁もあり、數十哩の長途雨に風に單身を一竿の棹に托し、操縦自在の誤なく上下しつゝあり、其の數千の舟子は各自繩を有するにあらざ、各地の富豪之を占め幾分の利益を収めて舟子に貸與せり、而して舟子は其の地方部落に五六人若くは十人位相集りて組合を組織し、組合中の有力者を戴て親方と號

し、親方は家長の如く、舟子は家族の如く、慶弔相共にし、緩急相應せ、團體頗る強固なるが、彼等は素と無教育なれば、荷主の信用を顧みず、途中積荷を擲ぎて不正の利益を貪ることあり、抗主との定約金を騙り取ることあり、爲めに荷主又は問屋の迷惑甚だしければ、筑豊若炭抗業組合は、夙に遼瀋川の支流なる直方、芦屋、柳川、堀川等の要處に派出所を設け、通行の船を一々點檢して、此等の惡弊を矯正し居れり。

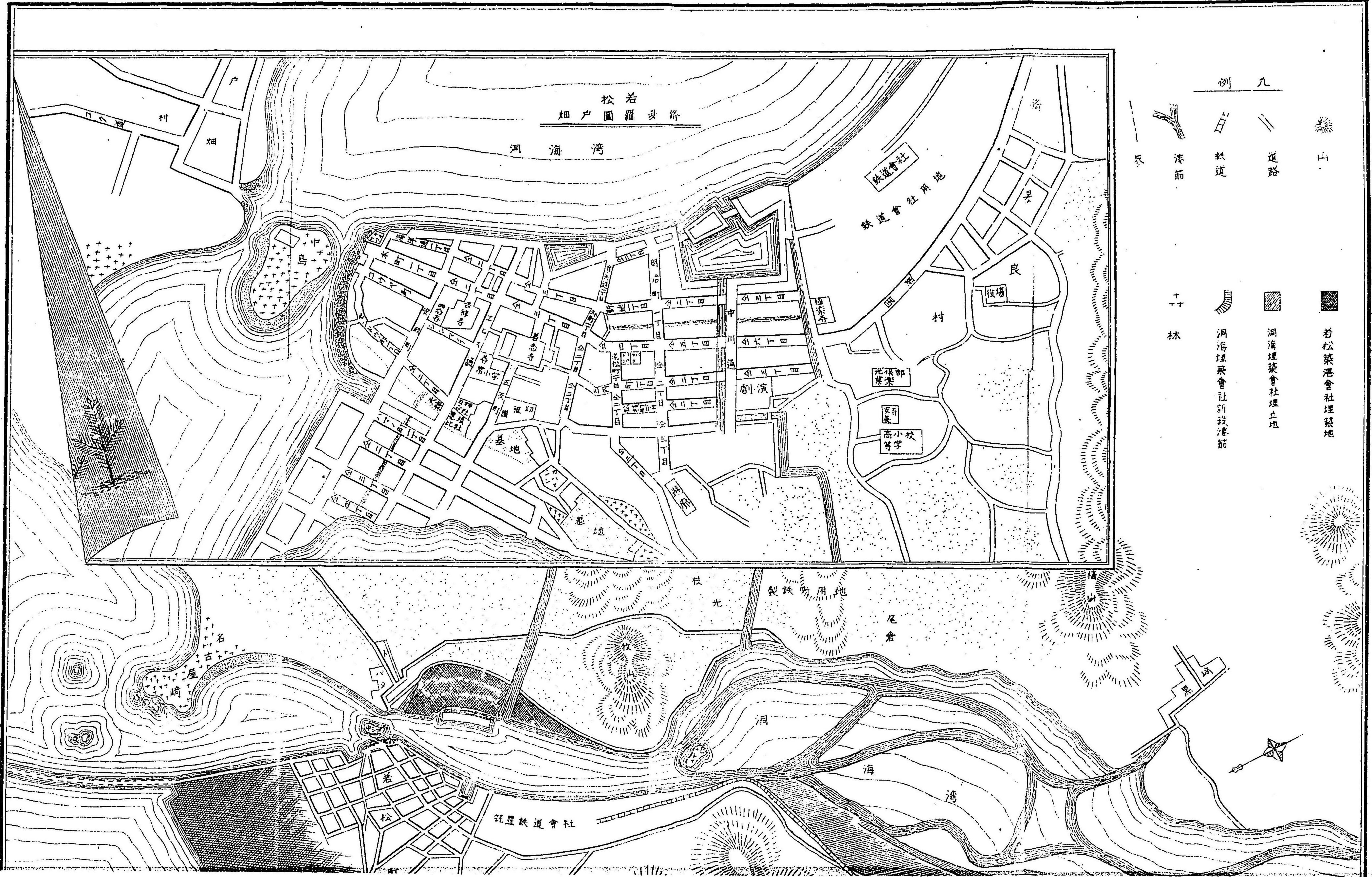
第四 陸運機關

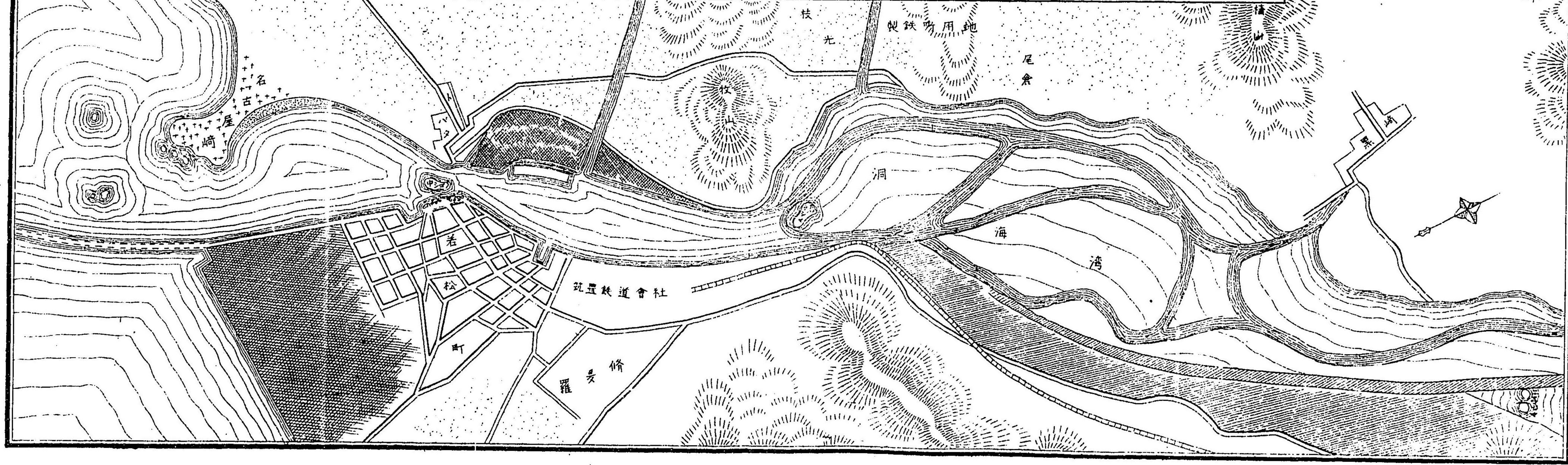
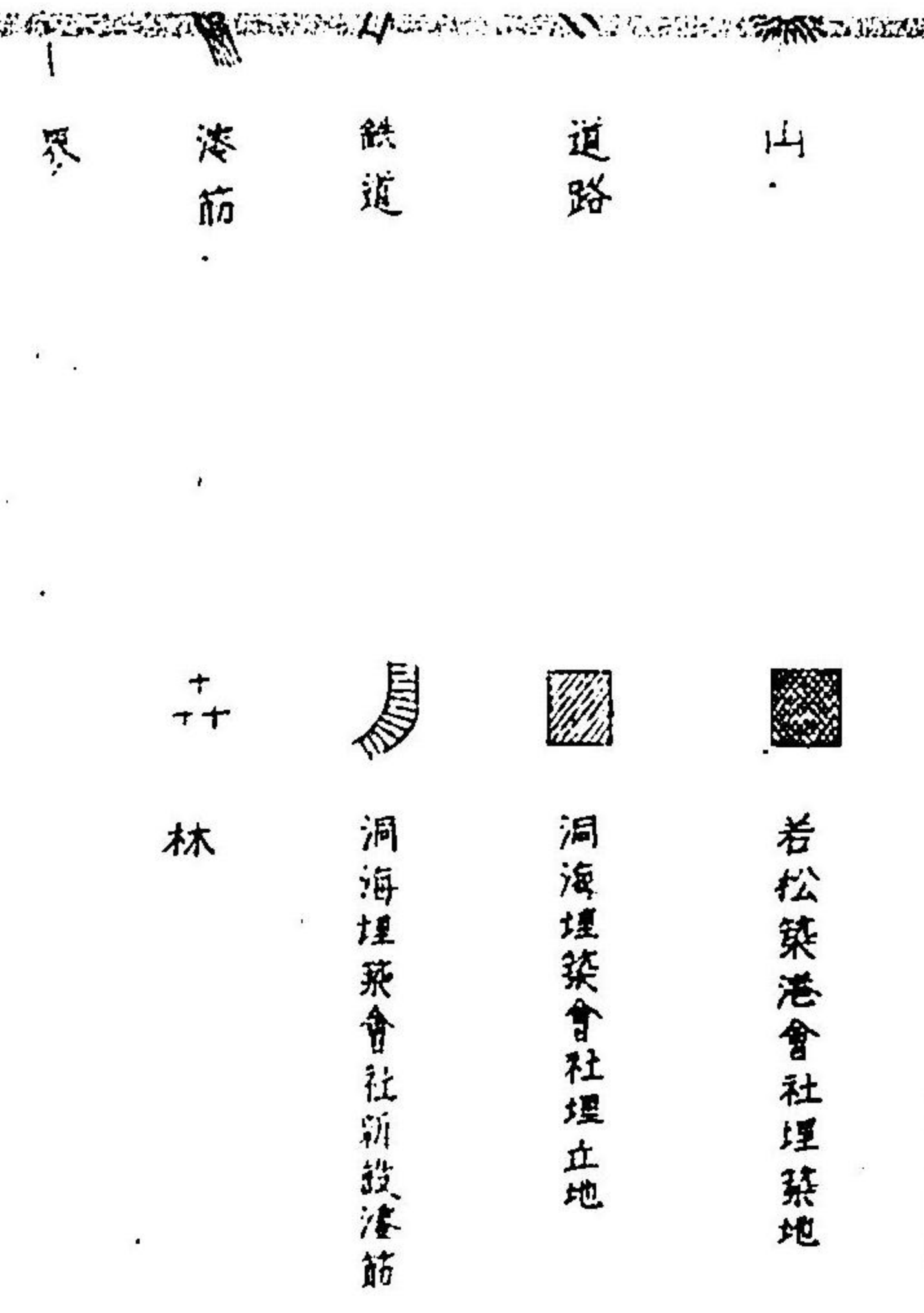
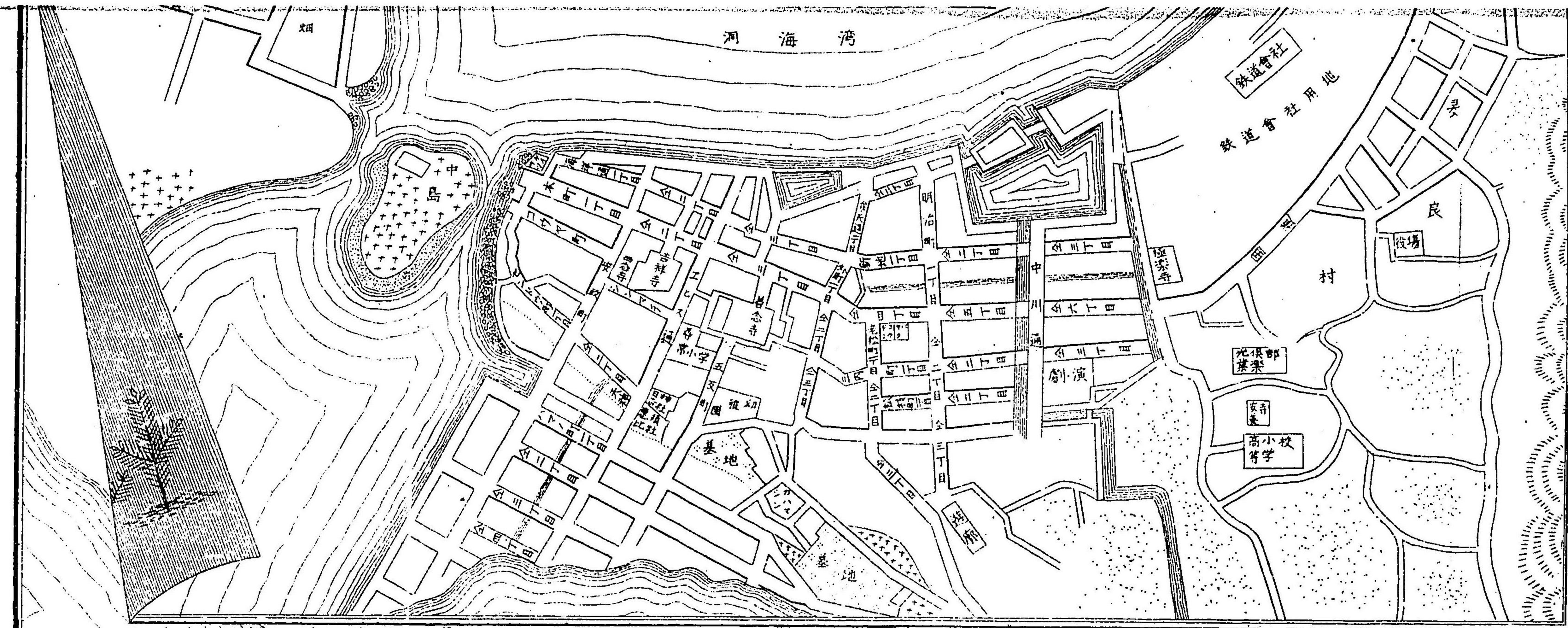
筑豊四郡若炭の陸運を率ふるは、即ち筑豊鐵道なり、全鐵道は明治二十二年七月十二日設立免許を受け、爾來工業に着手し、明治二十四年八月三十日、始めて若松直方間の開業を見たり、現今敷設の區域

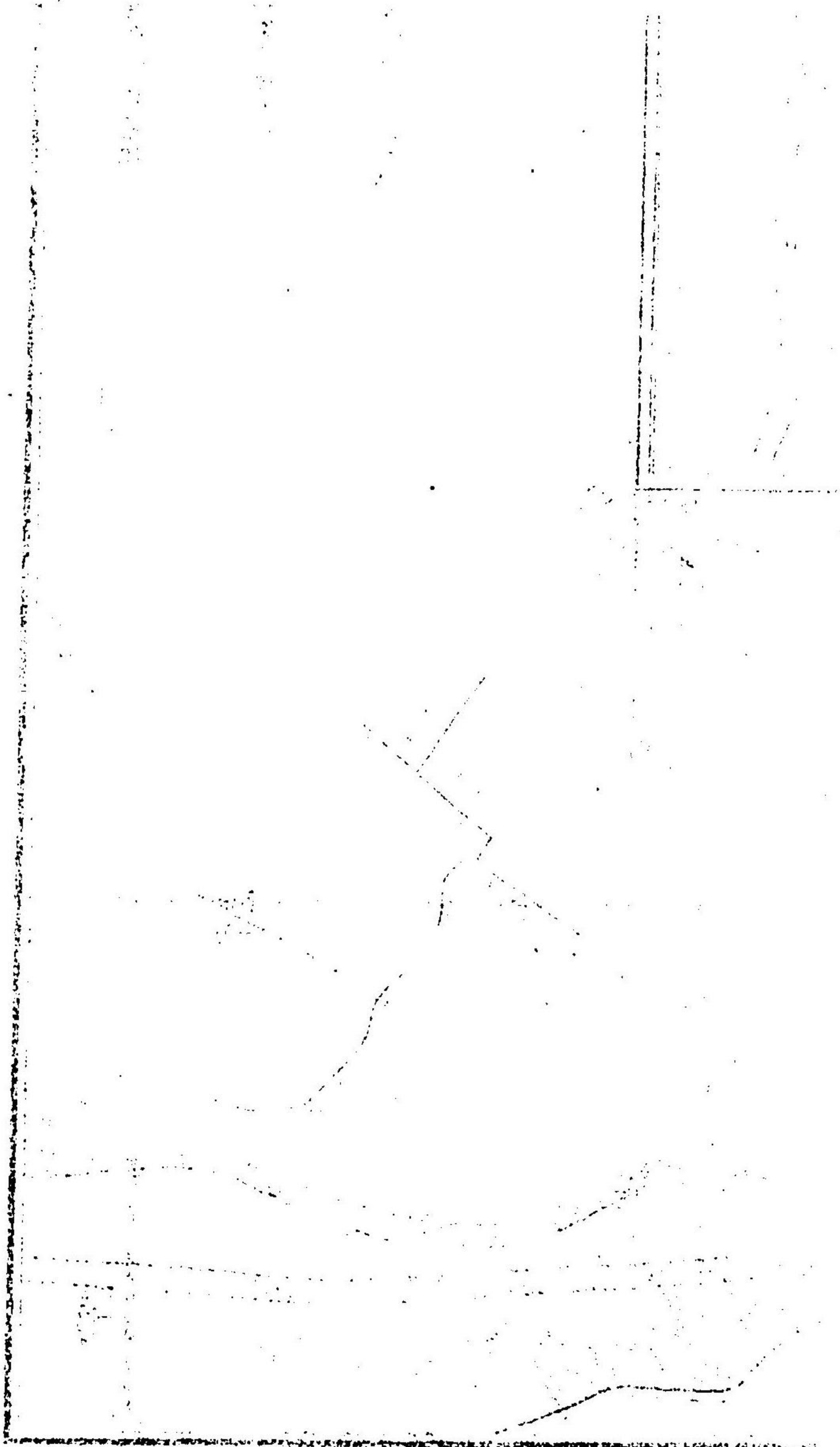
陸運機關

然かも筑豊鐵道の豫定線たる冷水峠を鑿ちて二哩餘の隧道を通じ御笠郡山家に至るの線に於て愈よ敷設せられ尙ほ同線の分岐線たる筑後吉井に至るの線并に九州鐵道の鳥栖驛に聯絡する線にして終に延長せらるゝに至らば九州鐵道博多を経て門司に出づる線より約九哩を短縮するを以て筑後地方を始め肥前肥後の貨物は多く筑豊鐵道に依て集散せらるゝに至らん

其れ然り而して鐵道經濟の原則は小鐵道合併して大鐵道と爲すの利益大なる事を教へ社會の輿論漸く我が國に於ける鐵道合併の氣運を促がし九州の二大鐵道即ち九州鐵道と筑豊鐵道との合併の議今春以來勢力を得本年四月二十日の九州鐵道會社臨時總會は愈よ兩鐵道合併の條件を可決したり今ま其の條件を記せば左の如し。







合併要件

- 一九州鐵道筑豐鐵道兩會社を合併し九州に新株二十七萬個を増資する事
- 一筑豐鐵道會社の財産一切を既得の權利を引受くる爲め九州鐵道會社は筑豐鐵道會社の現に發行する株券を同一拂込の株券を發行し引換を爲す事
- 一新株二十七萬株の中九萬七千株は前項の引換株數に充て残り十七萬三千株を左の通り割當る事
- 九州鐵道（現在株三十三萬株に對し）十萬株
- 筑豐鐵道（現在株九萬七千株に對し）七萬三千株
- 一筑豐鐵道會社の重役五名を九州鐵道會社の重役に撰定する事
- 一新株は七月（本年）十日の兩會社現在の株主に割當る事
- 一筑豐鐵道會社の社債に對する債務は九州鐵道會社に引受くる事
- 一筑豐鐵道會社の財産は財産目録及び帳簿に依り授受を爲す事
- 一新株十七萬三千株に對する募集は七月十日の九州及び筑豐鐵道會社現在の株主より豫約證據金として一株に付二圓五十錢を差入れしむる事

鐵道機關

陸運機關

一前項豫約の申込は其の期日を八月十日限とする事
 右認可申請書は既に其の筋に提出され居れば遠からずして其の
 合併は實業界歡呼聲裡に實施さるべく筑豊鐵道は爾來九州鐵道
 なる名稱の下に包含されん然らば九州の運輸交通は専ら九州鐵
 道に依て左右せらるゝのみならず大日本帝國の首尾相互に活氣
 を通じ、且江戸三百里の旅程實に數十日を費やし出發の首途に行
 路難を歌ひし維新前の故人を地下より起たしめ以て今日の光景
 を觀せしめば彼等は一目魂飛び魄銷すべし。
 合併實施の際に及ばず重役の進退の如きは更らに確定するところ
 あるべしと雖も今ま假に兩鐵道の重役を記さん。

筑豊鐵道重役

專務取締役 仙石貞 取締役 木山彦一 安川敬一 堀越久 小

林作五郎 小野隆基 麻生太吉 監査役 栗田安壯 金子辰三郎
 高瀬九三治

九州鐵道重役

專務取締役 高橋新吉 取締役 松田源五郎 井上保次郎 田市兵
 衛 清水可正 美作宗吾 江副義明 今村清之助 阪井等 鹿野淳
 二 監査役 齋藤美知彦 山崎隆海

此の外石炭運輸に關係ある豊州鐵道あり又た金邊鐵道筑紫運炭
 鐵道等も遠からず起工せらるべく尙ほ數多の鐵道敷設の計畫あ
 れども我が若松港との關係深からざれば之を此に略す。

第五 港灣擴張

筑豊四郡の石炭は水陸兩運に依て悉く若松港に輸送せらるるとい
 へども之が集散機關の完成を得ずんば各炭坑をして今日の陸運

港灣擴張

に會せしむること難たし、然らば、若松港灣の擴張は急務中の急務と云はざる可らず、蓋し、若松港の港灣を改築浚渫するは、若松築港會社唯一の事業なり。

若松築港會社の創設は、明治二十一年浚渫會社の設立せられたるに基き、二十三年を以て設立を見たり、同會社の目的は、若松港の將來巨額の貨物を集散すべき形勢なるも、泥沙常に港口を填塞して、船舶の出入自由を失し、稍や巨大の船舶は他港又は港外に碇繋し、縦し、例外的のものあるも、貨物の揚卸に非常の徒費を要するのみならず、天候一變、風伯怒り、雨師激すれば、船舶破損の不幸に遇ふもの雖、を接するが如く、其の損害年々實に少なからず、爲めに、將來大に興らんとする實業を沮喪せしめ、商業を夭折せしむるを以て、此に一方に改築を爲し、他方に浚渫を行ひ、從來の禍を轉じて福と爲

すに在り。

加之、浚渫せる土沙を海中に投棄せば、再び寄洲を生ずるの憂あり、且つ他日築港竣功の曉、物貨輻湊し、工業勃興するに際し、終に土地の狹隘を感せんことを察し、かたゞ、若松港沿岸海面の下濶を請ひ、之を埋築するに浚渫土沙を以てし、其の土地代金と船舶とに依り、資本の償却を充ることとせり。

同會社の資本金は四十萬圓にして、現今濶巾七十間、深さ十四尺の浚渫を爲し、三百噸乃至四百噸位の船舶を出入せしむるに容易ならしめたり、今ま左に通港錢收入定額表を掲げん。

石	十萬斤以下一萬斤に付	金四錢五厘	米穀三ツ石俵百俵に付	金九錢四厘
	廿萬斤以下全上	金六錢八厘		金二錢一厘
雜	四十萬斤以下全上	金九錢	百石積以下十石に付	金三錢二厘
			百五十石積以下全上	

港灣擴張

港灣擴張

六十萬斤以下全上	金十一錢三厘	百五十石積以上全上	金四錢二厘
八十萬斤以下全上	金十三錢五厘	二間松一艘に付	金一錢五厘
八十萬斤以上全上	金十五錢	三間松一艘に付	金二錢六厘
		西洋形一噸に付	金三錢八厘

和洋本港に於て積荷せざる松は石噸數に應じ半額を收入す

又た同會社事業の經過を知らんと欲せば左表を見よ。

年	船舶及港錢	年	船舶及港錢	年	船舶及港錢	年	船舶及港錢
二六	二九、九一五 萬圓	二七	三〇、七八九 萬圓	二八	四〇、六九三 萬圓	二九	一九、七八二 萬圓
	五九、四五〇三		一、三三三、九一〇		一、七〇八、七二三	前半	九七、三三三、五六六

若松港に出入する船舶は和形あり洋形あり又た和洋折衷あり共に沖船と稱し日夜々絡繹織るが如く出船千艘入船千艘の壯觀を呈出せるが未だ同會社現今の方針を以て筑豊四郡の石炭を集散して遺憾なき港灣と爲す可らず殊に内に於ては對岸の八幡村

に製鐵所の設立を見外に向ては特別輸出入港と爲すの必要あり同會社は目下大計畫中にて遠からず資本金を四倍して貳百萬圓と爲し千潮十五尺の程度迄八幡村沿岸を浚渫し尙ほ灣内の水深を二十尺以上と爲し此に三千噸以上の船舶を自由に出入せしめ以て水陸兩運搬力に比儔する集散力を備へしむべければ同會社の將來や刮目して見るべき也。

現に蜿蜒長蛇の如く七百二十間の海面に突出せる防波堤を中心點として西北は小田岬小石邊東北は名古屋崎硫黄ヶ瀬より沖船の航路を通じ六連島まで測量を行ひ防波堤より尙ほ百間の捨石を爲しボトリソングを下だしつゝあるが沖底は土沙に交るに二寸大乃至五寸大位の小石を以て組織せられ居れば容易に浚渫するを得べく從來の經驗に照らすも浚渫一丈の水深に及ばせば潮勢

港灣擴張

大規模上の
送岸上の
工に勝つ

人工は天
工に勝つ

自から土砂を洗ひ、更らに幾分の深さを加へ、再び埋却の患なしと云へば、大々的希望は同會社の上にて在るべし。

其れ人工は遂に天工に打勝つを知らずや、試みに看よ、英國の良港グラスゴトは、素も水深僅に一尺、行客裝を賽けて徒涉せしにあらざや、リヴンポトルは荒蕪たる海濱にして、又たニムカツスル、然も河は小舟を棹すだも難かりしに、非ずや、然れども、一たび人工の施さるゝあり、遂にグラスゴトは二十三尺の水深に達し、リヴンポトル、タイン河、何れも良港と變じ、工業に商業に非常の繁榮を加へ、漁船は機橋に横着し、鐵道は倉庫と聯絡するに至りたるならざや、故に現今既に干潮十四尺以上の水深を有する若松港に、一人工を施さば、陸運機關なる鐵道は、優に防波堤上に線路を延長し、大船巨船亦た機橋に横着するを得、豈に何の難事かあらんや、況んや、現

埋立坪數
及び地價

晴雨計

港灣擴張

今と雖も、若松港に石炭を輸送せば、門司港に之を輸送するよりも、一萬斤平均三圓餘の經濟となり、坑業者は昨年度の採炭高に比例を求め、年々八十萬圓餘の利益を収むる都合と爲り、港錢の増加隨て著るしく、貸地料及び土地賣却料も大に増加するに於てをや。

全會社創立以來、若松港の埋立は、四萬四千三百八十一坪、戸畑村の埋立は、九千八百九十八坪にして、淡漑土沙は實に十萬三千七百十三坪なり、而して、若松港に於る埋立地の相場は一坪十圓内外にして、戸畑村に於るものは一坪六圓内外なるが、全會社は近々戸畑渡場より名古屋崎に至る六萬三千餘坪、中島の周圍六萬三千餘坪を埋立て、尙ほ若松港の浚漑と共に、其の埋立を擴張しつゝ、あれば洞海沿岸進退消長の晴雨計たる全會社は、一方に石炭集散の力を全ふし、他方に大都會建設の基礎を置て、不足なからしむるや、豫じめ

知るべきのみ、特に記すべきは、石野寛平氏が全會社創業當時の社長として、幾多の困難に堪へ、以て今日の隆盛に導きし功は到底之を没すべからず。

重役

取。 和。 田。 源。 吉。 金。 子。 辰。 三。 郎。 山。 本。 周。 太。 郎。 堤。 猷。 久。 平。 岡。 浩。 太。 郎。
 上。 野。 淵。 太。 郎。 會。 長。 安。 川。 敏。 一。 郎。 監。 査。 役。 久。 保。 太。 郎。 麻。 生。 太。 吉。
 配。 人。 高。 橋。 達。

第六 工業勃興

若松港の生命にして、東洋文明の母たる筑豊四郡石炭の採掘運輸及び集散の方が、此に満足を得ば、若松港、否、洞海沿岸の將來は、九州工業の中心點となり、諸般の製造所を接して勃興し、晴天もま

工業勃興

製鐵所

地勢

設計

多の苦心を経て計畫せし、東洋製鐵の主權を握る。 ぎに暗悔たるばかり、煤煙の空に漲るを見ん、然れば、明治政府が幾

製鐵所も亦實に若松港を距る水上僅に一里の遠賀郡八幡村に建設せらるゝに決定したり、抑も、全所建設地の面積は、無慮二十五萬坪にして、後に魏峩たる橋山を負ひ、前は洋々たる洞海に枕み、大藏川の清流滾々として建設區域に導かれ、東は戸畑、西は黒崎を距る各一里、九州鐵道は、黒崎驛より八幡村を経て戸畑村に至る支線を敷設する筈なれば、水陸交通の便利大に開かるべく、東洋稀有の大工場たる製鐵所を建設するに最も適當せり。

製鐵所の設計の如きは、漸次歩を進むべしと雖も、其の建設より竣功までの創業費は、四百九萬五千餘圓、之を四箇年の繼續事業と爲し、昨年度より着手し、明治三十二年度に完成すべき都合にして、既

工業勃興

に初年度には、大島技監の一行をして歐米斯業の實況を視察せしめ、本年度には一行をして外國技師を雇聘せしめ、且つ、工場の建築器械の据付等に取掛り、三年度より愈よ事業に着手する見込なりき、而して、先づ條鐵、板鐵、瀝鐵、用鐵、板船、船用鐵、板桁、梁を始めとし、建築用の鐵類并に鋼軌、竿鐵、及び箍鐵等を製造すべく、其の一箇年間に於る製鐵の豫額は六萬噸とし、之を製造するの器械は十萬噸位の製造力あるものを以てし、二十一萬六千餘噸の石炭を消費すべし、然れば、若松港に輸入すべき製鐵の原料即ち銑鐵、古鐵類并に石灰石は、拾二萬千七百餘噸に上るべく、原料は釜石、仙人山、其他内國各地の鐵坑より産出するものにて、年々十萬噸を獲て不足なく、尙ほ百箇年位は内國産にて充分なりといふ。

斯の如くして、全所が製造すべき鐵は、悉く之を若松港より輸出す

製鐵種類

原料は内國産なり

幽境變下地を爲るの

る順序なるが、六萬噸の製鐵に要する職工は、三千人内外の多きに及び、隨て、此等に伴ふ家族なり旅人なり、腫を接して八幡村に入込むべければ、雞犬の聲稀れに寂寞を極めたる幽境も、一朝にして俄然繁華熱鬧の地と變じ、昨日見し燦燦たる苦屋、さては鋤鐵置く葺屋の影失せて、今日は旅館に旗亭に高く軒を聯らぬ、畦路は公道と爲り、小流は水道と爲り、其の附近亦た鐵工場の煙霧騰き、船渠に鑿の音起り、商業取引の頻繁を加ふるや目を刮して待つべし、然も、製鐵所數多の電燈は、對岸筑豊鐵道の電燈と共に、赫灼又た燦爛、洞海の夜に、不夜の波光を湛はすべし。

試みに我が國が外國より仰げる鋼鐵の輸入を見ん乎、

我國輸入鋼鐵量數

年	量	年	量
二六	一三〇,〇〇〇	二七	一四〇,〇〇〇

工業勃興

工業勃興

二八

一五四三三〇
(千四十八萬九千餘圓)

二九

一六六三三七
(千百七十九萬九千六百餘圓)

なり、此の如く、我が國に於る、鋼鐵の輸入年毎に増加するのみならず、今後、鐵道に造船に將又た各種の事業勃興するに連れ、鋼鐵の需用益す増加すること疑ひなし、故に嘗て帝國議會に於て批難せられたる如く、政府にして製鐵所を建設するの勇氣なかりしならんには、我が國は不經濟的に歳々鐵の輸入を爲さざるを得ず、爲めに大和民族天賦獨特の工藝的技術を殺し、有形上に又た無形上に不利を見ざるべからず、且つ東洋製鐵の主權を握る能はざりしならんに、遂に戰勝の餘響は世人の懶眠を攪醒し、幸に之を建設するに確定し、尙ほ其の地域を八幡村に拓くに至りたるは、福岡縣の爲め、若松港の爲め、否、眞に國家の爲め慶賀せざるべけんや。

工業勃興

想ひ起す、天正十八年の春、絶世の快男子、豊臣秀吉、東征して尙ほ容易に懸められざる、腓肉の歎を漏らさんとするや、小田原に至り、石垣山を以て本陣と爲す、夜、衆卒に令して城を築かしめ、紙を以て壁と爲す、遠く望めば、白望の如し、秀吉、家康と共に城樓に登り、瞰下して曰く、關東八州、我が眼中に在り、日ならずして取り、以て卿に與へんと、家康拜謝して曰く、幸甚だしと、秀吉彼の耳に附し、更に謂て曰く、卿亦た小田原に居らんとする乎、彼れ答へて曰く、然りと、秀吉曰く、不可なり、我嘗て地圖を案ずるに、是より東北凡そ二十里許、江戸なる地あり、河海を襟帶し、地潤く、土肥へたり、卿宜しく此に居るべしと、彼曰く、謹んで教を奉ぜん、と、武藏野は月の出づべき山もなし、草よりの東京あるを知らんや、武藏野は月の出づべき山もなし、草よりの出て、草にこそ入れ、當時の巨人伊達、獨眼龍だに、斯く咏じ

工業勃興

去りし荒蕪蕭條の一郊野も英雄の眼中に映じ來れば繁華熱鬧肩摩轂擊の都會たり。

夫の製鐵所建設の位置は嘗て非常の競争場裏に投ぜられたり、曰く廣島曰く岡山曰く大阪曰く青森曰く何々地方的感情は幾多の人々を驅て喧嚷狂奔恰も入人の婿一人の娘を争ふが如くなりしめたり然りと雖も活眼の士は徐ろに地を相して誤らず或は迷者の惑を釋き或は政府の意志を確かめ遂に八幡村に之を建設せしむるに至りたり蓋し八幡村は寂寥たる一荒村天正時代の江戸と何んぞ擇ばんしかも寂々寥々たる八幡村が朝霧暮煙の中に天の時地の利を默示せるを觀破し以て東洋稀有の大工場を建設せしむるの氣運を鞭撻せしは何人ぞや吾人は在野の達識長谷川工學博士安川鐵山翁平岡代議士等が製鐵所建設に與て大に力ありし

を思へば洞海沿岸の前途實に謳歌するに堪へたり。

其れ製鐵所は筑豊四郡石炭の力を利用して建設せられたる工場
の最も巨大なるものなりと雖も其他各種の工場は若松港を中心
點として到る處に勃興しつゝあり其の重なるものを擧ぐれば關
西コークス會社、鎮西コークス會社、九州コークス會社、九州煉化會
社、鎮西煉化會社、洞海北灣埋漕合資會社等の事業成績よろしく會
社には石炭米穀取引所あり九州炭坑株式會社あり若松船舶會社
石炭販賣合資會社、筑豊石炭倉庫合資會社等ありて事務繁劇なり
又た銀行には第十七國立銀行支店あり大阪興業銀行支店あり若
松貯蓄銀行、住友銀行支店、九州商業銀行ありて取引忙はし然も工
業の氣運は歩一步蒸騰しつゝありて人物の手腕を待つ。

事業勃興

人カ

社会は戦場なり天の時地の利を利用する
の人は戦勝者なり桂冠は彼の頭に在る也

第七 人カ

フレキサンダー・ミルトン曰く「坤輿上最も偉大なるものは即ち人類なり然かも人類中最も偉大なるものは則ち人の心なり」と嗚呼人の心を識る者誰か此の言に首肯せざらんや人の心は實に宇宙を支配するものなり政治も宗教も工業も教育も總べての事一として其の權勢の下に服せざるは無し是の故に人の思想は自由

にして造物主も帝王も左右する能はず千古の大詩人ミルトンが「我に思想の自由を與へよ」と絶叫せしは決して偶然に非ず。思想の一方に傾瀉すれば工業界に於ては發見と爲り發明と爲るなりワットの蒸力發見はファルトンの汽船發明と爲りステファニソンの鐵道發明と爲りフランクリンの電氣發見はモールの電信器發明と爲りニダソンの蓄音器發明となれり又第十九世紀に於て高潮に達せし人の心は採炭業に紡績業に運河に造船に一大革命を及ぼし遂に今日に及べりとせば將來に於ても幾何學的に進歩發達するや知る可し。天は己を助る者を助く又人工は天工を奪ふ若松港の良心たる諸先輩は宜しく時勢の趨歩に鑑み大に自ら勵みて若松港をして益す多望ならしむべし殊に筑豊四郡の石炭は文明の血液にして

人カ

同心協力
成功の母

工業の中
心點たる

自治の泉
源たる

人カ

水陸兩運機關は若松港の血管なり而して若松港其者は血液を精
純ならしむる肺臓なれば孰れも密切の關係を有すべく互に相依
り互に相助くるの必要あり若し夫れ會社と會社との孤立を生じ
個人と個人との分離を來し施業畫策共に區々に出でん乎是れ天
賜最も厚き若松港を賊するもの般鑑遠からず之を各地の實況に
照らさば思ひ半に通せん

要するに吾人が若松港に對する希望は形而下に於て九州工業の
中心點となり形而上に於て獨立自治の泉源と爲すに在り思ふに
工業は實力に非ずんば成立せず然らば工業は人の心に一大真理
を默契せしむるを知るべし一大真理とは何ぞや曰く獨立は人類
の本領にして自治は人生の美德なるを知らしむること是なり吾
人は若松港の真心たる諸先輩が形而下の進歩發達を圖ると全時

◎福 陵 新 報◎

(福岡市博多中島町福陵新報社發行)

社説 筆力雄渾、議論明晰、鎮西に覇權を握る 小説 鏡裏の花、水中の月、俠乎情
乎、血か涙か、人間の神秘を別抉す 電報 政海の波瀾、實業の消長、苟も耳目を聳
動すべきもの細大之を漏らさず 雜報 簡にして潔、然も、社會諸般の出來事を網羅
して文字的寫真たり 商報 正確と機敏、眞に商家の羅針たり 福陵新報 は多くの
記者、通信者を有し、張膽明目、大に實業商事に重きを置き、劇忙場中の入時に娛樂
を要すべければ詩歌俳諧より劇評に至る迄時々掲載して一服の清涼劑とす

○一部六頁二錢、一ヶ月廿八錢○廣告一行一回十二錢、二回以上四回十錢五厘、
五回以上九錢○特別廣告一行三十錢

米○米○米○米○米○米○米○米○

米○米○米○米○米○米○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○

當若松石炭米穀市場の儀は愛顧各位の御引立を以て日に月に隆昌に赴き
候段奉鳴謝候就ては最も確實を旨とし萬事鄭重に取扱ひ各位の御便利相
謀り可申候間尙ほ倍舊の御引立を給はり多少に拘らず續々御注文被仰付
度奉願候也

若松石炭米穀取引所仲買人

西原又吉

穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○穀○

(中付の二)

石○石○石○石○石○石○石○石○

石○石○石○石○炭○石○石○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○炭○

⊕ 藤井 俊平	⊕ 中松 任直吉
⊕ 大賀八右衛門	⊕ 司和田象太郎
× 松川駒次郎	△ 占部縫次郎
△ 澤岡 周八	△ 宗像隣太郎
⊕ 遠藤 平藏	⊕ 松本 松平

(中付の三)

若 松 港

野 的

精 米 所

米麥各種の搗精營業の儀四方華主の御引立に預り益々繁
昌仕偏に鳴謝仕候就ては今後は尙ほ一層勉強米穀卸、小
賣商各位の御注文は無論飯米の搗精をも迅速鄭重に仕御
愛顧に報ゆべく候也

に亦た形而上の進歩發達を謀らんことを齎る。

碌々たる史家は、前世紀の末尾より千八百十五年迄、英國が從事せし宇内に赫赫の光榮ある戦争あるを知て、其の開戦の趣旨たるや、世界商業上の覇權を掌握し、以て天下の大市場に商品を提供するの手段を實施するに在りしことを解せざるなり、一言せば、經濟的原因は萬事經營の根本也……ギッピンス

第八 市中案内

今迄は眞面目な講釋をみ無かし御たいくつと察し申せど、口は口直しあれば、目に見直しの興味あり少し元氣に返へらば、イガ是よ
市中案内

若松停車場

車輪留を起す

市中案内
 りは若松の町々取引先に買ひもの店をめぐり、御案内申上げん云は、是迄ノは若松港の裏面即ち繁昌の原因にして、是よりノは若松港の表面即ち繁昌の結果と思ほし召せかし。
 此處は筑豊鐵道の若松停車場上り下りの乗客は雲霞の如く、上方のお方はんもあれば九州のお人もあり、都鄙と貴きと賤しきと無く、定刻より定刻にむかでの如き列車が吐き出しつゝあり、一、二、幾十條、うねりにうねりし鐵軌は此處の特色、日本國中廣しと雖も、又たとあるまじきもの田舎なんどは、そりや、目あつていふことかと、若松通に怒らるゝ次第、涼罐車は涼罐車と相接し、貨車は貨車と相連り、ゴロ／＼、ビュー／＼、百雷天に起らずして地に轟き、幾百の坑野より探掘せられたる石炭は悉くこゝに集められ、棧橋より又た沖船へと移され、夜は電燈の光り輝やき、鐵工場の金槌の響い

本町六丁目

筑豊鐵道會社

つも絶へず年三割餘の利益に恵比須顔の株主もどふせふ、こふせふといひし當初の目算を刎ね超へしに驚くばかりの盛況なり、若松停車場を出で、東隣巍然たる二層閣の建物あり、近寄りて打見やれば、筑豊鐵道株式會社と銘うつたる標札あり、問はずして、此處は三十四哩の本線、三哩の支線の監督處、諸般の命令、電信に傳へられて敏捷なり。
 全會社の門前、一直線に進めば、若松の脊髄たる本町通りの六丁目、森活版所に立寄れば、新調の活字壺、井みよくつらねられ、數多の男女工、それ／＼業を取り、簿記帳の細々しきより、引札名刺の荒ものまで、迅速と鮮明、恐らく他地方に稀れなる手際、に注文多し、元森荒物店、へいいらししやい、何んでも御座ります、新御徳出張所は石炭を賣捌き、料理屋の壽志留は、手輕さま一杯傾るに好し、西村旅館

市中案内

市中案内

に萬歳館執れも客大切待遇振りも大方ならず。本町橋を渡れば是より本町五丁目關西コーパス會社の收利少なからずその製造所は中島にあり住友銀行支店は近々此處に壯大に新築せらるべく有村建物店は家具その他御注文次第品物は精撰して直段も勉強いたさん金谷炭坑出張所の次は山上陶器店有田焼の上物見事に店頭につらね顧客日に多し萬屋といふ旅館より林仕立屋に至り和洋の服針のめぐりも斜ならず先づは繁昌々々。

本町四丁目の入口に第十七國立銀行の支店ありこれは福岡よりの出店にして爲替取引日々に繁げし石炭の取引を爲す今西商店荒物店の永武藥店の前田どちらの家も榮え行き書林の加部支店は各種の新聞雜誌又ツた教科書には稗史小説何でも正直に賣捌

市中案内

き大阪よりの住友支店は石炭の取引を爲し銀行の支店も本年二月より開業流石は親元の太いだけ活潑なる營業ぶり感心々々若松町役場は若松人民自治制の泉源明治二十四年の春迄は單に村の稱呼に人煙さへ稀疎なりしが石炭の色に染りゆきつゝ遂に資格一級を進めて町と號するに至り隨て事務の繁劇なる昔日に比ぶべくもあらず明治二十五年の秋こゝに役場の新築を爲したり序に申さば百般の公共事業は役場の手を勞し榮か行く若松の老先をしてます目出度からしめんことを希ふ其の東隣は若松郵便電信局郵便の集配電信の發着は申すまでもなく爲替貯金をも取扱ひつゝあり若松港の繁榮につれ商業取引の日に月に複雑に赴きつゝあれば今後倍々郵電事務の劇忙たるべきと同時に正確と敏捷を要すべく電信技手の如きは最も技術熟練のものを聘

市中案内

雇せま欲しけれ旅の人は安着の郵便なり電信なりを故郷に發し、梅月樓に登りて鶏の親子鍋に晝食なりと召し上がれ酒屋の大和菓子屋の山本、上戸と下戸の差別あれ甘い辛いの違ひあれ、いづれもお氣にかなふやふ床藤に髪を摘み、大川酒店には大盛温鈍の宮本、いづれも大景氣、まして此邊より辨財天通にかけては沖船の船頭、緋の主夜ひるの厭ひなく、がし／＼上陸するものから人の山を築き、大道に綱を賣る甘酒、善哉の軒店さへ賣行きよく、野菜魚類の掛店も客足しげし。

本町三丁目、三井物産會社の支店には、正木石炭問屋あり、里見小間物店はなんでもござい、栗本の呉服店に四季の曠衣を求め、安尾の履物店に流行の駒下駄なり、足駄なりを買ひ、中野の呉服店も品柄上等のもの多し、旅館の櫻屋は宿泊人多く、取扱もよろそかならず。

その隣が善念寺、どれ立寄りて本尊の阿彌陀如來を拜み併せて觀世音菩薩、大勢至菩薩をも拜まん、住職に此の寺の縁起を聞けば、開山は肥主禪師、然阿上人にして、上人は石州三隅庄の人、京極師實六世の裔、年十六出家の志を發こし、筑後のくに善導寺の聖光上人の徳風を慕ひ、遙々全寺に至りて傳燈を誓ひ、手印を受け、後ち故山に歸らんとした、また若松を過ぎ、教を弘めけるに、信徒の歸依するもの腫を接しければ、遂に此の寺を建立せしなりと、爾來法の燈いと輝きけるも、元文五年六月、若松の大火に本尊を除き、堂宇はもとより古寶珍器を烏有に歸し、文化年中、得譽純到師今の堂宇を再建せりと、なん、大阪興業銀行はこの地、金融機關の重なるもの質屋には川口屋あり、茶屋には古賀あり、安山の舶來店は店頭品の新奇を競はざるなく、御注文よろしく、若松貯蓄銀行は労働者を始め人

市中案内

市中案内

々の貯蓄心を起し、また融通も十分つけつゝあり、石炭問屋には中村、杉山あり、祐定店には鐘詰、菓子いろく、大賀古着店の次が九州コルクス株式会社、目下創立に従事し、製造所は戸畑に建設せらるゝはづ、安田小間物店は女の御得意多く、其れから平野石炭問屋、末松古物商、葉山質屋、その次が旅館の松井樓、客室多くして清潔に、定客はもとより、旅人の宿泊するものなかくのことよ。

これから本町二丁目、大島石炭問屋の先が、奥田仕立屋に齋藤呉服店、森本旅館は上等の客多く、小田の菓子は甘し、吉祥寺は此邊にあり、抹香臭しと思さん、が、ちよいと慰みに立寄て縁起を尋ねんに、全寺は瑞雲山とて、筑前早良郡西町の金龍寺に屬し、本尊は正觀世音、黒田長政の臣、梶原景次の創建にかゝり、開山は芝山浦雲和尚にして、景次の墓あり、むかし若松の浦邊に漁する小一郎と呼べるもの

本町二丁

吉祥寺の
惠比須

本町一丁

あり、或日、洞海に棹しつゝ、漁りけるに、海底一種の奇光を放つもの見えければ、之を網にて引あげ、熟視するに、不思議にも、惠比須の像なるに驚き、家に携へ、歸りて崇め祀りぬ、然るに、其の後、小一郎出漁しけることに、隣の網に入るもの非常に多く、かつ奇瑞のことも、少なからざりければ、是れ畢竟惠比須の加護ならん、之を家に藏するは、或は漬すの恐あらめとて、全寺に安置せしが、今尙ほありといふ、寺門を出づれば、日下部、熊甚、藤井、福間等の石炭問屋軒を並らべ、岩野の履物店、安田の家具店、田中の洋燈店、内海の雜貨店、元森の米穀醬油店、また相連り、何れも大勉強。

本町一丁目の石炭問屋は、尾中、葉山、澤岡、安田、大庭、豊島、久保、江藤の八軒にして、應じきれぬほどの注文ありと、平井の陶器店、上島の旅館、葉山の米穀店、洲口の旅館兼、涼船問屋もあれば、峰地炭坑出張所

市中案内

警察署

市中案内

には、三菱の社宅も此處に在り、この丁の真つ始め渡場の南側に高く聳るは、若松の治安を保護する警察署なり、元とは蘆屋警察の分署なりしも、若松の繁榮遂に蘆屋に趣へたるを以て全署を本署と爲し、蘆屋ノを分署と爲しければ、過る年此の建築を施し、有志の向義捐するも少なからざりき、尤も現在の位置は、保安の便利上且つ港灣改築の都合により、他日好箇の場處に移轉すべしといふ。

警察署の門前より進めば、船頭町敷地にして棧橋あり、此處より海路一時間にして、右に小倉大里の市街を見、左に六連の島影を眺め、門司馬關に渡航するを得べし、便乗の涼船は筑豊鐵道會社の所有にかゝる竹丸松丸の二隻にして、筑豊鐵道より若くは若松邊より、門司馬關に行かん人に大なる便利を與へつゝあり、其の賃金は特等三十錢並等二十錢なり、而して彼此出帆時間は左の如し。

船頭町一丁目

門司馬關渡海

出帆時間

午前八時 午前十一時 午後二時 午後五時

松頭町二丁目

石炭取引の親分

蛭子神社

市中案内

右の乗船切符を賣捌くは、大島涼船問屋及ひ久保回漕店にして、大島は此の船舶取扱所なり、魚市場は潑刺たる新鮮の魚介を糶り、達磨亭はちよいとしたり西洋料理を爲すよしにて、石炭問屋には高階川端森友等あり、材木店に豊村あり、建築の多き土地柄、取引多し。

それより二丁目に行けば、安川商店あり、文明流の組織、石炭取引の親分として、其の名京阪地方にも高かし、此の邊は往時海濱にして、お船方の住居するのみいと寂寥のところたりしが、今は地價さへ大に騰貴して、富豪の居宅を構ふる處と變ぜり、突き當りが蛭子神社に日吉神社、神苑も此度拓かれて、花木榮え、征清紀念碑建設の企あり、さて、先づ蛭子神社に詣ふで、神鈴鏘々と振りつゝ、其のいわれを問ふに、そのかみ仲哀天皇の熊襲を征せんとして、神功皇后といも

市中案内

より四民一同着座するなり、路傍の張店も臨時の利益に恵比須
 顔。日吉神社は、大山昨命、大物主命の三柱に、天照大神、須佐之男命を合
 祀し、今を去る二百四十餘年前、遠賀郡二島より、勸請し、石鳥居の額
 字及び柱銘は、福岡藩の浪儒、貝原益軒の室東軒の筆に成れりとか
 や、一拜して、濱邊に向へば、濱の町、此處は昨日まで磯うつ浪に千鳥
 の聲さへ聞かれしところ、今日は若松築港會社の恩恵に依りて一
 の町區を爲し、町の名をも加へられて、丁目より四丁目迄分たれ、
 尙ほ將來も益す擴張せらるゝ都合、縁屋は若松第一の旗亭にして、
 琥珀の杯に山海の珍味をあぢはふべく、かつ樓上の眺望一入の興
 味あれば、紳士紳商の集會に適せり、藤勝は諸請負を爲し、若松石炭
 米穀取引所は、眞に商業の活戰場委しきこと、は別項に案内いたし

市中案内

たり、材木店には石富、藤山等あり、石炭問屋の藤井は正確正直の評
 判高く、梶原、出口、和田の三石炭問屋も、柴田の荒物店とも、勉強
 し居れり、若松築港會社は、若松港の命運を荷ふて責任尋常ならず、
 鐵工場は、浚漕船機械の修繕を始め、種々の必要品を製作しつゝ、あ
 り、港錢收入所の事務は繁多なり、此の海岸は船舶の碇繋するもの
 群を爲し、小蒸氣船の出入しげく、歩を轉じて北向すれば、長蛇の走
 れるが如き防波堤、たどりて北端に到れば、身は恰も海中に在
 るに似、右に名古屋崎の翠影、左に玄洋の澎湃、前に六連島を越へて
 周防、長門の山々を見る、興味深からざるにあらず、殊に目の醒る計
 りなるは、石炭搭載の船舶が、真帆、片帆、防波堤の邊より、小倉沖は大
 里の浪邊まで、白鷺の飛ぶが如く、白鶴の舞ふが如く、或は往き或は
 還り、續くかと思へば、断え、断のかと思へば、續き、款乃の節さといふ

市中案内

安政町 西念寺 紺屋町 新町 惠比須町

心地快きことなり、然も海上の眺も飽きなば踵をもと來し途に返へさんか若松の市街は連歌渡の白沙青松に映して面白ろし。ズット後に引返へせば安政町といも石炭問屋多く、松本、手島、笹淵の諸店及び反保出張所は總べて石炭の取引に忙し、西本願寺派の西念寺は、朝拜山と呼び天正元年の創造、阿彌陀如來は其の本尊にして、信心法師の開基なり、法師は遠賀藤木村森屋山能念寺の弟子なりしが、國主黒田忠之、江戸參勤の時若松より船出して大坂に上るや、屢ば宿泊せし因縁をもて、法師に此の土地を與へたりと、なん享保十二年の大火は、全寺をも焦土と爲したれども、法用の寶物のみは無事に保存せられ、堂宇も慶應二年再建せられぬ。西念寺の山門より東は紺屋町、西へぐるりつと廻れば新町、醬油店には谷彦染物屋には佐藤あり、新町の西へ行き當りが惠比須町

五反町 幼稚園

市中案内

若松尋常小學校は、未來の商人たり、紳士たり、又た學者たる少國民が、智徳體の三教育を受るところ、生徒の數男女合せて四百四十七名、一寸婆心を述べれば、教鞭を執るの士が成るべく、平民的に兒童を教育し、以て社會の厄介者を出さざらんことを望む、寄席の福壽亭は、難波浮かれ節、或は義太夫の興行に適し、石炭問屋には榎谷、吉田組、帆足、瓜生等あり、城水社は盛夏の涼味ラム子を製造し、小田は履物を商へり。善念寺の眞裏なる五反町に、吉田質屋あり、安川の社宅は境靜に、幼稚園は昨年夏の開園に係り、有志の寄附に維持せられ居れど、追々は公立と爲すよし、嫁母一人、助母一人、男生三十人、女生十五人を教育しつゝあるが、廻はらぬ蓄の口に「君が代」を歌ふ聲は亦た俗界の音にあらざ、浮世の紅塵に頭を没するの人は時に來て罪なき小兒

市中案内

を見よ、幼稚園の側に累々たる墳墓ありて人生の果敢なきを無言に説教しつゝあり、中に一個の古墳あり、三宅家義の墓なり、家義は播州三宅村の人、如水、道卜に歴仕して功あり、采地三千六百石を賜はり、若松城の留守と爲り、元和九年の秋、官に卒せりと聞く。

連歌濱の白沙青松は、遠く小田岬に連り、松嶺の吼る音は、渚に寄する波聲と混じり、四季の眺め好し、連歌の仙、茶道の達人、宗祇法師、筑紫に下りし途次、この風光を愛て連歌の會を開きしに、名稱起これり、法師が昔ありし正法寺に假りの宿をなせしとき、若松の光景を記るして、『片山影、榎木小高き影あり、内外の海を見るに、鹽屋の煙暮わたる、入日影にうつろふほど、又いふかたなし』と云へるに考ふるも、若松の今昔を思ひ遣らる。

→ 丁目より三丁目まである外町に至れば、吉田荒物店、吉村鉄製造

市中案内

所には、熊本米穀商、紺屋といふ料理屋あり、鶴影堂なる寫眞所は、技術の巧みなるより、撮影の人多く、高崎の荒物店、古賀の藥店、孰れも相應の好景氣。

老松町に出で、西田病院に治療の状況を見、次で公立若松病院を窺く、醫學士を始め老巧の醫士三人あり、患者の顧診に忙はし、考ふるに若松の繁榮するに隨ひ、衛生のこと注意すべきもの、少なからざるべければ、此の病院は、率先して盡力の勞を吝む勿れ、米穀商の米文も、此處にあり。

病院を過ぎて西へ進めば、石門に行き當るべし、こゝは歌舞の菩薩、傾城の君が、一廓を掃き、連歌町、盲目蛇におぢず、不祥の眼には、花の色香辨べねば、袖引かると、煩もなし、イザヤ案内仕らんも、引手茶屋のお神さんならねば、お客の氣に召すやふに出來ず、なんぞ言

市中案内

譯だらりく進めば道の中央に植ゑこまれし女郎の姿の柳誰やらには似ぬ操の常盤木吹く風に散らさるゝ紅白粉の香を増し貸席の数が九ツ之を名指せば招月の本店と支店には縁屋若姪子若樂大黒樓大吉魚源と播磨の支店あり左様取るもの三十と一名お伽の衆六十と二名尤も此の数は本年三月の調査なればこの後ち花の敷いかに増すべきか先きのことまでは餘り心配過ぎるの恐れありて省きぬ借宵のひやかし内輪の御都合格子先より窺ふとて薩張り分らぬ次第なれど此の町のお客筋多くは陽氣の方々なれば爪弾の忍駱より太鼓の響々を望み洒落た文句よりも流行唄の荒ッこののを願いたまひ腕が達者なよりは三十二相の美人召せと自烈たまへば酒の筈には活潑な妓がもて影陰き燈の下には顔自慢な妓がもて申すとかや但し髪のはつれ毛の儼知りたくば

呼つけの髪結に閉け石門の外に入船亭とて一杯屋あり。石門を出で現金亭より一直線に進めば連歌濱の松原ついき、懸轆たる機械の響四隣に轟き滾々たる煙筒の煙天に漲り朝に集る米夕に之を散じつゝあるは乃ち野精米所にして若松港白米の供給者は實に同所といふも不可なし若松電燈會社も此邊に設立せらるゝべく其の資本金は五萬圓にして株式組織なりと星野牛乳搾所は精米所より遠からず。精米所の見物を終へて明治町に戻る同町は一丁目より三丁目に分たれ一丁目には中西材木店岡崎金物店貸本屋玉山堂あり三丁目には若松氷室あり荒物商の天野伊藤酒屋の阿部共に顧客少なからず三丁目の中央より東西に西新町あり一丁目より二丁目に分たれ又た明治町二丁目と三丁目の界より東西に松ヶ枝町あり

市中案内

市中案内

之も一丁目より二丁目に分たれあれど、目立つ程のもの無し。三内町は三箇丁に分たれ、若松活版所は注文多く活字鮮明にして手際も尋常ならず、有馬の耶蘇教講義所は時に未來を説き、内田は建築の請負を爲し、遠藤製粉所、大庭染物屋、いづれも好景氣、三丁目の旭橋を渡れば、煉化の垣をめぐらせる大廈あり、是れ旭座とて結構壯麗の劇場なり、明治二十七年の設立にかゝり、川上音次郎がヤンヤ／＼の喝采を博せし以來、名優の乗り込むもの多く、四季殆んど絶へ間なく興行しつゝあり、中川筋の運河は新地町の船碇繋場に通じ、尙ほ野精米所の傍を過ぎ、連歌濱に開鑿せらるべく、只だ速かに竣功して、一方に悪水の排斥を爲し、他方に運輸の便利を圖らんことを望まじけれ。旭座の一幕見物の目を新たにし、三福亭に立寄て一杯元氣を養ひ、

市中案内

其れより修多羅に行かん、一望土地の小高き處、蔚然天を刺す洋館は、即ち若松無雙の建物、筑豊抗業俱樂部なり、抗業者相互の懇親を結び、團躰を強固にし、茲に抗業の發達を謀るの目的を以て、筑豊の抗主四箇月間の醜金を爲し、昨年五月十六日落成式を擧げたり、其の後幾ならずして、現に外務大臣たる大隈重信伯が、佐賀縣に歸省し、頓がて歸京せんとする途次、若松を過ぎ、全俱樂部に至り、樓上に於て一場の注意的演説を試み、總理大臣兼大藏大臣松方正義伯も、亦た若松を過ぎ、抗業者に向て談話を爲したり、正門より入れば、左室は事務所にして、右室は玉突室、樓上にも華美なる談話室あり、抗業者は閑暇に乗じて、此處に集り、或は必要の相談を爲し、或は球術の巧拙を争ひ、或は庭園に降りて弓術を競ひつゝあり、有益にして消樂多き場所といふべし。

市中案内

石峯高等小學校は、將來有望の子弟を教育するところ、教員其の人を得、教場亦た整頓して、男生二百二十一名、女生七十七名、生徒の通學する、遠きは戸畑、藤木よりす、位置は筑豊石炭坑業俱樂部の裏手、修多羅尋常小學校も、全俱樂部の左側に在り、可愛の少年登校する者多し、安養寺は淨土宗にして、願生山と號し、那珂郡住吉村妙圓寺に屬す、本尊は惠心僧都の作たる阿彌陀如來、天文年中、豊後の入行明覺阿上人の創建せしところ、數々祝融氏の災に罹りて、舊記なく、現今の堂宇は明治十五年の再建にかゝれり、此邊に土木仲士の請負を爲す古川組及び古田組あり、勞働者の居農夫の家の間を、めぐり、中丸に出づれば、山に添ふて境幽に、三菱、築港兩會社の社宅設けられ、松杉、鬱鬱と繁げれるところ、石階を拾ふて登れば、白山神社あり、養して高塔山に登る、頂上の松老ひて高く、天を摩し、四顧

市中案内

の眺望絶佳、此處より金比羅山に移り、海難よけの祈禱を社に籠め、社頭の石に踞し、仰て橋山を見れば、吾に揖するが如く、筑豊の嶺、防長の嶽、濃霞淡靄の間に隱見す、俯して洞海を瞰れば、舟楫の相啣み、白帆の相接するより、鐵車の往復、若松港内の白聖粉壁はいふ迄もなく、沖船の櫓林立するさま、さては戸畑、中島の光景、尾倉、枝光の村落、鹽家の煙さへはのくと立のぼるを見るべし、殊に春秋和暄の候は、瓢を腰に登山するもの少なからず、仲秋三五の月に浮かれて、此處に來んか、東山の吐き出す圓かの影は、清風に碎かれて水上に落ち、模糊として燈火の諸處に閃めく奇觀あらん。

石階を下りて、右手に稻荷神社に詣で、再び下りて、右手は筑豊鐵道會社の社宅軒を並べ、左手に行きて、豊田の藥湯に一浴し、東すれば若松停車場に還るべし、此邊に、八坂、丸五、荒木、久留米等の運輸店

市中案内

あり、田中組は仲士等の請負を爲す。是より再び若松に入りて新地町西本願寺派の轉法輪山極樂寺は寛正元年道了の開基なり、此寺も嘗て火災に罹り、舊記の如きもの悉く烏有に歸し、明治十三年再建せりとかや、五代の住職智秀といへるは、道徳堅固にして深く、太宰府天満宮を尊信し、月々遙々の参拜怠らず、或る日も例の如く月參を終へて、歸路穂波郡天道驛に宿しけるが夢に菅公一枝の梅花を携へ來りて賜ひしと見、智秀うれしさの餘り、覺めて枕邊を見るに「折らるゝも折るもつれなし梅の花」と記るせる短冊さへ添てありければ、智秀隨喜の涙に咽びつゝ、そを持ち歸りて、寺庭に挿せしが、枝繁りて八重の花紅白に咲き分け入りと傳ふ、今は年老いて古株より小枝を生むぬ、三丁目の日本鐵油株式會社は遠からず新築すべく、仲士請負には井上あり、小畑

市中案内

藥局は小倉より、軍醫出張して、診察いと丁寧なり、旅館には志賀荒物店には柳あり、料理屋の愉快亭より、碓氷繁場に出づれば、數多の船此處に群がり居れり、過る年までは此邊一帶鹽屋の煙たなびき、漁夫の住家なりしに、今は唯だ二三の網夕陽に名残を痕るのみ、碓氷繁場の如きは、坑業者に次で若松の珍客たる船夫に便利を與へん爲め、四萬以上の大金を投じて築造せられしといふ、船業組合事務所は數千の船を監督しつゝあり、其の事務亦た閑ならず。新地橋を渡りて二丁目には、大ノ浦炭坑出張所、内田の米穀店、安西、安の兩石炭問屋、古谷の古物店、中西の陶器店あり、一丁目には、香月藥店、鶴田時計店、淺海醬油屋、香山紙店、松本壘店、柴田荒物店、金光石炭問屋、金川古着店、島瀬呉服店、又ツた白水女小間物店、次から次ぎへ軒を并らべ、いづれ劣らぬ繁昌なり、それより右に折るれば辨天